

我が水軍は全羅道の南端巨濟島及び閑山島附近に於て韓將李舜臣の爲に支へられ、一勝一敗の消耗戦となつて、黄海を乗り切り、平壤や新義州に連絡して、明國への侵入を後援することは出来なかつた。斯の如き状態であるから軍需の補給も充分でなく、現地調辨を計劃しても、支那や朝鮮で名物の流言蜚語が盛んに行はれ、民心漸く動搖して、諸處にゲリラ戦が起らんとする情勢となつた。八月二十九日には明人沈惟敬が平壤に小西行長を訪れて和議を申し込んで居る。

此の沈惟敬と云ふ奴は支那でも輕薄才子を産する南方の越の出身で、小智慧があつて辯舌の才があり、北京あたりの女郎屋の牛太と友達になり、その牛太が嘗て對馬に居つたと云ふので、その因縁で日本の事に通曉して居ると云ふ怪しき代物である。此の沈惟敬は日本を籠絡し得ると稱して明國の宮廷に賣り込み、小西行長に面會した時には行長が漢文にも通ぜず、支那の事情も知らず、國際儀禮の何たるかも解しないのに乗じて、奴、いゝ加減の辯茶羅を竝べ、明國と日本との双方を欺いて

旨いことをしやうと云ふのである。併し何と説き落したのか、行長に和議を進むることに同意せしめ、五十日間の休戦を約せしめたのである。秀吉の方では明國を征服して皇居をそこに遷す考へで居たのに、明國の方では日本を屬國扱ひにし、秀吉を封じて倭王となすと云ふが如き了見で居たことが、後に至つて暴露されたのであつたが、少くとも日本の銳鋒は、一時沈惟敬の舌鋒によりて挫かれ、戦は停頓状態になつたのである。

明國と韓國とでは元來謀略の爲に和議を進めたのであるから、日本が休戦状態にあるのは、彼等にとりては何よりの事である。彼等は此隙に頻りに諸道の兵を募りて蠢動すると共に、益々沈惟敬をして口舌を弄せしめながら、日本軍の油断を見透して、大舉來り侵すに至つたのである。そこで浮田秀家とか、加藤清正とか、鍋島直茂とかは大に激昂して、所在に敵軍を討ち破り、小西行長も蹶起したが、遂に明の驍將李如松の爲に大敗せしめられたのである。此の勝ち誇つたる明の大軍を迎え

討つて漸く引目となりし日本軍の爲に、萬丈の氣焰を吐いたのが碧蹄館の一戦である。そこで本文に入る。

十一月、眞茂、三千人を以て、韓將李希得と、咸興の北に戦ひて之を走らす。斬首千餘級、清正盡く咸鏡の二十二管を收め、遂に北道より長驅して遼東に入るを議す。未だ果さず。行長も亦、惟敬の期を過ぎて至らざるを以て、乃ち怒り、令を軍中に下して曰く、「皆行具を修めよ。吾將に馬に鴨綠江に飲はんとす」と。義州、之を聞き荷擔して立つ。韓王、書を飛ばして明に告ぐ。

文祿元年十一月、鍋島直茂が三千人の兵を以て、韓將李希得の兵三萬と、咸興の北方で戦ひ、之を撃破して千餘級の首を斬つた。此の鍋島直茂は加藤清正の北進に際し、永興に在りて留守番をして居つたのである。そこで加藤清正は盡く咸鏡道の

二十二管區を收め、北道から長驅して遼東に攻め入ることを評議するに至つた。小西行長は沈惟敬に欺かれて一時休戦を肯んじたが、彼も亦決して凡庸なる臆病者ではない。沈惟敬が約束通りに事を運ばず、時期を過ぎて消息がないのに業を煮やし、怒つて軍中に令を下して曰く、皆な行軍の準備をしる、我れ將に馬を鴨綠江に飲はんとするのだと。義州では之を傳へ聞き、逃げ仕度の荷からげをして立ち騒ぐ有様である。そこで韓王は書を飛ばして、急を明國に告げた。

義州荷擔して立つとは、狼狽の有様が見ゆるやうでないか。

二年正月朔、如松、肅寧に至り、裨將查大受をして先づ順安に往かしむ。行長喜び亦一將をして、二十人を以て順安に會せしむ。大受、誘ひて與に酒を飲む。伏起る。二十人搏戦して其の三人を亡ひ、走りて平壤に還る。行長、大に驚く。丹波の人内藤如安、行長の侍史と爲り、小西氏を冒し、飛驒守と稱す。是に於て、行長、如安に命じ、往きて如松を詰らしむ。如松、慰解して遣り還す。而るに六日、諸軍を以て平壤に薄る。行長、宗義智等と急に守備を修め、

使を馳せて鳳山に告ぐ。使者未だ歸らず。如松已に先鋒を以て含毬門を攻む。我が兵、撃ちて之を卻く。其の夜、出でて李如栢の營を襲ふ。利あらず。其の明、明軍大に至る。如松は小西門を攻め、如栢は大西門を攻め、吳惟忠、賂尙志は北門を攻め、祖承訓は南門を攻む。承訓、奇功を立て、前敗を償はんと欲し我が韓人を易るを知るや、其の兵をして皆韓装を尙へ、故に踏阻して進まざらしむ。行長以て韓人と爲し、専ら西北を拒ぎ、自ら銃手を率ゐて、撃ちて如松を卻く。如松益々大礮、火箭を用ひ、毒烟、城を蔽ふ。我が兵、殊死して戦ふ。承訓、則ち韓装を脱ぎ、明甲を露し、鼓譟して登る。行長驚き、急に兵を分ちて之を拒ぐ。而して西北即ち陥る。行長退きて牡丹臺を保つ。明軍、四面より堞を攀づ。我が兵、力め拒ぎ、力槍攪り垂る。堞、蝟毛の如し。明軍の死傷數千人、抜くこと能はず。退きて城外に營す。行長の將木戸某、説きて曰く、「鳳山の兵、來り援けず。吾、孤城を以て大敵に抗す。終に支ふべからず。蓋ぞ退きて諸將に合し、再舉を圖らざる」と。行長之を然りとし、即夜、潛に衆を率ゐて城を出で、江に至る。江冰、方に合ふ。踏みて渡り、鳳山に至る。大友義統、已に遁れて國都に之く。黒田長政白川に在り。敗を聞き、兵を引きて行長を迎へ、代り殿して退く。明軍、敢て追躡せず。

終に國都に至る。韓人之を聞き、所在竝び起りて、以て明軍に應ず。

併し一度び和議に耳を傾けたことは、何としても日本軍の不覺であつた。明の李如松と云ふのは折柄寧夏戦からの凱旋將軍であつて、天下無雙の材武と云はれた男である。彼は拔擢せられて大將軍となり、其の部下に六將軍を従へ、秀吉を討伐すると稱し、意氣軒昂、急遽鴨綠江を渡つて南下して來たのである。

そこで本文に移つて

文祿二年正月元日、李如松は肅寧に到着し、部下の副將查大受をして、先んじて順安に往かせた。查大受は人を派して小西行長に來り告げしめて言うには、「沈遊擊（沈惟敬は明國の宮廷に用ひられ、遊擊將軍の官職を受けて居る）が來て約束通りの和議が出來ました」と。

行長は大に喜こんで一人の大將に二十人を附し、先方と順安に會見させることに

した。查大受は此等の人々を誘うて與に酒を飲ませたが、そこに忽ち敵の伏兵が起つた。二十人の者は肉搏して戦つたが、其の三人は戦死し、其餘は逃れて平壤に還つて來た。行長としては意外なことで大に驚いた。そこに丹決の人で内藤如安といふ者があり、行長の秘書となり、小西氏を名乗り、飛彈守と稱して居た。行長は此の如安に命じ、李如松の所に往きて詰問させたが、李如松は宥め諭して送り歸した。しかも彼は猶も圖々しく一月六日には、諸軍を率ゐて平壤に薄つた。小西行長は宗義智等と急に守備を修め、一方には使を馳せて後方にある鳳山に急を告げた。然るに鳳山への使が未だ還らない先に、李如松の先鋒は已に含毬門に攻めかゝつた。

我兵は之を撃退し、其夜に李如柏の陣營を襲ふたが、此の夜討は有利でなかつた。そこで其の翌朝、明軍は大舉して迫り來つた。李如松は小西門を攻め、李如柏は大西門を攻め、吳惟忠、駱尙志は北門を攻め、祖承訓は南門を攻めるのである。此の祖承訓は曩に日本軍を侮りて小西行長の爲に順安で大敗させられた男であるが、今度

は奇功を立て、前の敗戦の恥を雪がんとするものである。彼は日本軍が韓人を侮ることを知つてゐるので、其の兵をして皆な韓人の服裝をさせ、わざと踏躡逡巡して進ませなかつた。

行長はこれを以て韓人と思ひ込み、此方に力を注がず、専ら西北を距ぎ、自身で鐵砲組を率ゐる如松を撃退せんとした。李如松は益々多く大砲と火箭をつかひ、毒煙天を蔽ふ有様であつたが、我兵は決死の覺悟で應戦した。こゝに機會を得たる祖承訓の軍は韓の服裝をぬぎ捨て、明の鎧を露出し、鼓を鳴らし関の聲を揚げて攻め登つた。行長は驚いて急に兵を此方面に分遣して拒いだが、其爲西北が手薄になつて此方面が陥落してしまつた。行長退いて牡丹臺を保つたが、明軍は四面から城壁を攀ぢ上つて來た。堞とは垣に物見の爲の穴と銃を討ち出す爲の穴とをあけたものである。我兵は力戦して之を拒ぎ、堞内から突き出した刀槍集まり垂れて、城壁は針鼠の毛の如く、明兵の死傷は數千人に及んで、牡丹臺を抜くことが出來ず、退却し

て城外に屯した。

そこで行長の將木戸某が説いて曰うには、鳳山の兵は來り援けもしないのに自分は孤城を以て大敵に對抗しても、到底支ふることは出來ぬ。どうかして退いて諸將と合體し、再舉を圖られないかと。行長は之に同意し其晩潜かに衆を率ゐ城を出で、大同江にさしかゝつた。丁度いゝ具合に、舊曆正月八日の夜、河の氷がまさに張りつめた際である。行長の軍は氷を踏んで河を渡り鳳山についたが、此處に駐屯して居た大友義統は風を喰つて已に京城に逃げた後である。此の大友義統は後に秀吉の爲に處罰せられ其家を亡ぼした。黒田長政が白川に在り、敗報を聞いて行長を我陣に迎へ之に代り殿軍となつて退却した。

明軍も此の陣容を見て敢て追ひ討ちせず、無事に京城に引きあげた。さあ驍悍無雙の小西行長が敗退したといふので、韓人は各地に蜂起して明軍に應ずるやうになつた。

宋應昌等謀りて曰く、「秀吉の將帥、皆王城に萃る。而して加藤清正は孤軍を懸けて咸鏡に在り。聲聞通せず。虚喝して取るべきなり」と。辯士憑仲纓をして、譯を以て清正に説かしめて曰く、「和、故無くして韓を攻む。韓、急を明に告ぐ。明の皇帝大に怒り、大兵を遣して韓を救ひ、平壤を復し、開城を復し、遂に國都を復す。浮田、小西を擒にし、盡く其の兵を逐ひ、琉球、暹羅の諸國をして和境を壓せしむ。而して足下、猶ほ韓を守りて、誰のためにせんと欲するか。皇帝、足下の高義を聞き、使臣をして、爲めに之を報告せしむ。足下の計を爲すに、速に韓の王子を返し、軍を收めて和に歸るに若くは莫し。否ずば則ち明軍四十萬、韓軍を驅りて東し、直に安邊に萃らん。足下、明を服せんと欲すと雖も得んや」と清正、侍史をして之に答へしめて曰く、「清正、國命を奉じて戦ふを知り、明令を聽きて和するを知らざるなり。歸りて明王に語げよ。我に敵甲冑兵有り。近ごろ事無きに苦しむ。貴國來り伐つとは、已に命を聞けり。而して咸鏡の途は險阨、騎は比行すべからず、卒は列を成すを得ず。兵の來る、日に一二萬のみ。吾迎へて之を撃ち、日に一萬を殺さば四十日にして之を殲さん。日に二萬を殺さば二十日にし

て之を殲さん。既に殲して西に指し、遼を渡り、燕を破り大鵞を海東に奉せん。清正以て復命すべし」と。仲纓、走り歸る。

明の國の御史の役をして居る宋應昌等謀りて曰く、秀吉の將帥皆京城に集まつて居るのに、加藤一人懸軍長驅して孤軍を提げて咸鏡にある。彼には音信も連絡も通じはしない。虚喝して嚇かして取つてやらうと。

そこで能辯の士通譯・馮仲纓の通譯を介して清正に説かして言ふには、「日本は故なくして韓を攻めた。韓は急を明に告げた、所が明の皇帝が大いに怒り大兵を遣はして韓を救はんとし、既に平壤を復し、開城を復し、遂に國都を恢復した。浮田小西は捕虜となり其の兵は盡く追つ拂はれて居る。たゞにそればかりぢやない。今や琉球や暹羅の諸國をして日本國境を壓せしめて居る。然るに足下は韓を守つて居るが、誰の爲にして居るのであるか、明の皇帝は足下が義理堅い人間であるとい

ふことを聞いて、私を使にして之を報告せしめられたのである。足下の爲に考へてあげるが、速かに兵隊を收めて日本に歸るのが一番よい。さうしないと、明軍四十萬が韓兵を驅りて東に進み、直ちに安邊に參りて退路を絶つだらう。さうなつた曉には足下が明に降參しようとしても、それはもう遅いと。

そこで清正、祕書官をして答へしめて曰く、清正は日本國の命令を聽いて戦ふことは知つて居るが、明の號令を聽いて和するやうなことは知らない。俺は日本の清正だ、明國皇帝からの御指圖は一寸筋違ひで御坐らう。お前は歸りて明王に語れ、我に憚りながら破れた鎧と凋んだ兵とがある。(堅甲利兵の反對の言葉、いやに卑下して曰ふ)。近頃相手がなく無事に苦しんで居るが、貴國の方から來り討つといふ御命令は畏こんで御受けする。然るに咸鏡の道は險しくて狭い、騎兵は並んで行くことは出来ない。兵卒は列を爲すことが出来ない、兵の來ること日に一、二萬に過ぎないだらう。我之を迎へ撃ちて、日に一萬を殺さば、四十日にして四十萬を殲す、

日に二萬を殺さば、二十日にしてこれを殲す。既に殲さば、西を指して遼を渡り、燕を破り、明國皇帝をとつ擱まへて、お車のお伴をして日本にお伴をしたならば、清正は國命に御答へすることが出来る次第である。と仲櫻はびつくりして逃げ歸つた。

戦が長くなると和平宣傳が始まる。干渉が試みられる。これは歴史の常である。前回の歐洲大戰に於て、獨逸は和平宣傳に引きかゝつて、國內の士氣を頹廢せしめ、愈々和議に取りかゝると、宣傳とは全く異なる苛酷なる降服條件を強いられた。和平は戦争の結末である。戦争に勝ちても和平に敗るれば、結局の負けである。闘志がにぶると和平に耳を傾け易い。ほんとの見識がないと敵に瞞さるゝ。小西は惻巧だが瞞された。加藤清正は決心して居るから敵に乗ずる機會を與へない。考へて見ると、清正は懸軍所隔して、威鏡北道から國境を越えて、兀良哈まで行つて居る。本國との連絡がなくなると、誰でも心細くなり、兎や角く思ひ煩らうと敵に瞞され

易い。然るに、清正の應對ぶりは小氣味のよいほどはつきりして居る。

彼は庶民階級の出身で、外交には經驗なき鍛冶屋の大將である。それで腹がきまつて居るから、外交談判に少しも遅れを取らん。瞞しに掛けて來たやつを、逆に冷やかして、嚇しつけてやるやうな見識があり、力がある。かういふことはインテリでは駄目である。これは陸軍大學や帝國大學を出た以外に、實踐上の修養を要する問題である。朝鮮征伐も少しく日本の引目となり、小西行長が平壤方面で大敗して南に退いた際、友軍とかけ離れて天涯の外にある清正が、此の毅然たる應對振りは實に日本精神の權化と云ふべきである。彼は死を決して居る、故に心に迷ひが起らないのである。

是の時に當り、明軍勝に乗じ鼓行して東す。國都の將吏、大同以東の諸城をして、守を撤し

て來り會せしむ。諸城、皆命を聽く。獨り小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂と、肯んぜずして曰く、「吾が輩、力を竭し國に報る、固より今日に在り。且つ明軍、勝ちて驕る。與し易きのみ」と。三奉行、之を促すこと甚だ急なり。乃ち退く。未だ王城に至らざること三十里にして軍す。明軍、進みて開城に入り、遂に臨津を渡る。查大受、其の先鋒と爲り、宗茂に礪石嶺に値ふ。宗茂撃ちて之を破り、百餘人を斬る、如松乃ち盡く其の軍を引きて至る。隆景、三萬人を以て碧蹄館に邀撃し、大に戦ふこと良久し。宗茂、秀包と横に之を撃つ。如松、初め火器を以て平壤を襲ひ、一戦して志を得、謂へらく、「和兵復長るるに足らず」と。乃ち輕としく進みて銃礮を具へず。短兵を以て接戦す。我が軍、兵銳く双利し。縦横に揮ひ撃ち、人馬皆倒る。敢て其の鋒に當る莫し。我が兵の呼聲、天を動す。遂に大に明軍を破り、斬首一萬、殆ど如松を獲んとす。北ぐるを追ひて臨津に至り、明兵を江に擠す。江水之が爲めに流れず。如松痛哭すること徹夜、敗軍を聚め、退きて坡州に入る。

明韓の軍は平壤の大將を謀略的に利用することを忘れなかつた。彼等が懸軍所隔

の加藤清正を虚喝して咸鏡道より追ひ拂はんとし、却て清正に擲擲されたのも其際である。小西も克く戦つたけれども、連絡が取れず、援兵も來ないので、激戦の後退却したのである。そこで明軍四十萬勝に乗じ、太鼓を打ち鳴らしながら勢ひ込んで東に進んだ。國都京城にある日本側の將軍や參謀は、大同江東の諸城に駐屯せる我軍に命令し、其守りを撤廢して京城に引上げて來いと言つた。

諸城は皆命を聽いて引上げたが、獨り小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂等が之を肯んじない。小早川隆景は天下の智將である。秀吉が碁を打つて其手に窮するや、こうなつては小早川の智慧でもどうにもなるまいと言つた程の男である。此の小早川は最初小栗等が急進論を唱へ、水軍の到着、後方の連絡も待たず、假令砂を咬へても直に燕京に迫ると、主張した時には自重論を唱へ、小早川の兵隊は砂を咬んでは、生きて居られないから同意しかねると言つた人である。

此の小早川がこうなつた場合、今度は退却に同意しない。曰く「我等の兵隊は御

蔭様でこれまで米を喰はせて戴いて居る。砂を咬んでは辛棒出来ぬが、こゝ一つ踏んばらねばならぬ。吾輩力を竭して國に報ずるは、もとより今日の場合にある。且つ明軍は戦ひに勝ちて氣驕つて居る。こんなものをやつ付けるのは何でもない」と。本國から派遣せられて居る石田、増田、大谷の三奉行は之に反對し、引揚を促すと甚だ急である。こんな風で軍令が嚴しいので查大受といふのが先鋒であつて、その先鋒が立花宗茂と礪石嶺に遭遇した。この立花宗茂も亦名將であるが、忽ちこれを撃つて百餘人斬つた。そこで李如松は全軍を率ゐてやつて來た。小早川隆景は三萬人を以て此の四十萬の明軍を碧蹄館に邀へ、稍、久しく大戦を交へた。そこに立花宗茂と毛利秀包とが横合からこれに撃つて掛つた。如松は初め大砲や火箭を用ひ火器の利によつて平壤を襲ひ、一戦して志を得たので、肚の中で、日本の兵隊なんか畏るゝに足らぬと考へた。そこで輕々しく進み銃砲を具へず、白兵戦の接戦をやつたのである。

昔から斬合になつて來ると日本得意の壇場である。我兵は鋭く刃はよく切れる、縦横に揮ひ撃つて敵の人馬觸るゝ者皆倒れ、敢てその鋒に當り得る者がない。我兵の呼聲は勝に乗じて天を動かし、遂に大に明軍を破つた。斬首一萬、李如松も危く仕留めらるゝ所であつた。逃ぐるを追ひて臨津に至り、明兵を江に押し落した。そのため、水が流れない程である。李如松は餘程口惜しかつたであらう。夜を徹して泣き通し、敗軍を集めて坡州に逃げた。明軍勝ちて驕る興し易きのみ、と小早川隆景が言つたのと、李如松が一戦して志を得、火器銃砲を携へずして迫り來つたのと照し合せて隆景の見識が見えるやうである。

長期戦、糧食糧、龜甲車

秀吉、毛利秀元・加藤光泰・細川忠興等の七將をして赴き援けしむ。三月、晋州を攻む晋州

城は險なり。韓王の奔るや、其の重器を置き、精兵二萬を以て之を守らしむ。七將、皆大に敗れ退きて都城に入る。都城の傍に龍山倉有り。我が兵、食を仰ぐ。查大受・李如梅、兵を潛めて倉を火く。而して金命元等、臨津の南に軍し、我が糧道を絶つ。已にして我と明軍と、皆大に疫す。三奉行、糧竭くるを以て、退きて釜山を守らんと欲す。光泰曰く、「糧竭くれば寧ろ砂を食はん。國都は棄つ可からざるなり」と。清正も亦、之を争ひて曰く、「吾、孤軍を以て強胡數萬を破る。明韓の兵、何ぞ意と爲すに足らん。何ぞ其の糧を奪はざる」と。三成曰く、「公宜しく往きて奪ふべし。助を人に取るを得ず」と。清正曰く、「諾」と。即夜、手兵を以て明軍を襲ひ、糧を奪ひて還る。

日本軍は文祿元年四月十八日、釜山の上陸作戰に成功して以來、到る所破竹の勢あり、電撃また電撃、韓と明との心膽を寒からしめた。しかし水軍は關釜海峽から黄海に至るまでの制海權を確保して、陸軍の前進に追隨することができない。殊に八月二十九日、明の使者沈惟敬が和平謀略を提げて小西行長に働きかけてより以來、

流言蜚語とゲリラ戦が所在に行はれ、小西行長が平壤に大敗して京城に還るや、調子づいた韓人は、丁度支那民衆が米英に躍らせらるゝやうに到る處に蜂起して、益々討滅し難きを示すに至つた。文祿二年一月二十六日、碧蹄館の一戦は日本軍の爲に萬丈の氣焰を吐いたのであるが、全面的動搖は如何ともすることが出来ない。日本の諸將は各地に韓人の地方部隊と挑み合ねばならなくなり、京城さへも不安なので、韓人のために鬼將軍と恐れられし加藤清正を北方より召還せねばならなくなつた。碧蹄館の敗將李如松は臨津に留まつてゐたが、清正に退路を絶たるゝを恐れ始めて平壤に退いた。一時、日本軍の軍容盛大にして、「國都より釜山に至るまで數十城、烽火相應じ、皆な我兵の守る所なり、名護屋の行營と聲息相通ず」と記されたのに比べると、戦況は正に長期戦の形相を示し、日本軍は漸く受け身となつて來たのである。そこで本文に返り、

秀吉は毛利秀元、加藤光泰、細川忠興等の新手の七將を遣して、援軍に出かけさ

せた。此の援軍なるものは、進んで明軍を逆襲追撃すると云ふやうな積極的行動に出で得るものでない。京城から釜山に通ずる後方連絡が、各地に於て脅やかさるゝので、南鮮を肅清して前線を安全にしやうといふのである。そこで此等の日本軍は三月に晋州を攻めた。晋州は慶尙南道の南方にあり、釜山から直ぐ近くの所にある文祿元年の春には既に遙かに明國の國境まで北進してゐたと傳へられて居た日本軍は、二年の三月になつて、こんな朝鮮の玄關先で戦はねばならないのである。

晋州は要害の城であり、韓王が出奔した時にはその大事な重器を此處に置き、精兵二萬を以て守らせて居たのである。七將はこれを攻めたが皆大敗してしまひ、退いて晋州を其儘にして都城に入つたが、後方連絡は依然として危険である。都城の傍に龍山倉あり、今の龍山であつて我軍の食物を仰ぐ穀倉がある。查大受、李如梅等がそつと兵を潜めて倉を焼いてしまひ、しかして金命元等は臨津の南に軍し、我が糧道を絶つた。南は聯絡が遮断せんとし、北から兵糧を持つて来ようとするれば、

北方の糧道も絶たれて居るのである。その中に我軍も明軍も悪疫が流行つた。そこで總司令部の三奉行は兵糧が盡くるので、退却して釜山を守る積りになつた。

然るに加藤光泰が言ふに、糧が盡きたならばむしろ砂を食ふがよい。國都は斷然棄てゝはならないと。加藤清正も亦退却論に反對し、争ひて曰うには、我輩は孤軍を以て強い胡兵數萬を破つたことがある、明韓の兵なんか敢て意とするに足らない。何で兵糧を奪はないのかと。石田三成が言ふに、貴公宜しく往つて糧食を奪つて来い。人に助けて貰ふ譯には行かぬぞと。清正曰く、諾とその晩、手兵を以て明軍を襲ひ、糧を奪つて歸つて來た。

もう此の時期になると、智謀派の才將と前線派の猛將とは、完全に意見が對立して居る。清正は冷徹なる才將の言論に對し、果敢なる實行を以て應答したのである。

時に如松、沈惟敬をして和を計らしむ。惟敬、北京に赴き、報じて曰く、「秀吉、日本國王に封ずること、足利氏のご故事の如きを欲するのみ」と。因りて石星と議を定め、韓の都城に來り、厚く行長に賄ひて曰く、「太閤、韓俘を歸さば、即ち慶尙・全羅・忠清の三道を割き、封じて王と爲さん」と。行長等、素より不學、封王の故事を諳んぜず。以爲へらく、「明に王たるの謂なり」と。之を許さんと欲す。已にして其の非を知る。惟敬、巧に之を彌縫す。清正、其の議を可かず。行長、三奉行と、皆歸るを懷ひ、乃ち秀吉に報じて曰く、「明人、殿下を尊びて皇帝と爲さんと欲す」と。秀吉即ち和を許す。惟敬、都城の兵を解かんと請ふ。諸將乃ち城を焚き、更と殿して東す。如松乃ち肯て進む。韓相柳成龍、之を尾撃せんと請ふ。乃ち李如栢等萬余人を遣す。我が陣の整ふを覩て、敢て迫らず。諸將、慶尙に至る。蔚山・東萊・金海・巨濟等の十八屯を起して、以て秀吉の令を俟つ。明王、孫鏞を以て宋應昌に代らしめ、劉綎・吳惟忠等を遣し、分ちて星州・居昌の諸城を守らしめ、而して謝用梓・沈一貫・沈惟敬をして、來りて秀吉に行營に謁せしむ。秀吉、明の使者を饗して之を還し、小西如安を遣して與に偕にし、清正の俘ふる所の二王子大臣以下を放還せしむ。大友義統、行長を救はざりしを以て、罰して其

の封を奪ひ、遂に在韓諸將をして、晋洲を屠りて前敗を償はしむ。

此時李如松は一面に於て抗戦しながら、一面に於て沈惟敬をして和平謀略をやらせて居る。沈惟敬は北京に赴いて、よい加減のことを報告して曰く、

秀吉は足利義滿の故事の如く日本國王に封ぜられん事を欲して居るのだと。そこで沈惟敬は明の司馬石星と評議し京城にやつて來た。石星は明の和平派である。沈惟敬今度は厚く小西行長を饗し、太閤が若し韓の捕虜を歸したならば、慶尙、全羅、忠清の三道を割き、封じて王としようと言葉巧に言ひ寄つた。

行長等は固より無學である。「封王」の故事等は知りはしない。謂ふにこれは明の王としようといふことだらうと有利に解釋し、彼の請を許さうとした。併し暫らくして面白くないことに氣がついたが、惟敬は巧にごまかして取繕つた。併し清正一人は其議を聽き入れない。行長及び石田三成等の三奉行は皆、望郷の急に堪へない

のである。即ち秀吉に報じて曰く、明人は太閤殿下を尊び皇帝となさんとして居りますと。そこで秀吉は始めて和を許した。

惟敬は日本の諸將に對し媾和が出来たから、京城の兵を解いてお歸りなさいと勸めた。そこで諸將は城を焼き、代り／＼に殿軍となりながら東に退いた。然るにこつちが退つたら向ふは圖に乗つて進んで來た。これは和平謀略戰の常である。韓の大臣の柳成龍は、日本軍の退くに乘じて追撃せんことを李如松に請うた。そこで、李如柏等、萬餘人を遣はして追撃させたが、退却しつゝある我軍の陣容が整然として居るので、敢て迫ることが出来なかつた。日本の諸將は慶尙道まで退却し蔚山、東萊、金海、巨濟等に十八の屯營を作つて待機姿勢を取り、和議成立後の秀吉の命令を待ち受けた。明王は孫鏞を以て宗應昌に代らしめ、劉綎、吳惟忠等を遣はし、夫々手分けして星洲居昌諸城を守らせた。しかして謝用梓、沈一貫、沈惟敬を日本に送りて秀吉に名護屋の行營で謁見するやうにした。

秀吉は明の使者を御馳走して送り歸し、小西如安といふ者を遣はし、沈惟敬一行に同行させた。かくて清正が捕へて居た二王子大臣以下を放還せしめ、大友義純は小西行長が平壤で敗れた時近くの鳳山に居ながら援けなかつたので、之を處罰してその領土を奪つた。そこで遂に在韓の諸將に號令し、退却するのは宜しいが、敗戦は許さないと云ふ積りか、晋州を屠つて曩の敗戦の恥を雪げと命じた。

六月、諸將、兵を合せて晋州を圍む。城兵益々熾なり。我が軍、濠を填め、竹楯を蒙りて仰ぎ攻む。城上、矢石注ぐが如し。清正、龜甲車を造り、牛革もて之を包み、載するに死士を以てし、城足を穿つ。樓櫓崩折す。清正、黒田長政と先登す。諸將之に繼ぎ、城將徐禮元・金千鑑等を斬り、六萬余人を虜にし、城池を夷けて還る。禮元の首を醜し、之を行營に獻じ、仍ほ故地に屯す。韓王大に驚き、之を明に訴ふ。李如松、沈惟敬をして、來りて行長に見えしめて曰く、「公等、和を許し、未だ十日にならざるに、晋州の事有るは何ぞや」と。行長怒りて曰く、

「汝、和を請ひて、明兵の韓に入る者益と衆きは、何ぞや」と。惟敬、語塞り、去りて北京に至り、石星に請ひて、如松以下を召還し、獨り劉綎・吳惟忠等萬人を留む。

六月、諸將兵を合して晋州を圍む。城兵益々熾なり、我軍は壕を埋め、竹の楯をかざして仰いで攻め寄つた。城の上から矢や石が雨を注ぐが如くである。そこで清正は龜甲車を造り、牛の皮でこれを包み決死の士を戴せ、城の足をぶち壊し、城の樓臺も、物見櫓も、打ち崩してしまつた。清正は黒田長政と共に先登し、諸將も之に繼ぎて進み城將徐禮元金千鎰等を斬り、六萬餘人を塵殺にし、城の池を埋めて引上げた。此の清正が造つた龜甲車なるものは、タンクの前身だと云ふことが出来る。清正はインテリでなく鍛冶屋出身の若者だから、こんな獨創的なことが出来たのである。

前回の歐洲大戰でタンクを工夫したのは英國であり、これは獨軍を惱まして、その敗因を作らしめた。そのタンクを今度は獨逸が最も巧妙に驅使して現にソ聯を悩まして居る。

『清正行狀記』といふ書には清正、肺肝を惱まして龜甲(口傳)を巧み龜の甲楯(口傳)三柄を拵へさせ、足輕三人を乗せ、石垣の角に漕ぎつけ、鐵挺を以て角石を刳ね崩させ云々と書いてある。

ガンリンを使はない厚生車式のタンクとも云ふべきものである。加藤清正と黒田長政とが晋州征伐の先登であつたらしいが、龜甲車の働きに伴ひ加藤の臣、飯田角兵衛と黒田の臣、後藤又兵衛とが一番乗り、一番首を争ひ、總大將浮田秀家の前で對決の功名争ひまでやつて居る。さて清正等は晋州を屠ると共に、城將徐禮元の首を鹽漬として名護屋の行營に獻じ、其儘侵略地に屯して待機した。

韓王は大に驚きて之を明に訴へた。李如松は沈惟敬をして行長に會見させ言はせた。君等は和を許しておき乍ら、十日も経たぬに晋州を屠るとは何事であるかと。

行長はお前の方で和を請ひながら、明の兵が益々多く韓に入るのは何事であるかとやり返した。沈惟敬は言葉が塞がり、去つて北京に行き、大司馬石星に請ひて李如松以下の者を召し還し、唯、劉綎吳惟忠等の一萬人を留めさせた。

明主、如安を疑ひて、敢て納れず。之を遼東に舍す。秀吉も亦、如安久しく還らざるを以て、惟敬、己を欺くと意ひ、日夜、軍事を謀議す。黒田孝高、私かに同僚に語りて曰く、「吾聞く『外征の諸將、威有りて恩無く、過ぐる所残滅せざる無く、夷民逃げ匿れ、野に青草母し』と。是れ其の地を得るも、果して何ぞ益せんや。且つ聞く、『兩先鋒、功を争ひて相闘ぎ、法令牴牾し、衆従ふ所を知る莫し。而して浮田宰相、之を制する能はず』と。夫れ浮田は、統御の才に非ざるなり。能く此の任に堪ふる者は、徳川に非ざれば即ち前田、若くは孝高のみ」と。

明王は、沈惟敬一行が歸るのに同行して送られた。小西如安を疑つて都には入れ

ず、これを遼東に留めて置いた。秀吉、亦も如安が歸らないから、これは惟敬が己を欺いたのだと思ひ、日夜軍事を謀議して居る。

そこに黒田孝高（如水）が秘かに同僚に語つて曰く、「自分が聞いてゐるのは、外征の諸將は威を加ふるを知つて恩を施すことを知らない。我軍の過ぐる所残り滅さざるものなく、夷の民共は逃げ匿れて、野に青草なき有様である。ではその地を得ても何の益になるか。百姓を耕作させずに踏み荒すだけでは、侵略地は何の役にも立たない。且つ、加藤と小西の兩先鋒は、互に功を争ひて闘み合ひ、軍政上の法令は行きつまつたり、衝突したりして、民衆はどつちに従つてよいか分らない。併も浮田宰相秀家はこれを制することが出来もしない。抑々浮田は統御の才でない。よくこの大任に堪へる者は徳川家康でなければ前田利家、然らざれば憚りながら、この黒田孝高であると」これは流石に智謀ある黒田如水の言である。

これと同じやうなことを私に言つたものがある。それは獨逸の元駐支代理大使フ

イツシャーである。彼は支那事變が始まつて丁度一年になる際に私に言うた。日本はやり損つて居る。日本の占領地には支那人がどしどし歸還するやうにせねばならぬ。杓子定規の細かい法令を出し過ぎると、不良の徒は胡魔化しをやり、善良の民は逃げるばかりである。そこに抗日宣傳が効果をあげ、ゲリラは益々熾んになる。法三章的に大まかな政治で支那人を安堵させることが先決問題であると。

黒田如水は先見の明があつて、宣撫工作の必要なることを力説して居るのである。戦つて地を略すると共に百姓に恩を施して耕作せしめ、租税を軽くし、生活を安全にすれば糧食位は占領地でまかなへるだろうと思ふ。敵地で糧食も取れないといふことは、武力は旺んでも、當年の日本軍が、まだ新秩序建設の能力乏しかりしを證據立つるものであらう。

抑々秀吉の朝鮮征伐は明を征服し、天竺に押し渡ると云ふやうな大理想から出て居るので、今日で云へば大東亞建設の第一歩を踏み出したものである。それにして

は先づ朝鮮に兵を用ふることは、賢明の處置でなかつたかも知れない。

其頃、泉州堺の町人に杉孫七郎といふ者が居つて、秀吉の朝鮮征伐を止めさせよと獻策した。彼は曰く朝鮮は大したことはない。支那も大したことはない。韓國や明國はそれほど經濟的に豊かでないに係らず、あすこには仁義忠孝の教へがあつてなか／＼愛國心が強い。一寸攻めには困難である。然るに南のルソン、(今のフィリッピン)ジャワ等、あの邊の民はまるで無抵抗である。そこにスペイン人がやつて来て居るけれども、彼等白人は極めて柔弱である。彼等をやつ付けるのは何の難作もない。朝鮮征伐なんかやめにして南方經路を御やりなさいと。此の獻策に對し秀吉は餘程頭を傾けた。併し南方經路をやるなら朝鮮を踏破つてそれからしようと考えた。若し此の時代に秀吉が眞に世界の事情を知つて居つたならば、先づ南進を斷行して、スペインを屈伏せしめ、一氣にして外來勢力を驅逐して居たかも知れない。

序ながら征服地を統治して宜しきを得るといふことは、今日も大に研究しなければならぬ問題である。ドイツは戦果を収めながら、大に心をこゝに用ひて居る。ウクライナに入つてはウクライナの民衆をどう扱はねばならぬか。これは戦争以前からロシアの中の小民族に國家主義を鼓舞し、ナチスの同志を獲得して占領地帯工作させる計劃を立て、居たのである。フランスに對しても一應うまく成功して居る。ヴィシー政府は、兎に角ドイツと協力するやうになつた。私はオランダにもデンマークにもベルギーにも相當苦心して居ると思ふ。ドイツは其の強い武力を充分に活用した。さて敵地を占領すると之を利用することが重要問題となつて来る。

過日、歐洲大戰の記録映畫を見たが、コンピエーニユの森でヒットラー總統が和議に臨んだ光景は甚だ面白かつた。前の大戦の時にも同じ場所である汽車の中で休戦條約を結んだが、フランス側はフォッシュ元帥が傲然と構へて足を机の上に載せてふんぞり返りドイツ側の使節には椅子にも坐らせなかつた。さうして談判するこ

とを拒絶して高壓的に命令した。ドイツではそれを非常に残念がり復讐心を燃やすに至つた。然るに先般ヒットラー總統がフランス使節と相對した時は、非常に謙虛なる態度で御氣の毒だといふ表情が一杯である。その挨拶にしても、光榮は戦勝者の側にあると共に戦敗者の上にもある。御互によく戦ひましたと云ふのであつて、媾和條約に調印すると直ぐ外に出てしまつた。私は勝つた時には對手に對して此位の思ひやりを有するのが大將たる者のたしなみでないかと思ふ。

フランスを叩き付けた後のヒットラーの態度、あれがヴィシー政府をして今日、ヒットラーに協力せしめるのぢやないか。人間は自分の心を鏡として相手方の氣持を察してやらねばならぬ。引目にある者に對しては溫顔と慈眼とを以て、これを慰めてやる氣持がなければならぬ。

日本が大きくなればなる程、其の精強無比なる力を示すと共に、敵人をも潤す溫い心が擴大されなければならぬ。日本人は家族的にはさう云ふ天分に豊かな所があ

る。これを推し廣めて世界人類に及ぼさねばならぬ。それが八紘一宇の宏謨を翼賛し奉る所以である。同時に日本の神武御東征以來、靡く者は赤子の如く愛するのが日本の傳統である。黒田如水は朝鮮征伐の初期に當り早くも民衆に對する政策に着眼し、單に猛威を振ひて敵地を踏み荒すだけでは、何の益にもならないと喝破して居る。これを今日の長期戦にあてはめて、好個の示唆を興ふるものであらう。

秀吉、側聽して之を首肯す。己にして、大に諸將を召し、行台に會議す。曰く、「朝鮮の事、今日の狀の如くば、則ち何れの時に決定らんや。乃公自ら往かざる可からず。吾、家康を留めて吾が邦を守らしめば、復顧慮する所無けん。今、國內の兵を擧ぐれば、少しと雖も三十萬を得べし」と。因りて諸將を顧みて曰く、「利家、汝五萬に將たれと曰く、「氏郷、汝も亦五萬に將たれ吾親ら十五萬に將として中軍となり、汝二人を左右にし、朝鮮を掃蕩し、直に明に入らん。疾く兵艦を具へよ。吾が意決せり」と。徳川公憐ばす。利家・氏郷謂ひて曰く、「二公群中に擢ん

でらる。榮孰れか焉より大なる。僕、少小より弓馬を事とす。今老いたりと雖も猶ほ以て一面に當るに足る。何ぞ居守を爲さん。二公、幸に之を推挽せよ」と。彈正少弼進みて曰く、「徳川公、復言ふ勿れ。臣、殿下の近狀を視るに、彼、野狐の憑る所と爲りしのみ」と。秀吉、沸然として、刀を扣へて跪きて曰く、「吾、狐憑たるは、説有るか。説無くば則ち死せよ」と。少弼對へて曰く、「説有るなり。饒使説無きも、臣固より死を辭せず。且つ臣等の頭の如きは、千百を到ぬと雖も、何ぞ惜しむに足らんや。顧ふに天下畿かに定り、瘡痍未だ愈えず。人人、休息無爲を希ふ。而して殿下は乃ち故無きの軍を興し、以て異域を殘暴し、我が父子兄弟をして、駭骨を海外に暴さしむ。哭泣の聲四もに聞ゆ。之に加ふるに、漕轉賦役の相因る、所在盡く荒野と爲る。是の時に當り、殿下一たび趾を擧ぐれば、則ち六十州の寇賊、雷動風起せん。徳川公有りと雖も、安んぞ之を鎮定するを得んや。是れ其の外征を願ふ所以のみ。臣恐る、殿下の舟師未だ釜山に達せずして、根本の地、已に他人の據る所と爲らん。是れ勢の最も親易き者、殿下をして平昔の心有らしめば、豈に此に察せざる有らん。此に察せず、故に之を狐憑と謂ふのみ。鄙語に曰く、「鼯人を啖はんと欲し、反りて人に啖はる」と。殿下の謂なり」と。秀吉益と怒

りて曰く、「狐か、鷹か。吾且く諸を舍く。臣を以て君を罵る、舍す可からざるなり」と。將に刀を抜きて之を斬らんとす。利家・氏郷、進みて之を擁して曰く、「臣等此に在り。苟も誅戮を行はんと欲せば、必ずしも親手を勞せず」と。因りて少弼を斜視して曰く、「去る可し」と。少弼乃ち徐ろに起ちて舍に還る。罪を待つこと數日、變事を上る者有り。「肥後の賊梅北、兵を擧げて佐敷城を取る」と。秀吉大に驚き、急に少弼を召して、謝して曰く、「吾甚だ汝に慚づるなり。汝の兒幸長に命じて大將と爲し、往きて肥後を定めしめん」と。因りて徳川公に命じ、其の將本多忠勝を以て之を助けしむ。未だ發せず。肥後の人、梅北を斬りて來り獻じ、乃ち止む。少弼に命じて其の國を按定せしめ、韓の戊卒を滅す。

秀吉は仄かに如水の言を聞いて成る程さうだとなづいて居た。そこで大に諸將を集め、評議をして言ふには、朝鮮のこと、今日のやうな状態であつては何の時に定るか解つたものでない。これは俺が行かねばならぬと。近衛文麿公は支那事變の長びくのは皆私の責任ですと言つたが、秀吉は其の氣持を積極的にして俺が乗り出

すと決意した。黒田如水の説も聽いては居たが、さすがに秀吉、難局に臨みてインテリ風に悔悟なんかしない。民に對する仁政も必要だが、第一に味方が大に強くなければならぬ。然る後に運用の妙は一心にあり、乃公自ら出かけると云ふのだ。そこで國の守りには徳川家康を留めて置けば後の心配は要らない。今、國內の兵を擧げるならば、少くとも猶三十萬は得られやう。そこで諸將を顧みて曰く、

利家、お前は五萬の將となれ、氏郷、お前も五萬の將となれ、俺は自ら十五萬を率ひて中軍となり、汝等二人を左右に従へ朝鮮を掃蕩して、直ちに明に入らう。さあ早く軍艦の用意をしる、我意は己に決したと。徳川公はその話を聞いて喜ばず、利家と氏郷に言ふには、君方二人は數ある大將の中から拔擢せられ、これより大なる光榮はない。私は少年の頃から（少は年が少ない、小は體が小さい、つまり少年の頃）弓馬を事としたものだ。今老ひたりと雖も尙ほ以て一方に當るに足る。どうして留守番などして居られようか。どうぞ私を推薦して出征させて下さいと。

そこに彈正少弼淺野長政が進み出た。長政は最初秀吉が信長に仕へる時に取り立て、やつた淺野長勝の養子で、其の妻君は秀吉の妻君と姉妹である。それ故、秀吉の家來とは云へ兄弟のやうな同志となつてゐる。(頼山陽は廣島の淺野家の儒臣であるから、特に敬稱を用ひ、長政を彈正少弼と言ひ、其子幸長を左京太夫と云ひ名を呼ばない。)此の長政であるから遠慮會釋なく直言するのである。彼は曰く、

私は太閤殿下の近状を見るに狐が憑いて居るのであると。秀吉は怫然として怒り、刀を扣へ膝を立直して我を狐憑と云ふは、相當の論據があるだろう、言分が立たなければ命がないぞと言うた。少弼答へて曰く、

固より論據があります。若し論據が無いにしても私は固より死を辭せないのである。且つ臣等の頭の如きは千や百到つても何も惜しむことはない。思ふに天下漸く定まり、戰國時代の疵がまだ癒へて居ない。人々は皆こゝで一つ休息して何にもしないで居たい所である。然るにあなたは理由も立たない軍を起して外國を損ひ荒し

廻つて居る。さうして我が父子兄弟をして骨を海外に曝させ、泣き悲しむ聲が四方に聞えて居る。そればかりではない。海運陸運の爲に人手を取り、賦役や徵稅等が相重なつて全國到る所已に盡く荒野となつて居る。この時にあたり殿下一たび足を擧げて渡海したら、六十餘州の賊が雷と動き、風と起つて大騒ぎとなるであらう。徳川公が居られてもどうしてこれを鎮定することが出来ませうか。これ、その外征を願はるゝ所以である。これは秀吉の近臣として、徳川はあんな事を言ふが、お前さんが外征したら徳川が天下を取つてしまふぞといふ諷刺にも解される。私は憂慮する、殿下の舟師未だ釜山に達しない中に、根本の日本の地が他人から取られてしまふだらう。こんなことは天下の形勢として最も見易い分り切つたことである。殿下に平常の心があるならば、この位のことを察しない譯はない、然るにこれを察しない、故に狐憑と言つたのである。いや狐憑どころぢやない、俗に鼈は人を喰はうとして、却つて人に喰はれると言うて居る。あなたは人に咬みついて、人に食はれ

るのだと。

秀吉は益々怒つて、狐か鼯か、そんな議論は姑く措かう。併し臣下の身分として君を罵るのは捨て置かれまいと。將に刀を抜いて斬らうとした。すると前田利家と蒲生氏郷が進んでこれを押し隔て、言ふに、臣等こゝに居る、苟しくも誅戮を加へらるゝのなら、あなたのお手を煩はすに及ばない。因りて彈正少弼に横目で目くばせして曰く、早く去れと。少弼は、徐ろに立ちあがつて宿舎に歸つた。そこで數日間罪を待つて居ると、丁度其際變事を申上げた者がある。肥後の賊の梅北が兵を擧げて佐敷城を獲つたと云ふのである。秀吉大いに驚き、急ぎ少弼を召して曰く、現にお前が言つたことが起つた、俺は甚だお前に恥入る次第である。汝の兒、幸長に命じて大將と爲し、この肥後の騒動を鎮定させやうと、之に就て徳川公に命じその將本多忠勝をして幸長を助けしむることゝした。が、未だ發しない中に肥後人が梅北を斬つて、其首を獻じて來たので、幸長の出かけることは沙汰やみになつた。そ

こで少弼に命じて肥後の國を按定させ、同時に韓國出征の兵數を減少して引揚げさせることにした。

秀吉は一たび憤慨はして見たが、大分工合が悪い。最後まで積極的に出ようとすると、淺野彈正少弼みたいな忠臣が居つて、内憂外患を警告する。此一章は長期戦の形相を述べて、種々の點から示唆する所が甚だ多いのである。

京畿大地震

五月、秀吉、秀頼を以て朝見す。詔して、秀頼を從三位に敘し、右近衛中將に任ず。六月、明、韓の使者海を濟る。我が諸將乃ち兵を釜山に留めて凱旋す。行長、清正を嫉む。清正、三成に悪しくして、行長、之に善し。與俱に之を譖す。清正、伏見に至る。秀吉、見るを許さず。乃ち増田長盛に就きて申救を請ふ。長盛曰く、「子、宜しく治部に謝すべし」と。清正曰く、「吾

死すとも能はず」と。乃ち第に歸りて命を俟つ。七月、京畿、大風蠶し、地大に震す。伏見城壞れ、壓死數百人あり。清正曰く、「吾寧ろ罪を犯すとも、坐視すべからず」と。乃ち卒二百を從へ、入りて秀吉を省る。秀吉、夫人と地に席して坐し、清正を目し、其の幼字を呼びて曰く、「阿虎、若來ること何ぞ速かなる」と。清正、因りて前みて寃を訴へ、地に畫きて語り、其の軍勞を陳す。秀吉顧みて夫人に謂ひて曰く、「彼肥哲の丈夫、今朝鮮より至る。何ぞ驚く且つ悴るるか」と。乃ち命じて其の門を守らしむ。三成以下踵ぎ至る。入るを得ず。命を傳ふる者有り「特に三成を納れよ」と。清正、大聲、其の卒に令して曰く、「短小の佞豎をして入らしめよ」と。且日、秀吉、清正を召見して、海外の戰狀を推問し、泣下りて曰く、「阿虎は襦袢より我に育はる。乃ち我に類するなり」と。遂に愛遇すること故の如し。

慶長元年五月、秀吉は秀頼を連れて 陛下に拜謁した。詔によつて從三位右近衛中將に任ぜられた。秀吉も年とるを共に凡夫の淺ましさに歸る趣がある。秀頼が生れたので之を立てたいのが動機となつて、養子豊臣秀次を誅したのがこの前年であ

る。其の後、徳川を懐柔する爲に淺井長政の次女を養女として秀忠に嫁せしめて居る。文祿四年の暮から慶長元年の春にかけて重病に罹り、段々娑婆のことが氣になるのである。病も癒へたので、秀頼を伴れて參内すると云ふ良き父親振りを示して居る。六月になつて明と韓の使者が初めて海を渡つた。それと同時に、日本の諸將は兵を釜山に留めて置いて凱旋して來た。行長は清正を憎んでゐる。清正は三成に惡い。小西行長は清正嫌いだから、清正嫌ひの三成とは仲がよい。そこで共に清正を秀吉に讒言した。それ故に清正が伏見に引あげて來ても、秀吉は見ゆることを許さない。清正は増田長盛に頼んで申開きをつけて呉れと言つた。長盛はお前は石田三成に謝つて宜しくやんなさいと答へた。清正は俺は死んでも石田に頭を下げることは出來ぬと言ひ、屋敷に歸つて秀吉の命令を待つた。七月になつて京畿地方が暴風雨と大地震があり、伏見城が壞れて壓死數百人に及んだ。そこで清正が曰ふに、我勘氣を受けた身分で出かければ、罪になるかも知れない

が、此の場合、坐視することは出来ぬと。即ち從兵二百を連れて秀吉を見舞つた。その時、秀吉は夫人と共に地に坐つて居つたが、清正を見つけて、その幼名を呼んで、「虎」汝はよく早く來たと言ふた。虎と言ふ字に阿の字をつけて阿虎と呼ぶのは、「お虎」と言つて女を呼ぶやうに言ふのではない。漢文で阿虎は強いて讀めば、「アコ」と呼ぶべく、意味は呼び棄てにするにある。阿虎は「オイ虎！」と呼ぶか、「虎公」と呼ぶの類である。

小説家共が昔は近侍の者を女扱ひにして居るやうに解釋し、織田信長が蘭丸を阿蘭と呼び、力丸を阿力と呼ぶ様に書いてゐるが、これは漢文からの讀みそこないであらう。漢文で阿蘭は「オイ蘭公」と言ふやうな信長の呼び方である。そこで秀吉はオ、虎！よく來たと言ふたのである。清正は前に進んで初めて無實の罪を訴へ、地に繪を書いて戦陣の勞苦を説明した。秀吉顧みて夫人に曰ふには、彼は肥つた色白の大丈夫だつたが、今朝鮮から歸つて何と黒くなつて憔悴してゐることかと。

乃ち命じて其の門を守らせた。石田三成以下睡いで來たが、入ることが出来ない。秀吉の命令を清正に傳へる者があつて特に三成を入れよと云ふのである。そこで清正は忌々しいので大聲で兵士に號令して曰く、あの背低の小倭人を入れよと怒鳴つた。且日、秀吉は清正を呼んで海外の戦狀を聞いた。その話を聞いて涙を流して、虎はお襦袢を當てゝゐる時から俺が育てたのだ。お前の氣立ては俺に似てゐると言ひ、遂に元通り愛遇するやうになつた。

時に震仍ほ止まず。徳川公、夜、兵を率ゐて入衛す。秀吉曰く、「皇宮の如何を知らず。吾當に卿と省るべし」と。乃ち遽かに出づ。從者未だ屬せず。徳川公、其の兵を以て之を擁して行く。道路昏黒、徳川公の從者、其の袖を撃く者有り。公敢て顧みず。秀吉、談笑して行き、刀を脱して之に投げて曰く、「吾老いたり、刀の重きを覺ゆ。以て卿を煩さん」と。公敢て執らず。乃ち井伊直政に投ぐ。已にして秀吉の從兵踵ぎて至る。遂に入朝す。還るとき、方廣寺の前を過ぎ、大佛の倒裂を見て、罵りて曰く、「吾若の爲めに勞費を憚らず。將に若をして衆生を濟度

せしめんとす。今己の身すら保つ能はず。何ぞ我に負くや」と。因りて弓を呼びて之を射て還る。乃ち伏見城を修め、更に牙城を木幡山に作る。

その時、地震はなほ止まない。そこへ丁度徳川公が夜兵を率ひてそこに入り來り護衛についた。秀吉が言ふには皇居はどうなつて居らるゝか分らない。我れ公と一緒に御機嫌を伺はうと。秀吉は非常に勤王の志が厚い。

聚樂 以後陽成天皇を迎へ諸將を従へて扈從し奉り、武人をして天子の重きを知らしめた人である。二人は遽かに出たが從者が未だ續いて來ない。徳川公は其の兵を以て秀吉を衛つて行つた。道路は眞暗である。その時、徳川公の從者が徳川公の袖を引いて、今やつつけやうと云ふ合圖をした。徳川公敢て之を顧みない。秀吉は呑氣なもので談笑して行くのである。刀を脱して家康に授けて曰く、我輩は年を取つた。刀が重いのを覺ゆる。卿を煩はして持つて來て貰ひたいと。家康は敢て之を

手に執らず、從者の井伊直政に刀を授けた。そこに秀吉の從兵が踵いでやつて來た。遂に一緒に參内した。

歸り途に方廣寺の前を過ぎた。その大佛が倒れてゐるのを見て罵つて曰く、我、貴様の爲に勞費を吝まず、汝をして衆生濟度させてやらうとして居るのだ。然るに今や己の身すらも保たずして倒れてゐる。何と言ふ腑甲斐ない奴かと。弓を射させて還つた。實に放膽にして無邪氣な風丰が見ゆるやうである。そこで伏見城を修繕し、更に本丸を木幡山に造つた。

秀吉の清正に對する、家康に對する、又方廣寺の大佛に對する、實に天真爛漫である。溫情に充ち、信義に徹底し、豪膽無比であり、擒從自在ではないか。

太閤裂冊

八月。明・韓の使者共に界浦に至り、二十九日、伏見に造る。秀吉、柳川調信をして、韓の使者を責めしめて曰く、「吾、兵を收む。而して汝の國未だ三道を獻ぜず。今又、王子をして來りて再造の恩を謝せしめず。乃ち微者を遣はして我を辱しむ。我汝の入見を許さず」と。二使、行長に因りて謝す。聽かず。九月二日毛利氏をして兵仗を列ね、明の使者を延きて城に入らしむ。諸將帥皆坐す。頃くして、秀吉、幄を開きて出で、侍衛、叱と呼ぶ。二使、摺伏し、敢て仰ぎ視る莫し。金印、冕服を捧げ、膝行して進む。行長、之を助けて禮を畢ふ。三日、使者を獲し、既にして罷む。秀吉、冕を戴き、緋衣を被り、徳川公以下七人をして、各々其の章服を被らしめ、僧承兌を召して、冊書を讀ましむ。行長、私かに之に囑して曰く、「冊文、惟敬の説く所と、或は齟齬する者有らん。子且く之を諱め」と。承兌敢て聽かず。乃ち入りて、冊を秀吉の傍に讀む。爾を封じて日本國王と爲すと曰ふに至り、秀吉、色を變じて、立ちどころに冕服を脱して之を地に抛ち、冊書を取りて之を扯裂し、罵りて曰く、「吾、日本を掌握す。王たらんと欲せば則ち王たらん。何ぞ髻虜の封を待たんや。且つ吾にして王と爲らば、天朝を如何せん」と。乃ち行長を召し、諂讓して曰く、「汝敢て我を欺罔し、以て我が邦の辱を爲す。吾、將に汝

と明の使者とを併せて、皆之を誅殺せんとす」と。行長、股栗し、罪を三奉行に諉し、書讀數通を出して證と爲す。承兌も亦、之を救解し、事機かに止むを得たり。而して秀吉の怒未だ釋けず。即夜、加藤清正、大谷吉隆、石田三成、増田長盛に命じて、明・韓の使者を逐ひ、資糧を賜ひて遣歸し、之に謂はしめて曰く、「若、亟かに去り、而の君に告げよ。我、將に再び兵を遣し、而の國を屠らんとす」と。遂に令を西國四道に下し、兵十四萬人を發し、明年二月を以て、悉く故の行臺に會せしむ。

八月になつて明の使者が今の堺に來り、二十九日に秀吉の居城たる伏見にやつて來た。秀吉は柳川調信をして韓の使者を責めしめて曰く、吾は兵を收めたが、汝の國は未だ三道を獻じない。秀吉が兵を收めれば、慶尙、全羅、忠清の三道を收めるのが休戦の條件であつた。今は又、王子を寄こして國家再建の恩を謝せしめねばならないのに、輕輩の者を遣はして吾を辱かしむる。甚だ失敬な奴ぢやないか。我は汝に謁見を許さないと。二人の使は行長に頼んで謝りを云つたが聽き入れない。

九月二日になつたら毛利氏をして、軍隊を列べさせ明の使者を引ばつて登城せしめた。城内には諸將帥皆居並んで居る。暫くすると秀吉は幄を開いて出て來た。侍衛の者が「シート」と呼ぶと二人の使は慙伏して頭も上げ得ない。金印暴服、即ち金の判と冠と服とを捧げ、膝でにじり寄つて來る。行長がそれを助けて、禮を終つた。それが九月二日である。

九月三日使者を饗應しその饗宴が終ると、秀吉は明から貰つた冠を戴き、袈裟といふのはゆるやかな衣、支那式の盛服であらう。それを着て、徳川公以下七人の人は各々禮服を着用させてゐる。僧の承兌に命じて、封冊を讀ましめた。爵位封録を與へる時の詔書を冊書と言ふ、其の際、行長は私かに承兌に頼み、此の冊書の中の文意が沈惟敬の説く所と齟齬する所があるかもしれない。其の時はお前はそこを避けて讀んでくれると言うた。承兌はそれを聽かないで乃ち入つて秀吉の傍で、その冊文を讀んだ有りの儘讀上げた。

爾を封じて日本國王と爲すといふ文句に至ると、秀吉は顔色を變へて、立どころに冠も服装も脱いでしまつて大地に抛ち、冊書を取つて之を引裂いて、(扯裂はシヤ裂と讀む、シャツと引裂くこと)罵つて曰く、俺は日本を手の中に握つて居る。王とならうと思へば何時でも王になれるのだ、何で髯面の夷共から封ぜられる必要があるか、餘計なお世話である。又俺が王と爲るならば、畏れ多くも一天萬乗の天朝をどうするかと。即ち行長を呼びつけ、責めて(誦讓)いふには、汝は敢て俺を欺きくらまして我が國辱をなしたのだ。俺は汝と明の使者とを皆な一所に誅戮してしまふ積りだと。行長は震へあがり、罪を三奉行たる石田、増田、大谷諸氏にかこつけ、手紙を數通り出して、その證據とした。承兌も亦これを援けて辯解してやつたので、やつこのこと無事に済んだ。併し秀吉の怒はまだ釋けない。

その晩に加藤清正、大谷吉隆、石田三成、増田長盛に命じて明の使者を追つ拂ひ、食糧を與へて歸らすこととし、彼等に曰はしめた。お前達は速かに歸れ、さうして

歸つてお前達の君に告げよ、俺は再び兵を遣はしてお前の國を屠るのだと。遂に西南四道に命令を下して兵十四萬人を發し、明年の二月を期して名護屋の行臺に會せしめた。乃ち再出征の準備を命じたのである。

こうなると小西は卑怯未練の小人の様になるが、彼も戦の名人である。併し智者であるから形勢の不可なるを觀測し、何とか早く戦を切りあげたいと苦心したが、何さま謀略に長ずる明韓のスレ枯し共に乗ぜられたのである。罪を三奉行に歸すとあるが、現地總軍の意向を一通りは酌んで和平の斡旋をしたものであらう。

蔚山籠城

明の諸將議して曰く、「秀吉の諸將、清正最も勇悍なり。先づ清正に克たば、則ち餘は風に從ひて解けん」と。乃ち順天に向ふと聲し、以て行長を牽き、而して諸軍、慶州に會し、高策を彦

陽に留め、以て釜山の援路を絶ち、而して李如梅・解生等皆蔚山に萃る。蔚山の土木未だ竣らず。其の役卒、明軍の至るに駭き、入りて清兵衛に告ぐ、清兵衛出でて戦ひ、伏に陥りて大に敗れ、城に入りて嬰守す。淺野左京大夫、毛利氏の將太田政信・穴戸元繼等を率ゐ、將に蔚山に往きて監せんとす。行きて彦陽に至り、高策と嶺を夾みて舍し、未だ相知らざるなり。曉くる比、我が斥兵、嶺に上り、明の先鋒の獲る所と爲り、我が軍乃ち覺る。政信・元繼説きて曰く、「衆寡懸絶す。疾く走りて蔚山に入るに若かざるなり」と。大夫曰く、「行長、兵を提げて此に至り、未だ明人の旗を觀ずして逃る、何の面目ありて復太閤に見えんや。公等走らんと欲せば即ち走れ。吾は當に此に死すべし」と。乃ち其の將太田・岡野・龜田・森島の四人を遣し、銃隊を率ゐて進み、明の先鋒を逆へ撃ちて、之を卻く。大夫、高阜に在りて、策の軍、嶺を踰ゆるを望見するや、其の戦没を恐れ、人をして之を召し還さしむ。肯んぜず。奮撃して數百人を斃し、之に死す。獨り龜田脱れ歸り、獲る所の甲首を献じ、且つ曰く、「明兵の衆き、之を望むに際無し。請ふ、君速かに退け」と。大夫怒りて曰く、「吾豈に衆きを聞きて退かんや」と。自ら徽號を揚げ、衆を麾きて進む。將士、之を觀て、争ひて明軍に赴く。大夫、身に十餘創を被

るも、猶ほ進みて已まず。龜田、力諫し、二從士をして、其の轡を回さしめ、而して刀鞘を以て馬を鞭つ。馬、蔚山に奔る。策の兵、追躡す。岡田某、福永某返りて戦ひて死す。清兵衛望見して、城を出でて迎へ入る。元繼、明軍の隔つる所と爲り、間路より島山に入る。島山は蔚山の別堡なり。時に楊鎬・李如梅等、已に蔚山の外郭を破る。大夫、清正に代りて將士を率ゐし、壁に嬰りて之を守る。明兵、大夫を以て清正と爲すや、必ず之を獲んと欲し、攻撃甚だ急なり。大夫、自ら銃を放つ。命中せざる無し。時に門を開きて突戦し、殺傷過當す。二城の間に川有り。李芳春・解生、兵艦を泛べて之を絶つ。城兵、銃もて其の五艘を破り、數千人を溺らす。而して敵勢衰へず。麻貴・茅國器、衆を鼓して壁に攀ち、前者墜つれば、後登り、晝夜歇まず。城兵、急を清正に告げんと欲す。

沈惟敬と小西行長とのチャンネルを通じて試みられた和議は、慶長元年九月二日秀吉の裂冊により破れ、慶長二年正月、外征の帥は續々渡海するに至つた。明軍大舉して京城に來り、我軍南鮮に膠着して大に進む能はず。秀吉が一大決心を以て

親征せんとするを待つた。蔚山といふのは南朝鮮の慶尙道の東海岸により、釜山から北に上つた所である。此處に清正が駐屯してゐるのである。此の時、小西行長は全羅道の順天に居る。其の他の諸將は各地に營を連ねて、釜山との連絡を確保せんとして居る。

そこで明の諸將は相談していふには、秀吉の諸將の中では清正が一番に勇悍である。先づ清正に勝てば餘は風を望んで潰走するだらうと。そこで彼等は順天に向ふのだといふことを聲明して、行長を牽制し、諸軍は蔚山の北方慶州に會し、高策を彦陽に留めて釜山より蔚山に至る援路を遮断せしめ、李如梅、解生等は皆蔚山を攻める爲に集つて來た。その時、蔚山は清正の家來の加藤清兵衛によりて護られて居るのであるが、蔚山築城の土木はまだ出來あがつて居ない。其の人夫たちが、明軍の至るに駭き、之を清兵衛に告げた。清兵衛は出て戦ひ、伏兵に陥つて大に敗れ、城に入つて立て籠つた。そこに淺野左京大夫——前述の長政の息子で、十五位で初

陣して驍名を謳はれた人であるが、二十を幾つも越さない若大将である。

どうも朝鮮征伐を通じて若い人々が強硬派で老年連が和平派となり、歸心矢の如しと云ふ有様である。年とれば先がなくて命が要らぬかと思ふと、どうもさうでない。年とると娑婆の因縁が深くなり、却つて命が惜しくなる。左京大夫は若いから仲々しつかりして居る。彼は毛利氏の將太田政信、宍戸元繼等を引きつれ蔚山に行つて城の工事を監督しようとする所である。行く行く彦陽に至つて、明の將高策と嶺を夾んで屯して居ながら、どつちも少しも氣がつかないで居つた。夜明けに我が斥候兵が嶺に上つて明の先鋒に捕へられた。そこで我が軍が始めて敵のあるを覺つた。政信、元繼が説いて言ふに、敵と味方と衆寡懸け隔つて居る。此處で戦さはしないで、疾く走つて蔚山に逃げ込んだ方が宜からうと。

大夫曰く、不肖、幸長、兵を提げて此の地に來た。まだ明人の旗を見ないで逃げ出したならば、何の面目あつて太閤にお目に掛ることが出來ようか。お前等は逃げ

ようといふなら逃げるがよい。俺は此處で死ぬつもりである。即ちその將太田、岡野、龜田、森島の四人を遣はし、銃隊を率ゐて明の先鋒を逆襲して撃退した。淺野左京大夫幸長は背後にあり、高い岡に上つて高策の敵軍が嶺を踰へて來るのを認め、自分が遣した太田、岡野、龜田、森島等の大将等が戦死しやせぬかと氣づかひ、人をしてこれ呼び返させた。併し出て行つた大将達は之を承知しない。奮撃して數百人を斃して、そこで戦死した。唯四人の大将の中一人龜田が脱し歸つて、分捕つた甲や首を獻じた。さうしていふのに、明の兵はこれを望めば限りがない。あなたは速かに退いて下さいと。大夫は怒つて、どうして敵兵が多いと聞いて逃げられやうかと。自ら旗印を揚げ、衆を麾いて進んだ。將士はこれを見て争つて明軍にぶつつかつて行つた。

大夫は身に十餘創を被りながらなほ進んで行く。龜田はそれを大に諫めた。併し聽かないので、二人の從士をして、馬の轡を引き廻させ、刀の鞘で馬をひつばたい

た。馬は驚いて蔚山の方に向つて奔り出した。高策の兵がそれを追つかけた。岡田某、福永某は引返して戦死した。城に籠つて居つた加藤清兵衛はこれを望見して、城から出て迎へ入れた。元繼は明軍に隔てられて脇道から島山に入つた。島山といふのは蔚山の別に設けて堡壘である。時に揚鎬、李如梅等の明の大將は既に蔚山の外郭を破つて、幸長が蔚山に入つた時は、蔚山の外圍は既に陥落してしまつた後である。

幸長は清正に代つて將士を率ひ勵まし、城壁に據つてこれを守つた。明の兵隊は幸長を清正だと思つて、清正ならこれをやつつけてやらうといふので、攻撃が甚だ急である。幸長は自ら鐵砲を射つて命中しないものはない。それから時々門を開いては突出奮戦し、相當以上の敵を殺傷した。蔚山と島山との二城の間には川があり、李芳春と解生とが艦を泛べてその連絡を絶つて居る。城兵はそれに鐵砲を射ち掛けて五艘を破り、數千人を溺死させた。而も敵の勢力は少しも衰へない。麻貴、茅國

器等を鼓舞して壁に上つて来る。前者が墜ちれば、後者が登り、晝夜歇まぬで攻め立てるのである。そこで城中の兵は急を加藤清正に告げようとした。

清正、時に機張に在り。相去ること三日程。敵衆、道路に充塞す。大夫曰く、「誰か往くべき者ぞ」と。近臣木村某、奮ひて往かんと請ふ。大夫之を壯なりとし、予ふるに善馬を以てす。已に門を出づれば、明兵、響集す。木村一騎、萬衆中を馳突し、一日一夜にして機張に達し、清正を見て急を告ぐ。清正大に驚き、袂を投じて起つ。左右或は之を止めて曰く、「蔚山は孤城を以て大敵の衝に當る。而して我が寡兵、之を援くるも、終に保つ能はざらん。之を棄つるに若かざるなり」と。清正曰く、「彈正、我に囑して曰く、『緩急あらば、幸に我が兒を援けよ』と。今、之を敵に饒せば、何を以て天下に立たん」と。乃ち見兵五百人を率ゐて、人ごとに糧食を負はしめ、舟に登りて赴き援く。明の候船と江中に戦ひて之を走らす。清正、自ら銀兜鍪を蒙り、薙刀を杖つき、船首に立ちて士卒を指麾す。明韓の諸軍、指目して、敢て近づく者莫し、遂に蔚山に入る。鎬・貴、將士に謂ひて曰く、「清正定めて城に入らん。猶ほ虎を檻して之を刺

すがごときなり」と。明日、諸軍を合せて蟻附して上る。清正、士卒に令して、大石、巨材を投げ、撃ちて之を卻く。即夜、數百騎と明軍を襲ひ、大に獲て還る。敵、更に飛樓を起し、火筒佛郎機を以て百道並び攻む。城壘震裂す。清正、大夫と堅く守りて屈せず。鎬・貴、其の力取すべからざるを知り、乃ち令を下して戦を休め、合圍すること十晝夜、我が汲道を断つ。城兵飢渴し、皆紙を噛み、壁土を煎、馬を刺して其の血を飲む。馬盡く、乃ち溺を飲む。夜、城外に出でて明の戸を搜り、其の佩ぶる所の糗糧・牛炙を取りて之を食ふ。天、大に雪ふり、士卒戰慄、指を墜す者有り。而して清正、意氣自若たり。益と守具を修め、銃及び紙礮を用ひ、日に明兵數百千人を斃す。

清正はその時機張に居る。機張は釜山のすぐ北にあり蔚山を去る三日の道程であつて、その道路には敵衆が充滿して往來を塞いで居る。大夫(幸長)曰く、誰か行く者はないかと。近臣の木村某が奮つて往かうと願ひ出た。大夫はその意氣を壯とし、これに善い馬を與へて其の任に當らせた。木村某が既に門に出るや、明兵はこれに

集ひ奇つて來た。木村は唯一騎で萬衆の中を突破し、一日一夜、駈け通して、清正の居城たる機張に達した。丁度、熊本城の谷村計介のやうである。そこで清正に急を告げた。

清正は大に驚いて袂を揮つて立上り忽ち出かけやうとした。左右の者は或はこれを止めていふには、蔚山は無援の孤城であり、大敵の進み來る要衝に當つて居る。我の寡兵で援けても、到底保つことは出來まい。これは棄てた方が宜からうと。

清正がいふに、彈正幸長の父たる淺野長政が、我に頼んで、危急なことがあつたら、どうか俺の子を援けて呉れよと言つて居る。その子を今、敵の手に委せてしまつたならば、清正は何を以て天下に起つことが出來ようか。それでは武士の面目がないではないかと。そこで、見兵五百——あり合せの兵五百を率ひ、人毎に糧食を負うて舟に乗り、援けに赴いた。明の斥候船と、江中に戦つて敵を走らせた。清正は銀の兜を被り、薙刀を杖にして船首に立ち、以て士卒を指揮した。明韓の諸軍は

此の武者振りを指さし望みて、敢て近づく者が無い。かくて清正は遂に蔚山に入つた。

敵將鎬貴が將士に言ふには、清正は確かに城に入つたやうだ。かうなれば恰かも虎を檻に入れて殺すやうなものである。これは誠に逃へ向きであると。翌日諸軍を合して蟻の附いたやうに上つて來た。清正は士卒に命令して大石や巨材を投げ、撃つてこれを退けた。さうして即夜に數百騎で明軍を襲ひ、大に敵の首を獲て引上げた。

何時も良い大將の戦は矢継ぎ早に第二撃、第三撃を加へる。敵のひるむに乗じて更にもう一本參るのである。柔道でも攻撃は二の手、三の手と繼かねばならぬ。敵は更に高い櫓を組み立て、鐵砲や大砲を以て總ての方面から並び攻めて來た。佛郎機とは佛蘭西製の鉄砲と言ふやうな意味である。此の佛郎機で撃ちまくられたので城壘は震動し破裂した。

清正と幸長とは堅く守つて屈しない。鎬貴は力づくでは取れぬと知つて、令を下して戦を止め、十晝夜の間、城を取り圍み、我軍の水を汲む道を断ち切つた。そこで城兵は飢え渴し、皆、紙を嚼り、壁土を煎じて飲み、馬を殺してその血を飲んだ。その馬がなくなつたので今度は小便まで飲んだ。さうして夜は城外に出ては明人の屍を搜してその携帶せる干飯や牛の炙肉等を取つて食つた。天、大いに雪降り、そこで士卒は鞍がされ、霜やけが出來、その爲に指の落ちる者もあつた。鞍は、ひいであり、塚は霜焼けである。鞍と言ふ字は馬鹿に六ヶしいが、軍隊ではよく使はれて居る。軍馬の繫鞍と言ふのは、蹄の直ぐ上の方の繫といふ所に出來るひいのことである。清正は意氣自若として少しも撓まず、益々その防禦の武器を修め、鐵砲や紙の大砲を用ひ、毎日明兵を數百千人も斃した。

鎬・貴、夜、伏を設けて、曉に營を焚きて退き走ること數里、以て城兵を誘ふ。城兵追はんと

欲す。清正許さずして曰く、「彼火を擧げて退く。退くに殿を設けず。夜を以てせずして曉を以てす。是れ將に我を誘ひて之を殲さんとするなり」と。之を久しくして、明の伏稍と出で、終に復之を圍む。浮田氏の卒、亡げて明軍に在る者有り。呼びて城上の人に語りて曰く、「楊經理、媾和を願ふ。加藤公と之を面議せんと欲す。城外百歩を期して相見ん」と。清正往かんと欲す。大夫曰く、「敵情測るべからず。公、太閤の命を受けて、一方の重寄たり。輕よしく出でて笑を外國に貽す勿れ。然りと雖も、出でされば之に怯を示すなり。度るに彼未だ公の面を識らず。僕請ふ、公の爲めに代り行かん」と。衆遂に兩つながら之を止む。故に會期を紓くして我が援兵の至るを俟つ。黒田孝高、梁山に在り。使をして釜山に告げしめて曰く、「蔚山、急なり。即し陥らば諸城之に隨はん。赴き援けざるべからず」と。諸將之を然りとす。豊臣秀秋・毛利秀元・黒田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎・其の子高良・脇坂安治等、騎卒五萬に將として、彦陽・昌原より、道を分ちて赴き援く。而して行長、海上より之に會す。三年正月、秀秋等彦陽に至り、撃ちて高策を破り、昌原の軍と、皆蔚山に赴く、行長益々空艦を装ひ、海を蔽ひて至る。楊鎬、我が軍三面より至ると聞き、身を挺して先づ遁る。麻貴・解

生等、夜に乗じて圍を解く。長政、後藤基次をして、晨に出でて軍を候はしむ。一馬騾を水涯に得て、返り報じて曰く、「是れ日本の制なり。我が兵已に騎渡する者有り。渡るべからず」と。長政即ち馳せて明軍を蹶す。藤堂高良等、槍を揮ひて之に繼ぐ。清正、大夫と、乃ち門を開きて合撃す。敵衆、崩駭す。獨り其の將吳惟忠・茅國器、殿して回り戦ふ。吉川廣家、奮撃して之を走らす。明軍大に走り、糧仗を遺棄して野を蔽へり。

そこで鎬貴は、夜伏兵を設け、曉方にその宿營を燒拂つて退走すること數里、以て城兵を誘ひ出して殲滅する計畫である。城兵は敵が逃げたので追駈けやうとしたが清正が之を許さない。これが戦さ巧者な所である。清正がいふには、彼は火を擧げて逃げて行つた。而も逃げて行くのに殿軍も設けない。さうして夜、逃げないで故意に曉方に逃げて行つた。これは必ず我を誘つて殲滅しようと思つて居るに違ひないと。果せる哉、暫く見て居ると、明の伏兵が段々出て来て、遂に又城を取り圍んだ。

浮田氏の卒に明軍の捕虜になつて居る者があつて、呼んで城上の人に語つて曰く、楊經理が媾和を願つて、清正と面談せんと欲し、城外百歩を期して會見したいと望んでゐると。清正はそこで城外百里の所へ行かうとした。淺野左京大夫がいふのは、敵情は仲々測り知ることは出来ない、あなたは太閤の命を受けて、一方の重任を寄せられて居る。そのあなたが軽々しく出かけて、騙されて捕へられて、笑を外國に貽してはならぬ。併し出なければ臆病と思はれるのも残念である。推測するに彼等はまだあなたの顔を知らないであらう。どうかあなたの代りにやつて下さいと。皆の者共は遂に兩人ながら行くことを止め、殊更に面會の日を延ばして、我が援兵の來るのを待つことにした。

黒田孝高は梁山にあり、使を釜山にやつて告げしめて曰く、「蔚山の情勢甚だ急なるものがある。若し陥つたならば、他の諸城も亦陥るであらう。赴いて援けなければなるまい」と。諸將も之に同意し、豊臣秀秋、毛利秀元、黒田長政、加藤嘉明、

森忠政、蜂須賀家政、藤堂高虎、その子高良、脇坂安治等、騎兵、歩兵卒合せて五萬人を率ゐ、彦陽、昌原より道を分つて援けに赴いた。而して行長は海上よりこれに來り會した。三年正月、秀秋等は彦陽に至つて、高策の軍を撃ち破り、昌原の軍と合隊して、皆蔚山に援けに赴いた。小西行長は、益々空艦を装ひて虚勢を張り、海を蔽ふてやつて來た。楊、鎬は我が軍が、三面より攻めて來たと聞いて、身を挺して先づ遁れた。挺んで進むならよいが、これは敗走の挺身隊である。さうして麻貴、解生等は、夜に乗じて圍みを解いた。黒田長政は家臣、後藤基次をして早朝に斥候させた。さうすると基次は一つの馬のわらじが水際にあるのを發見し、還つて報告していふのに、このわらじは日本製のものである。もうこの分なら我が兵の中に已に騎馬で川を渡つたものがある筈だ、遅れてはいかぬと。そこで長政は馳せて明軍を追ひかけた。

藤堂高良等は槍を揮つて長政に續いた。清正は淺野幸長と共に門を開いて内と外

から包圍軍を攻撃した。敵兵は駭き崩れて大騒ぎである。獨り、明將吳惟忠と茅國器とが殿軍となつて引返して戦つた。そこで吉川廣家——これも若い大將だが、これが奮撃して此の敵を走らした。明軍は大いに走り、糧仗——食糧や武器を遺棄して、それが野を蔽ふ程の大勝利を得た。

此の蔚山の戦争は明國としては智謀を盡したものであつた。日本の諸將が蔚山救援に行つた隙を覗ひ、一軍は梁山を襲ひ、一軍は釜山を襲うた。然るに黒田如水、立花宗茂等の爲に散々に打ち破られたばかりでなく、蔚山そのもの、戦も、上記の通りの大敗となつた。明王は敗を聽いてえらく悲觀し、海内の力を傾け、全韓の兵を合して必勝を期したのに此の始末となつた。これは沈惟敬の罪であると稱し、大將連の更迭を行つた。之に反し、秀吉は遙かに蔚山の捷報を耳にし、手書を與へて清正を賞し、大に糧食を送つて士氣を鼓舞したのである。

かういふ激戦の時には何時も淺野左京大夫とか、藤堂高良とか、後藤基次とかいふ若い連中が働いて居る。どうも生死の境に立つと若い人が強いやうである。朝鮮征伐が末段に近づいて來ると、何處までも大いにやらうといふのは若い者が多く、敗戦主義者は老人に多かつた。

太閤臨終後圖を誦す

三月、秀吉、秀頼及び夫人以下を携へて醍醐に遊び、前田玄以に命じて、供帳を掌らしめ、務めて豐盛ならしめて、遺憾有ること勿らしむ。

四月、使を遣して諸將に諭し、秀秋・行長・清正、及び島津義弘・黒田長政・左京大夫等の十餘將を留め、其餘は盡く罷め歸らしむ。其の留る者は、分ちて四屯と爲す。秀秋は釜山を守る。而して蔚山は其の右に在り。清正之を守る。順天は其の左に在り。行長之を守る。泗川は其の前に在り。義弘之を守る。四城の兵凡そ十萬。明兵も亦十萬可り。世徳、邢珣と議して、

李如梅は義弘に當り、劉綎は行長に當り、麻貴は清正に當り、陳璘は水軍を以て其の後に出でしむ。已にして如梅を召し、董一元を以て之に代へ、相持して未だ戦はず。

是の月、秀頼、從二位に進み、權中納言と爲る。五月、秀吉、疾有り。六月、外師の罷むる者至る。乃ち召し見て慰勞し、其の賞罰を論ず。

七月、秀吉、疾篤し。徳川公を召して之を諭して曰く、「外國未だ服せず。而して吾此の疾に罹る。吾死せば則ち難作らん。卿に非ずば以て之を定むる莫けん。吾今日、天下を以て卿に託す。卿、我が爲めに努力せよ。秀頼幼弱、亦卿の保護を煩す。其の成長に至りて、當に立つべきと當に立つべからざるとは、一に卿の心に在り」と。徳川公、歎息して曰く、「殿下百歳の後、孰れか嗣君を奉ぜざる者ぞ。然りと雖も人心測られず。殿下宜しく其の神算を運して萬世の安きを建つべし。家康不才、敢て重任に當らず」と。曰く、「吾之を熟思するに、卿に若く者莫し、卿避くる勿れ」と。徳川公、固辭して退く。秀吉、遂に石田三成・増田長盛を召して之を告ぐ。二人諫めて曰く、「殿下、百戦して天下を取り、而して一日にして之を他人に予ふ。是れ胡爲るものぞ。今や天下の猛將・謀臣、殿下の恩を被らざる者無し。其の嗣君を輔くるに於て何か有らん」と。是に於て、大老・奉行を定む。奉行は五人、故置く所の如し。

よく小説や何かに醍醐の花見といつて、秀吉が戦争最中に、贅澤三昧をして居たやうに色々書かれて居る。併し、これを讀んでも分るやうに、醍醐の花見をやつたのが、慶長三年三月十五日であつた。その翌月の四月には、朝鮮征伐の諸將を召還し、五月には病氣になつて居る。七月にはもう危篤であり、八月には亡くなつて居る。三月の醍醐の花見から、五ヶ月目に秀吉はもう死んでしまつたのである。

當時、征韓の帥停滞してなかなか旨く行かず、糧食難に加ふるに、軍隊の不足がある。

秀吉の親征論は屢々試みられたが、出征の名將達は前線への進出、後方の聯絡に多大の兵を要するを説き、鞭を揚げて燕京に入ることとは非常に大規模の動員を要することが明白になつた。秀吉は小國に生れたるの不幸を嘆じて、悔しがつて居つた

が、どうすることも出来ない。和平謀略には先方に欺かれ、嚇怒して再び兵を出したが兵は捗々しく進まない。

此の際、秀吉が醍醐の花見を盛大にして一杯の酒を飲むことは、一杯の苦汁を飲むよりも辛かつたであらう。一世の英雄は自ら肺肝を噛み砕く苦痛がある。うつかり兵を引揚げて來ると敵が追跡して來る、國內の情勢もまだ定つてゐない。諸將の中には疎急、事を擧げんとする者もあるが、實力を蓄へて、虎視眈々たる徳川家康の如き者が居る。かういふ際には撤兵するにも威勢を示さねばならぬ。綽々と餘裕あるを示さうと言ふのが醍醐の花見をやつた理由である。

前田玄以に命じて仕度を掌らしめ、努めて豊富盛大にして殊更に遺憾なきやう取はからはしめた。四月に使を遣はし、諸將に諭して小早川秀秋、小西行長、加藤清正、島津義弘、黒田長政、淺野左京大夫等十餘將を留めその餘は悉く戦をやめて歸還させることとした。前線の諸將は意見が區々である。歸還を欲する者、長期戦を

欲する者、互に唾み合つて動もすれば勃發せんとする。秀吉に非ざれば一令の下に撤兵することは困難である。留められた諸將は何れも秀吉に親近で剛強の者である。召還された方に政治家肌の者が多い。そこで前線派と參謀派との軋轢が生じて來る。秀吉は醍醐の花見をして居る反面にこれ思ひ煩はさるゝことばかりである。其の上數年來健康も著しく衰へて來て居る。花を見ながら何となく淋しく心中憂憤に堪へなかつたであらう。醍醐の花見は實に英雄の悲しみを想像せしむるものである。そこで現地に留まつた者は分れて四つの屯營を造り、小早川秀秋は釜山を守り、その右の蔚山は清正が守り、その左の順天は行長がこれを守り、その前面の泗川は島津義弘が守り、この四つの城の兵は凡そ十萬ばかりである。明の兵も亦十萬ばかりである。世徳が邢玠と議して李如梅をして義弘に當らしめ、劉綎をして行長に當らせ、麻貴をして清正に當らしめ、陳璘は水軍を以て後に出て、釜山沖あたりの後を斷たせようといふこととなつた。朝鮮征伐は水軍で惱まされたが、それは制海權

が我方になく、先方が之を把握して居たからである。已にして敵は李如梅を呼び還して董一元に代らせた。我が軍と敵軍は相對峙して戦はない、日本軍は奥地を引あげ、沿岸に集結して敵と睨み合つて居るのである。

この月、秀頼は從二位に進み、權中納言となつた。五月になつて秀吉は病氣が起り、六月には出征兵士の戦を罷めて歸還する者が到着した。秀吉はそれを召見し慰勞して、その賞罰を論じた。七月になつたら秀吉の病はぐつと重くなつた。そこで徳川家康を召して、これを諭して言ふには、明國も朝鮮もまだ服しないのに、余はこの病に罹つた。余が死んだら、きつと難問題が起るだらう。君でなければ、これを定める者は居ない。余は今日、天下を君に託する。君は僕の爲に努力して呉れ。秀頼はまだ幼弱で、亦、君に保護を煩はさねばならぬ。成長して一人前になつたら秀頼を立てると、立てないとは君一人の心にあると。徳川家康はすゝり泣きして言ふた。獻歎したとあるが、ほんとに泣いたのかそら泣きであるか解つたものでない。

殿下が百年の齡を以て亡くなられた後に、誰か後繼ぎの秀頼公を奉じない者がありませうか。併しながら人の心は變り易くて推測出来ない。あなたは宜しく神算を運して、萬世安泰の計を立てなさい。家康は不才で、敢てその重任に當ることは出来ない。此の言葉には謙遜だか、責任拒否だか解らぬ、頗る曖昧なところがある。古狸はなかなか微力ながら最善を盡しませうとは言はぬ。後の事はお前自ら考へろ。と言ふことは病人に對して、啖呵を切るやうなものである。秀吉更に押し返して曰く、吾、これを熟思するに君以上の者はない、だから君はどうか、この任を避けて呉れるなど。徳川公は固くそれを辭退して罷りさがつた。秀吉はそこで自分の腹心の石田三成、増田長盛を呼んで、家康に託したことを話したが、二人が言ふのに、殿下は百度戦つて天下をとり、しかもたつた一日にしてこれを他人に與へられる。これは一體、何たる始末でありますか。今、天下の猛將謀臣、殿下の恩を被らない者はない。嗣君を輔けるくらゐ何であります。何でもないことであると。そこで

大老、奉行の職を定め奉行五人は先に決めた儘にした。

徳川公及び前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝を五大老と爲し、中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴を以て三中老となし、小事は奉行に決し、大事は大老に決す。大老・奉行、或は協はざる者有らば、則ち中老、間に居て之を和解せよと。片桐且元・小出秀正をして、秀頼に傳たらしめ、密かに二人に囑して曰く、「吾人奴より起りて、關白と爲るに至る。孰れか國恩に非ざらんや。吾、明と兵を構へ、禍結びて解けず。吾深く之を悔ゆ。彼吾が死するを聞かば、或は大舉して來り報いん。國朝、古より未だ曾て外國の侵辱を受けず。我が時に及びて受くるは、吾深く之を恥づ。是れ吾の國を家康に託する所以なり。我が家の存亡に至りては、未だ恤ふるに暇あらざるなり。然りと雖も家康は必ず我に負かず。汝が輩、謹みて秀頼を保護し、釁隙を生ぜしむる莫れ」と。又木村重成・薄田兼相・渡部尙をして、二人に副たらしむ。親兵を分ちて七隊と爲し、速水守久・伊東長次・青木一重・眞野宗信・中島氏種・野々村吉安・堀田正高を以て隊長と爲し、馬標・旗旗、盡く之を秀頼に傳へ、母衣騎郡良列・卒將津川左近をして之

を掌らしむ。八月、盡く大老・奉行以下を會して誓を爲さしむ。誓に曰く、「心を虚しくし謀を協せ、務めて嗣子を輔け、私黨を樹つること勿れ。公義を忘るゝ勿れ。變更する勿れ。漏泄する勿れ。告げずして婚を結ぶ勿れ。告げずして質を交ふる勿れ。嗣子六歳、未だ政を親らすること能はず。前田は之を大坂に保し、而して徳川は事を伏見に視、邑を封じ罰を行ふこと、皆嗣子の長ずるを俟て」と。淺野彈正・石田三成に命じて曰く、「汝、朝鮮に赴きて我が兵を收めよ。收むる能はずば則ち家康を遣れ。家康往くべからざる有らば、即ち利家を遣れ。二人のうち一を遣らば、百萬の敵有りと雖も尾すること能はざるなり」と。十三日、疾大に篤し。將に瞑せんとす。已にして目を張りて曰く、「我が十萬の兵をして海外の鬼と爲らしむる勿れ」と。言畢りて薨す。年六十三なり。羣臣、喪を祕し、前田玄以をして、密かに之を阿彌陀峰に葬らしむ。九月三日、徳川公、諸侯と嗣君に貳無きを盟ひ、遂に淺野・石田をして、遺命を以て肥前に赴き、密かに在韓の諸將を召さしむ。

徳川公、前田利家、毛利輝元、浮田秀家、上杉景勝を五大老となし、中村一氏、

生駒親正、堀尾吉晴を三中老とした。小さい事は奉行で決し、大きい事は大老が決する。大老と奉行が意見合はない場合には、中老が間に居てこれを和解する仕組である。そこで今度は一番腹心の片桐且元、小出秀正を秀頼の付添役とした。

秀吉は内密に二人に頼んでいふのに、俺は人奴より起る——草履取から身を起して、關白にまでなつたが、これは皆國恩の然らしむる所である。國恩は皇恩、即ち一として皇恩でないものがあらうか。然るに自分は明と戦さを起して、その禍ひは未だに解けない。自分は深くこれを後悔して居る。彼は自分が死んだことを聞いたら、必ず大擧してやつて来て報復するであらう。日本の朝廷は、古から未だ曾て外國の侵辱を受けたことがない。我が時代になつて、其の侵辱を受けるなどは、吾輩の深く恥づる所である。そこで國を家康に託したのだ。舊來の臣下からいへば、家康に國を託するのは残念かも知れないが、我が家の存亡など心配しては居られない。國が危いからこれを家康に託したのだ。然りと雖も家康は自分に背かないだらう。

う。お前達は秀頼を保護して仲違ひの出来ないうやうにして呉れ。

また木村重成、薄田兼相——これは講談本の岩見重太郎である——それと渡部尙をして秀頼の後見役たる片桐、小出の差添へとした。さうして親衛隊を分つて七隊となし、速水守久、伊東長次、青木一重、眞野宗信、中島氏種、野々村吉安、堀田正高をその七隊の隊長とした。これは豊臣の七手組の大將といつて仲々有名で、後に大坂陣では大いに勇名を轟かした。馬標旗（馬印し、旗印し）や千成瓢箪や桐の旗などは皆これを秀頼に傳へて、母衣騎（袋を背負つて居る騎兵）の大將郡良列、卒將津川左近（卒將は足輕大將）をして之を掌らせた。

どうも秀吉は日本一の英雄であるが、死ぬ時も日本一の苦しみを満喫した。出征の軍隊は目的を達することも出来ぬが、引揚げることも出来ない。併し、自分の體は、段々衰弱して行く、一家の後事も考へないではないが、國家の前途の危きを思へば、萬事國家本位に處置せねばならぬ。そこで天下を家康に渡さうとすれば、宿

將たちが之に服しないことは分り切つて居る。行く末どういふことになるか分らない。そこで死ぬにはそれを一つ調節して置かねばならぬ。それも秀吉の言ふ通りには仲々ならぬ。息の絶える時になれば、自分の思ふ通りには仲々ならぬものである。そこで本文に返り、

八月大老、奉行以下を悉く集めて誓をなさしめた。その誓にいふには、心を虚にして謀を協せ、努めて嗣子を輔けよ、家康に天下を渡さうとしても家康之に應ぜず、諸將も亦之に服しないから、私黨を立て、はならぬ。公義のことを忘れてはならぬ。一度決めたことは變更してはならぬ。密談で相談したことを漏らしてはいかぬ。許しを受けないで、結婚政策をやつてはいけない。又、許しを受けないで人質を交すことはいけない。嗣子がまだ六歳で、自ら政治をすることは出来ないから、前田利家は大阪で之を輔佐してくれ、徳川家康は伏見に居つて政治向を見て呉れ。さうして大名を邑に封じたり、賞罰を行ふことは皆、秀頼の長ずるのを待つて行つて呉れ。

さらに淺野彈正、石田三成に命じていふには汝は、朝鮮に赴いて我が兵を引揚げて来て呉れ、お前達で兵を収めることが出来なければ、徳川家康をやれ。家康が行くことが出来なければ、前田利家をやれ。この徳川、前田二人の中一人が居れば、明軍百萬ありとも我を追尾することは出来ない。こんな風にして秀吉は死に臨んで諸將を融和し、朝鮮の撤兵をやらうとしたのである。彼は死ぬまで内憂外患に悩んで居る。八月十三日疾大いに篤し。將に目をつぶらうとしたが、暫らくして目を見張つて曰ふには、我が十萬の兵をして海外の鬼とならしむる勿れと。言ひ終つて薨じた、年六十三である。群臣喪を秘し、——死んだことを發表しては敵に對してよくないのである。前田玄以をして阿彌陀峰に葬らしめた。九月三日、徳川公は諸公と共に秀頼に對して二心なきを誓ひ、淺野長政、石田三成をして、秀吉の遺命を以て肥前に行つて密かに韓國出征の諸將を召還させた。

秀吉が醍醐で花見をした時に、誰か之を諷して立札を立てた。「奢る者は久しか

らず。」それを秀吉は、家來をやつて書き直して來いと言ひ、「奢らずとも久しからず」と改めたさうである。奢つても、奢らずとも、到底、天命には抗することは出來ぬ。蟲の息になつた時は、横綱でも人足に叶はない。秀吉も將に息を絶えんとする時には、洵に助けなき身になつた。その最後の言葉は悲痛である。「目を張りて曰く、我が十萬の兵をして海外の鬼とならしむるなかれ」と。言畢りて薨す。」息の切れるまで、惱みに、惱んだ姿が偲ばれるのである。彼れの死なんとして發して悲痛なる言葉の中に、彼れの責任感が溢れて居る。

大谷吉隆舊誼を重んず

利家、疾有り。加藤清正・細川忠興・淺野左京大夫と、利家に勸めて、疾を興して伏見に赴かむ。三月、徳川公も亦、大坂に往く。利家、病甚だし。扶けられて起き、泣きて之に囑して

曰く、「吾、將に且夕に地に入らんとす。願はくは公、心を盡して嗣君を輔けよ」と。徳川公曰く、「諾」と、利家の次子利政・徳川公を刺さんと欲す。其の兄利長の止むる所と爲る。三成等、小西行長の宅に會議して曰く、「内府專横、嗣君を蔑視するは諸老の共に憤る所なり。速かに之を除かざるべからず」と。行長、因りて襲撃の策を建つ。前田玄以、素より款を徳川氏に通ず。故に異議を發して之を沮む。三成、又火器を以て之を伏見の第に襲はんと欲す。細川忠興を延きて謀を告ぐ。忠興、復之を沮止す。走りて徳川氏に告げ、之をして向島に徙り居らしむ。行長曰く、「諸公、文墨に明にして兵機に暗し。乃ち賢子の誑す所と爲る」と。大谷吉隆、諸奉行の謀を聞き、増田長盛に謂ひて曰く、「吾、諸公の爲す所を視るに、嗣君を利するに務めずして、専ら内府を害す。内府、苟も嗣君に貳あらば、宜しく其の罪の著るるを俟ちて之を討つべし。天下、誰か之を棄てて彼に歸する者有らんや。今、我より讐を開かば、彼則ち辭有らん。是れ獨り自ら禍するのみならず、乃ち嗣君に禍するなり」と。長盛以て三成に告ぐ。三成肯んぜず。

太閤の歿後は、前田利家が大坂城に入り、秀頼の守役を勤めて居る。徳川家康は伏見に居つて、専ら政治を裁断し、大坂に御機嫌伺ひにも出て来ない。會々利家は病氣に罹つた。加藤清正が細川忠興、淺野左京大夫と共に利家に勤め、病身を興に乗せて、伏見に行かした。そこで徳川家康も亦、返禮の爲め三月になつて大坂に出て来た。利家病甚し——彼も戦争ならば相當なもので、家康にも負けない自信はあるが、病には勝てない。——人に扶けられて起き上り、泣いて家康に頼んで言ふには、吾、將に旦夕地に入らんとす——もう自分は早晚死んで、地に埋められるのだ、願くばどうか、あなたは、心を盡して嗣君秀頼を輔けて呉れよと。徳川公曰く諾——承知したと。

利家は、實にやる瀬ない思ひであつた。秀頼は、利家になれ親しみて、加賀の爺と言ふて慕ひ寄るのだ。秀頼がいとほしくて仕方がない。その切なる訴に對して、徳川公曰く諾、この態度が氣に入らないから、次子の利政が此の機會に、徳川公を

刺さうとした。然るにそれを兄の利長が止めた。

そこで石田三成等は小西行長の宅に集つて會議して言ふには、内府(内大臣家康)は實に專横である。嗣君を輕蔑して居る。諸老も憤つて居る。速かにこれを除かねばならぬと。そこで小西行長が襲撃の策を立てた。所がもう間諜が忍び込んで居る。前田玄以は款を徳川氏に通じて居る。故に會議を發してこれを沮んだ。三成は鐵砲を以て伏見の邸を襲撃しようとした。それを細川忠興に謀つた所が、忠興はこれを沮止し、走つて徳川氏に告げ口をした。さうして徳川氏に教へて、伏見から向島に居室を移させた。

そこで小西行長、嘆息して曰く、諸公、文墨に明く、兵機に暗し——諸君は文筆や墨紙のことにはあかるいが、詰り刀筆の吏で、活きた戦さには通じて居ない。踏切りがつかず、時機を失するばかりである。そこで豎子の誑す所となる。——あんな小僧共に誑らかされるのだと。これは石田三成のやり口を憤慨したのであら

う。さういふことにかけては行長は勇猛果敢で、且つ敏捷である。

大谷吉隆は、諸奉行の謀を聞き、増田長盛に言ふには、自分が諸公のすることを見て居ると、嗣君秀頼に利することを考へないで、唯一途に徳川家康を片づけやうとして居る。内府が若し秀頼公に對して、二心があるなら宜しくその罪の現はれるのを待つて討つが宜しい。さうすれば、天下何處に、秀頼を棄て、家康に歸する者が居らうか。今自分の方から事を構へたならば、彼は即ち辯解する言葉があるであらう。そんなことをすれば即ち獨り自ら禍するばかりでなく、嗣君秀頼に禍ひするのである。却て秀頼の爲にならないと。此の大谷吉隆の言を増田長盛から三成に話したが、三成はこれを肯き入れなかつた。

大谷吉隆は後に石田三成の爲に義に赴き、關ヶ原に驍名を轟かした武將であるが、思慮周密にして輕舉妄動を好まなかつたのである。

五年春徳川公上杉景勝に西上を戒む。答へて曰く、「我、太閤の遺旨を受け、東陸を鎮守す。何ぞ内府の令を受けんや」と。乃ち其の盟に背く十罪を數む。徳川公、大に怒りて、東上杉氏を伐たんと議す。夏、其の義女を以て黒田長政に妻はせ、兵を伏見に留めて、自ら諸軍に將として東下す。三成、兵を起して其の後に乗せんと欲す。會々大谷吉隆、其の呂教賀より師に會す。三成、人をして之を要せしめ、告ぐるに其の謀を以てす。吉隆、其の非計を極言す。三成肯んぜず。吉隆乃ち訣し去り、低回すること之を久しくして曰く、「吾、治部と共に太閤に仕ふ。舊相好し。今、其の事克たざるを知りて、之を棄つるは義に非ず」と。乃ち還る。三成大に喜び、長東正家と皆大坂に赴き、増田長盛を見て議を定む。秋、遂に書を遠近に移して曰く、「内府、罪有り。嗣君、命じて之を討たしむ。苟も太閤の恩誼を念ふ者は、宜しく來りて力を戮すべし」と。毛利輝元以下の侯伯、來り會する者四十餘人。時に東西諸侯の妻子、皆大坂に在り。三成、之を城中に收め、輝元、長盛をして大坂を守らしめ、浮田秀家、小早川秀秋、島津義弘等四萬人に將として伏見城を攻め、小野木重勝等二萬人に將としに田邊城を攻め、毛利秀元、長東正家、僧惠瓊と三萬人に將として阿濃津を攻め、京極高次等二萬人に將として北陸を徇へ

しむ。吉隆、敦賀に在り。北莊、大正寺、小松の三城を招きて之を下す。前田利長、弟利政と徳川氏の爲めに攻めて大正寺を抜き、遂に北莊を攻めんと欲す。北莊、援を敦賀に乞ふ。吉隆乃ち自ら將として赴き援く。或ひと曰く、「堀尾氏の兵、府中を守りて我が後に在り。先づ取らずば、則ち進退皆難からん」と。吉隆曰く、「北莊陥らば、則ち小松孤立せん。府中の若きに至りては則ち必ずしも取らざるなり。亦取るべからざるなり、即し取るべくば、兵を分ちて之を守らざるべからず。分ては則ち兵寡し。寡を以て衆に對す、是れ難しと爲すのみ。且つ彼必ず敢て我を要せず。是れ我、敵をして城を守らしむるなり。我既に北兵を卻けて諸城を存せば、則ち彼攻めずして下らん」と。即夜五更、馳せて北莊に至る。利長の姉夫中川宗伴、京師に在り。將に北陸に赴かんとす。吉隆、要して之を執へ、書を爲りて利長を給かしめて曰く、「内府、西上す。將士、多く之に叛き、大坂の兵、之を美濃に逆へ撃ちて、之を走らす。遂に舟師を發し、將に加賀を取らんとす。公、宜しく早く之が備を爲すべし」と。利長、書を得て疑懼し、兵を引きて卻く。府中、果して遂に吉隆に降る。會と高次等至り、兵を合せて大正寺を復し、遂に後前を定め、守を置きて南す。吉隆、三成をして織田秀信を招かしむ。秀信、岐阜を

以て降る。是に於て、三成、諸將を導きて大垣に至る。秀家等、伏見を抜きて來り會す。徳川公、下野に至り、變を聞きて爲めに驚かず。然れども諸將の質の大垣にあるを以て、頗る之を疑ひ、人をして其の去就を問はしむ。諸將皆奮ひて、三成を撃たんと欲す。乃ち誓ひて曰く、「公、苟も太閤の約を渝へず、善く嗣君を視ば、則ち僕等、力戰して必ず治部を梟せん」と。諸將乃ち先づ發す。首に岐阜を攻めて之を下す。三成、島津義弘と之を援く。及ばず。東軍、赤坂に陣す。秀家、夜、之を襲はんと欲す。三成聽かず。秀元、阿濃津を抜き來りて南宮山に陣す。秀秋、來りて松尾山に陣す。初め秀頼、生母淀君と大坂に居り、而して嫡母淺野氏、北廳と稱して京師に居り、庶母京極氏、松城君と稱して大津に居る。北廳の兄を木下家定と曰ひ、家定の子を秀秋と爲す。兵起るに及び、北廳、人をして秀秋を戒めしめて曰く、「内府、秀頼に不利ならば、則ち力めて之を拒げ。然らずば則ち之に負く勿れ」と。秀秋、遂に款を江戸に送る。松城君の弟を京極高次と爲す。高次、封を大津に受け、徳川氏の嗣子と、竝に淀君の妹を娶る。亦款を江戸に送る。岐阜陥るに及び、吉隆、北陸の諸將を召して大垣に會せしむ。高次後れて發し、馳せて大津に歸り、兵を擧げて徳川氏に應ず。立花宗茂、筑紫廣門、大垣に

赴き、石部に至る比之を聞き、返りて勢多に陣す。會と毛利秀包等大坂より來る。則ち兵を合せて高次を攻む。淀君、二女を遣して、松城君及び高次夫妻に諭さしむ。肯んぜず。宗茂等攻めて其の郭を奪ふ。而して城未だ下らざるなり。

秀頼は前田利家を隨へ、居城伏見を出で、大坂に移つた。そこで、伏見の城には家康が乗り込み、秀吉氣取りで政治を專斷する。後に、家康が伏見に据り込み、大坂に參觀しないのが屢々問題となつた。そこで家康は、慶長三年八月、大坂に出て行き厚かましくも、其の西の丸に留つた。西の丸は、秀吉未亡人北政所の居つた所だが、家康に乗り込まれて、京都に退かねばならなくなつた。それから家康は、傍若無人に振舞ひ、諸將を貶黜するやら、質子を入れさするやら、太閤の遺言など眼中に置かなくなつた。

そこで、情勢黙視する能はず、石田三成が主として謀略を廻らし、徳川征伐の首

謀者となつた。これと謀を通じたのが東北の重鎮上杉景勝、その宿將直江山城守である。先づ上杉家で東北に事を起して頑張つて居れば、家康は必ず北征する。さうすると伏見、大坂がから空きになる。その機會に石田三成が諸侯を語らひて、家康追討の軍を起す。家康が、上杉景勝に引つ掛つて躊躇逡巡して居る間に、兵を東に進め、東北の軍と關西軍とで家康を挾撃してやつつけると言ふ計畫である。

此の謀略を石田三成が始めて直江兼繼に打明けけた時、直江は當惑の色を見せた。曰く由なきことを相談を受けたものである。併し、上杉家は太閤の恩顧を被ること一方ならざるものがある。謀を打明て頼まれた以上、協力せねばなるまい。併しこの戦さは負けまずぞ、止したが宜しい。貴殿は非常に偉いけれども、太閤の恩顧に依つて身を立てた人で、實戦の殊勳がない。そこは、加藤や福島とは違ふ。その上貴殿は五奉行の一人として政治の衝に當つて居るので、正直者の武將たちが、盡く貴殿を嫉視して居る。貴殿が故太閤の恩義を思ひ、一旗擧げやうとする意氣は悲

壯である。併し貴殿は徳望がない。身分が足らぬ。せめて前田利家、それでなければ加藤清正ぐらゐの者と組まねば成功覚えない。その前田は、亡くなつて居り、加藤は貴殿の敵である。貴殿としては辛からう。故太閤の骨未だ冷やかならずして、恩顧の人々が、おめく狸親爺の前に尾を振つて行く。よし、貴殿の義に感じて引受けやう。其の代り、遅蒔きながら、貴殿も徳望を修めよ。政治から遠ざかり、佐和山の城に歸つて實力を養はうでないかと。これで石田、直江の提携が出来たのである。

石田三成も何かと同志の妬みを受けたが彼もさる者である。一萬石の知行を貰つて居る時に、その五千石を割いて島左近勝猛を抱へた。三萬石貰つた時には、一萬五千石を與へた。三成に過ぎたる者は、島左近と稱し、嘆賞せぬ者はなかつた。佐和山の城は天下の名城であつた。三成が、曾て加藤清正等の七將に襲撃された時、徳川家康が三成を護衛せしむる爲に、其の手兵を送り、その序に、佐和山の城を偵

察させたことがある。仲々堂々たる城造りで要害堅固なものであつたが、殊に驚いたのは外觀の豪壯なるに肖ず、城内の普請の甚だ簡素なることであつた。總て室内の壁は粗壁のまゝであつた。柱は丸太のまゝであつた。疊は全部刺し疊であつた。必要なものは、皆備はつて居るが華奢なもの、贅澤なものは一つもなかつた。そこで家康の家來達が、あの打物を取つて戦つたこともない優弱な男に似合はず、城の造りは嚴重一式で裝飾などは一つもない。彼はたゞの人間でないと驚嘆したさうである。

東北の鬼才直江山城も、かういふ見所があるので石田と肝膽相照したものと思はれる。一體、徳川時代に書かれた歴史とか傳記とか、徳川の敵たる石田、小西を悪しざまに罵つて居るのは甚だ過酷である。人物論は別として加藤、福島等の恩顧の大將が、豊臣家の敵たる家康に付き、感情に驅られて石田、小西を敵視し、遂に豊臣の社稷を失つたのは何としても不見識である。

さて本文に返り、慶長五年の春、徳川家康は會津に空嘯いて居る上杉の西上を促したが、景勝は聽き入れない。曰く、余は太閤の遺旨を受けて東邊を鎮守して居るのだ。何で内府家康の命令など受くるものかと。却て家康が、盟に背いた十箇條をあげて詰責した。これは秀吉が臨終の際に諸侯を集めて誓をなさしめたことがある。それには私黨を立て、ならぬこと、公義を忘れてならぬこと、許可を得ずして結婚してならぬこと。許可を受けずして人質を交換してならぬこと。諸侯を邑に封じ、賞罰を行ふのは、秀頼の成年に達するを待つこと等々が擧げられて居る。然るに家康は、勢威を頼みて誰憚る所もない。前田利家の遺兒利長を脅やかして、其の母を人質にとり、前田と近親なりし大野治長、土方雄勝、淺野長政等を處分し、自分の方では伊達、福島、蜂須賀の三家と結婚政策をなし、傍若無人に振舞つた。そこで上杉景勝は此等の罪狀を列擧し、秀頼を蔑ろにするを詰り、仲々痛烈にやつつけたのである。そこで家康は憤激し、東に向つて景勝を討つべく軍議を凝らした。其の

夏、自分の義女を以て黒田長政に妻はした。黒田長政は、朝鮮征伐以來、勇名を轟かした猛將である。家康は之に對し婚姻政策を行つたのである。さうして兵を伏見に留め、自らは諸軍の將として東に上つた。そこで三成は兵を起して其の隙に乗せんとした。

丁度其の際、大谷吉隆が自分の領地の敦賀から兵を引連れて、家康の東征の軍に加はらうとして居る所であつた。三成は人をして途中に待受けしめて、自分の謀略を告げしめた。吉隆は、そんな拙いことをやつてはいかぬと極言した。三成は肯かない。肯かないから吉隆は訣別して去つた。去つたが、低回——行きつ戻りつして、稍々久しくして後曰ふには、吾は治部——石田三成と共に太閤に仕へて良い仲であつたのだ。今、そのことが巧く行かないといつて、これを見棄てるのは義に背くといふものだ。かくて、彼は引返して三成に應じた。三成は大いに喜んで、長東正家と皆で大坂に赴いて、増田長盛と相談して軍議をこらした。

秋、遂に書を諸方に送つて曰く、内府家康に罪がある。嗣君秀頼が、命令して之を討たしめるのだ。苟くも、太閤の恩誼を念ふ者は、來て宜しく力を協せよと。毛利輝元以下の諸侯伯、來り會する者四十餘人に及んだ。此の時、東西諸侯の妻子は皆大坂に居つたが、三成、これを城中に收めた——即ち諸侯の妻子を城中に留めて、人質としたのである。——さうして毛利輝元、増田長盛をして大坂を守らせ、浮田秀家、小早川秀秋、島津義弘等は四萬人を率ゐて鳥井元忠の守る伏見の城を攻めた。小野木重勝等は二萬人に將として田邊城を攻め、毛利秀元は長束正家、僧惠瓊と共に三萬人に將として阿濃津を攻め、京極高次等は二萬人を率ゐて、北陸に宣傳しながら、同志を募つた。

大谷吉隆は居城敦賀にあり北莊、大正寺、小松三城を招いてこれを降參させた。そこへ、金澤の前田利長が、弟の利政と、徳川氏の爲に、大正寺を攻めてこれを抜き、更に、北莊を攻めんとしたので、北莊は援兵を吉隆に乞うて來た。吉隆は自ら

將として北莊に赴き援けんとした。さうしたら、或る人がいふには、堀尾氏の兵は府中を守つて、我が背後に居る。先づ先にこれを取らなければ、即ち進退兩難に陥るだらうと。吉隆がいふに、北莊を取れば小松は孤立する。後ろの府中の如きは、取る必要もないだらう。否、取る必要がないばかりか、取つてはいけないのである。若し、取つたならば兵を分ちて、その府中を守らなければならぬ。兵を分ければ、兵が少くなり、寡を以て衆に對すると、事が難かしくなる。且つ府中にある堀尾は必ず我を要撃しないだらう。それなら敵をして、城を守らせることゝならないか。敵に御預けして置けばよい。その間、北莊を討つて敵を卻け、以て諸城を存して居たならば、即ち、彼はこちらから攻めずして降參するだらうと。さういつて、その晩の五更、馳せて北莊に至つた。

丁度そこに、利長の姉婿中川宗伴が京都から北陸に歸へらうとして居つたが、吉隆は彼を途中要して捕へしめ、彼に手紙を書かせ、利長を欺かして曰く、内府が西

上しようとする、將士が多くこれに叛いた。そこに大坂兵が彼を美濃に逆撃してこれを走らせた。大阪兵は遂に舟師を出して加賀を取らうとして居る。早く備へをせねばならぬと。かういふ手紙を姉婿の中川宗伴の名でやつたので、利長は且つ疑ひ且つ懼れ、兵を引いて退いたので、府中は遂に吉隆に降つた。

日本の作戰要務令にも獨逸の「軍隊指揮」にも各方面に氣を配りて、各方面に生半可の備へをなすことは禁物であるやうに書いてある。第二義的の處はほつと置いて、要點に力を集中するは、日本武將の習はしであつて、さすがに大谷吉隆である。會々高極高次等がやつて來たので、兵を合して大正寺を取り返し、遂に越前を定め、守備を置いて南進した。これは敦賀にある大谷吉隆が加賀の前田に、一泡吹かせて大坂方の急に赴いた所である。

そこで吉隆は、石田三成に勸めて織田秀信を招かせた。秀信は岐阜を提げて降參して來た。三成は諸將を導いて、大垣に出た。浮田秀家等は、伏見を攻め落して來

り會した。徳川公は、下野の小山に至つて變を聞いたが、少しも驚かない。併しながら、諸將の人質が大坂に居るので、頗る諸將の態度を疑つて、人をして如何に彼等が去就するかを問はしめた。所が諸將は皆奮つて三成を撃たんと欲した。そこで誓つていふには、徳川公が太閤との約束を變へないで、善く嗣君秀頼の面倒を見て呉れるなら、自分等は力戦して必ず石田の首を梟しものにしよう。忽ち進發して、岐阜を攻め下した。

これはやはり豪傑達が時勢の變化につれて心が動搖して居るのである。如何に石田に對する嫉妬心とは言へ、天下分け目の戦に家康に味方することは、太閤の舊恩に對して相すまないわけである。又古狸の如き家康から一片の誓を取り、敵の憐愍に訴へて、豊臣の社稷を保たんとするは愚の極である。斯の如くして諸將は、石田を罵りて、家康の爲に犬馬の勞に服し、天下分け目の關ヶ原に臨んだのである。

此の時に際して家康の態度は、天晴れ天下を取るの貫祿を示して居る。下野の小

山で變を聞いた時、世子秀忠、結城秀康、其の他恩顧の將士盡く會して評議を凝した。智者と謂はれる本多正信は、大坂の人質のことをえらく氣にし、向背測る可らざる諸將を陣中に置くよりは、盡く之を送り還し、腹心の者だけで四疆を守らうと言ひ出した。そこに井伊直政が進んで曰ふに、徳川には天下の運が向いて來たのだ。天下の與ふる所を取らざれば、反つて其の殃を受くると云ふ諺がある。さあ、大旗を押し立て、群がる敵を一掃しよう。愚圖々々して一角を保つなどは、絶對同意まかりならんと。佛然として席を蹴つて出て行つた。さすがに家康は井伊直政の積極論に賛成した。

それで家康一門の祕密會議は終了し、直ちに諸將に對して事實を打明け、高飛車に去就を決せしめたのである。こんな場合、若し愚圖々々して居れば、西軍は益々勢を増す。北方の上杉景勝も軍を進めて來る。家康は下野あたりで袋の鼠となつて居たであらう。慎重なばかりが家康の能事でない。彼には老功にして併も果敢なと

ころがある。

話は岐路に入るが、その時上杉景勝はどうして居たであらう。否、景勝の謀臣直江山城はどうして居たであらう。家康撃滅の一策を仕組んだ張本人は石田と直江とはなかつたか。家康が野州小山から軍を引き返す時、直江兼繼は景勝に勸めて言ふた。さあいゝ潮合だ、こゝで追討かけて勝負を決しやうと。然るに上杉景勝も上杉謙信の後嗣ぎで、まるで凡將ではない。彼には彼の方寸がある。彼は曰く、家康を追討するのはよいが、我が背後に仙臺の伊達政宗があり、虎視耽々として控えて居る。先づ政宗を一撃して後、西に向つても遅くはないではないかと、さうする直江兼繼も黙つて居らぬ。冗談ぢやない、伊達から會津を衝かれればそれが何だ。會津百萬石なんか問題でありませぬぞ。殿様、冗談ぢやない、今は天下を争つて居るのだ。天下を取れば會津は要らぬ。さあ、夙く夙く出でやう、さうして天下を取るのだと。景勝は自説を固持し、さういふ疎忽な軍略はない。先づ伊達をやつつけ

て行つても遅くはないと。

直江兼繼は泣かぬばかりに切言した。私は先君に従つて及ばずながら幾多の戦場に馳驅した。今日の情勢は川中島の戦争とそっくりである。今徳川の陣が亂れながら引きあげて行く。その有様は川中島で、武田の陣が動搖して居るよりもつと見苦しい。若し、先君不識庵にしまさば、私の言を待たずに一氣に抜け掛けして家康に迫らるゝだらう。さうして彼が素首を一刀の下に叩き斬らるゝだらうにと。かう言はるゝと景勝は益々むくれてしまつた。

そこが二代目の悲しさである。曰く先君には先君の流儀があらうが、俺には俺の軍さ振りがある。俺の軍さは俺の采配でやるのだと。話をして居る中に直江兼繼はあきらめてしまつた。もう何も言ひませぬ。凡そ戦さには潮合がある。あなたが色々言はれるうちにもう機会は去りました。彼は整然として西に向ひ、こゝで家康を討ちもらすと天下分け目の戦で屹度負けるであらう。實に残念だ。併しもう致し方

がない。私が伊達を恐れて居ると仰しやつたが、決してさうではない。御命令の儘、一生の思ひ出に一つ伊達をやつつけてお目に掛けやうと、そこで馬首を廻らして伊達勢に向ひ、自分が先鋒になつて散々にこれを蹴破つた。さうして肝腎の關ヶ原には間に合はなかつた。徳川に運があつたのである。これは有名な直江兼繼の戦略論である。

彼は上杉家が會津の百萬石を領した時には、三十萬石貰つて居た。關ヶ原の戦ひの後、上杉は徳川から譴責されて米澤の三十萬石に移された。上杉家では直江に十萬石をやらうとしたが、直江は却々之を受取らない。やつとのことで、僅か一萬石だけ貰ふことにした。高は一萬石でも上杉家の直江といへば、天下の其の名を謳はれ、陪臣でありながら天下の大名で通用した。

彼は非常に偉い男で、上杉家が會津三十萬石に凋落した時、嚴然として主君に向つて言つた。三十萬石になつてしまへば、この次は家康から滅ぼされる番になる。

一度で滅ぼされないので、三十萬石を呉れて居るのは、謙信公以來の猛將勇士が揃つて居るのが怖いからである。つまり百萬石の實力が三十萬石を繋ぎ止めたのだ。それ故に三十萬石で以て百萬石以上の力を養はうではありませんか。今迄の家來は一人も罷免することは相成らぬ。私の一萬石は半分御返しする。さうして從來の家來を浪人させないのみか、器量ある浪人までも召抱へやうではないですか。それでなければ三十萬石も維持することは出来ない。彼は三十萬石の知行で百萬石の實力を具備せんと欲し、所謂殖産興業を大いに考へた。後に上杉家には鷹山公が出て、大に養蠶とか、紡織とかを奨励したが、その端緒を開いた者は、實にこの直江兼繼である。

石田三成、直江兼繼などは豊臣家の衰亡に際し、徳川家康を向ふに廻して、萬丈の氣焰を吐いたものである。其の後徳川家の天下となつた際、一萬石の直江兼繼が江戸に出て來た。折悪しくも伊達政宗と同席したことがある。政宗は諸侯を集めて

茶會か何かを催して居た。彼は南蠻貿易などやつて居たので、南蠻から來た小判を諸侯の廻覽に供した。諸侯は次から次に之を手に取り、誠に綺麗なものだといつて感心した。直江はそこに坐つて居つたけれども、身分が違ふのである。直江は諸侯たる上杉の家來で、居並ぶ諸侯とは格違ひである。それ故、手を出すのを躊躇して居つた。伊達政宗がそれを見て、直江苦しうない、手に取れと聲をかけた。直江は扇子を開いてその小判を受取り、ピンピンと扇面の上で撥ね返して後、私の手は采配を執る手で御座る。町人の手にするものは汚らはしう御座る、と曰つて、其の儘大きくピンと撥ね返した。直江の面目躍如たりである。

それから江戸城の廊下で伊達政宗と摺れ合つた。直江は禮もしないで過ぎ去つた。伊達政宗が怒つて呼び返し、陪臣の身分で無禮であらうと責めた。直江は振返つて見ておゝさうか、伊達だつたか、貴殿の顔はついで前から見たことがなかつた。戰場で御目に懸つた時には何時も後ろばかり見せて居られた。成程、振返つて見れば

其の後姿は正しく伊達政宗、これは無禮仕つたといつたさうである。仲々偉い人物である。

そこで本文に返つて、石田三成は東軍の進撃に會ひ、島津義弘と共に織田秀信を援けやうとしたが、力及ばなかつた。東軍は進んで赤坂に陣した。浮田秀家はこれに夜討をかけやうと主張したが、三成は聽き入れない。彼は自分の謀略を信じて居るのである。彼は元來政治家肌であつて、ほんとの戦さには遺憾な所がある。毛利秀元は阿濃津を抜いて南宮山に来て陣した。小早川秀秋は松尾山に陣して居る。松尾山は西軍の最右翼にあり、小早川秀秋は二心を抱へて居るので、此の形勝の地を占めたのである。表面は戦機の熟するを待ち、側面より東軍を叩くと云ふのであるが、それが敵に内應して居て、逆に西軍に雪崩れかゝつたので叶はない。關ヶ原の戦局はかくて徳川勢の爲に有利に轉回したのである。

そこで話は少しく前に戻るが、初め秀頼は生母淀君と大坂に居る。嫡母して本當

の母でない、秀吉の正妻は北政所(淺野長勝の養女で、曾て藁蓆瓦缸で以て結婚した正妻)といつて京都に居る。京都であるから家康の伏見に近い。大衆小説では家康が北政所と通じたとか、何とか、面白半分おもしろはんぶんに書いて居るが、これは全くの嘘で彼は極めて賢明嚴肅な人格であつた。庶母といふのは生母淀君の妹で、松城君と稱して大津に居る。此の北政所の兄が木下家定で、その子が秀秋である。小早川家の養子であるが、養父隆景は此の押しつけられた不肖の子が、如何なる者であるかを見抜いて居たさうである。

關ヶ原の戦争を見ると、どうも正妻派は、皆家康に加擔して、豊臣を滅ぼす側に付き、淀君側は皆、秀頼を奉じて徳川と戦つて居る。如何なる賢夫人でも妾の子に對してはほんとの親心が起らない。豊臣家に對しては忠であつても、秀頼に對しては愛が足りない。淀君側からすれば北政所は烟たい存在であつたらう。そこが人情の淺ましさで、社稷を危うするに至つたのである。戦争が起ると北政所は人をして

秀秋を戒しめて言ふに、内府が秀頼の爲に不利であるなら、努めてこれを拒げ、それでないなら之に負くなと。こんな訓戒は不徹底である。秀吉の死灰も未だ冷やかならざるに、天下に號令して、一に徳川氏の爲に計つて居る家康の妄狀が彼女の目に見えないのであるか。見て之を感ぜざるは、心が歪んでゐるのである。せめて自分の甥の秀秋をして、豊臣氏の爲に、死せしめば、日本婦道の爲に光燄を吐く萬丈であつたらう。惜しいことに秀秋は遂に江戸に款を通じた。それから松城君の弟は、京極高次である。その高次は天津に封ぜられて居たが、徳川の嗣子の秀忠が淀君の妹を娶つて居るので、此の高次も亦江戸と續き合ひである。これも亦、款を江戸に送つてゐる。

岐阜が陥るに及び、吉隆は北陸の諸將に命じて大垣に會せしめた。彼は前面なる敵の主力にぶつからうとして居るのである。京極高次は後れて出發し、馳せて天津に歸り、兵を擧げて徳川氏に應じた。立花宗茂と築紫廣門とは大垣に赴かんとし、

石部に至る頃に、京極高次が背いて天津にあるを聞き、引返して勢多に陣した。丁度そこに、毛利秀包等が大坂からやつて來たので、兵を合せて高次を攻めた。淀君は自分の親類筋であるから二人の女使節を遣はし、松城君及び高次夫妻に説かしめたが聽き入れなかつた。宗茂等はそこで城の外廓を奪つたが、城はまだ陥落しない斯くて東軍の西上を邀へ撃つのであるが、松尾山には小早川秀秋、南宮山には毛利秀元が居る。そこに禍ひの中心であつた。

是に於て、諸將大に戦を決せんと議す。秀家、吉隆、固く大垣を守りて、田邊、天津の兵を俟たんと欲す。島津義弘、夜、赤坂を襲はんと欲す。三成、其の衆を恃みて、皆聽かず。關原に出で戦はんと欲し、夜、南宮に赴き、秀元に東軍を夾撃せんと請ふ。秀元、素より款を東軍に通ず。伴りて之を諾す。三成、遂に松尾に赴き秀秋を奨厲す。秀秋、已に東軍と内應を爲さんと約す。亦伴りて之を諾す。吉隆、秀秋の異あるを疑ひ、其の兵を以て松尾山の下に陣す。吉隆、惡疾有り。絹を以て面を蔽ひ、輕服にて轎に坐し、其の左右を戒めて曰く、「敗に及ばば、

速かに我が頭を斬れ」と。且日、兩軍大に關原に戰ふ。辰より未に至る。東軍、數と卻く。而して秀元、秀秋、皆觀望して戰はず。東兵窪島某、馳せて徳川公に白して曰く、「秀秋、約に背くに似たり。請ふ、更に計を爲せ」と。徳川公驚きて曰く、「我小兒の賣る所と爲るを悔ゆ」と。窪島をして、松尾山に向ひて礮を發して之を促さしむ。黒田長政も亦、人をして秀秋を責めしむ。秀秋乃ち兵八千、銃手六百を以て山を下りて吉隆を撃つ。吉隆怒り、呼びて曰く、「豎子、恩に背き義を忘る。舍す可からざるなり」と。六百人を以て直ちに其の麾下を衝く。戸田重政、平塚爲廣、吉隆を助けて大に秀秋を破り、東軍の監使奥平貞治を斬る。而して脇坂、朽木、小川、赤座等皆秀秋に應じ、東將藤堂高虎、織田長孝等と三面より之に逼る。重政、爲廣、皆戰死す。吉隆の隊將湯淺五介、退きて之を吉隆に告ぐ。吉隆曰く、「吾以て死すべし。敵をして吾が元を傳へしむる勿れ」と。遂に自殺す。五介、之を剄し、侍臣某をして之を泥中に藏めしめ、駢びて高虎の陣を冒して死す。吉隆の二子吉胤、吉之、姪頼繼、皆力戦し、返りて空轡を見、相泣きて死せんと欲す。從者之を諫む。乃ち走り敦賀を守らんと欲す。肯て納るる者無し。遂に大坂に走る。頼繼、尋ぎて病死す。

そこで諸將が大いに戦ひの評定をした。浮田秀家、大谷吉隆等はこの大垣を固守して田邊や大津の兵の來るのを待たんことを主張した。

氣の早い島津義弘は赤坂の敵陣に夜襲を掛けやうと主張した。島津の計は由て來る所がある。西軍は二つに別れて東北から引返して來たが、徳川秀忠の率ゐる一軍は中山道に於て上田にさしかかり眞田昌幸、幸村の親子に支へられて前進することが出来ない。徳川家康の一軍は海道より進み來つたが、秀忠の軍を待ち合せて數日間も逡巡し、赤坂に屯して居るのである。併も、其の前衛は、浮田秀家、石田三成の爲に破られて居る。其の孤立に乗じ、奇襲せんとするのが義弘の軍略である。然るに三成は其の多勢を恃んで、何れの説をも聽かなかつた。彼は大兵を纏めて關ヶ原に出で戦はんとするものである。

石田は籠城作戦、夜襲作戦を斥けて、堂々、關ヶ原の野に一大遭遇戦を展開せんとするものである。此の場合、參謀長格たる石田三成は非常に戦さがやりにくいので

ある。五奉行の一人ではあるが、島津にしても、大谷にしても、浮田にしても、皆同輩若くは先輩であり、殊に百戦老功の名將軍で、戦にかけては俺の方が石田より上手だと思つて居る人々である。島津は夜襲を主張して容れられないから、俺の戦さは俺が勝手にすると云ふ調子で、敵陣を正面突破して歸つて仕舞ふのである。

石田は實力の參謀長であるが、其の身分が低くて諸將が統制に服しない。これは前田利家と云ふやうな貫祿ある大將なら餘程やり好かつたであらう。命令一つで軍を動かしてよい所を、石田は自ら友軍の陣營に赴ひて、理解と協力を仰がねばならない。彼は戦争の前夜から大雨を冒して、各陣を馳せ廻り、氣力も體力も使ひ切らねばならなかつた。彼は參謀長だが、先輩の將軍に對して命令することは出来ぬ。戦略を進言し、同意を求めて協力を仰がねばならぬ。餘り丈夫でない體で大雨に打たれて冷えこんだ爲か、石田は劇しき下痢にかゝつて居た。それでも汗馬に鞭ちて、終夜馳せ廻り全く疲勞困憊した。

だが、其の意氣は颯爽たるものがある。彼は夜、南宮山に赴き毛利秀元に挾撃をするやう請うたが、秀元は敵に内通して居つてこれを諾した。今度は松尾山に赴き小早川秀秋を勵まし奨めたが、これも東軍と内通して居るので伴りて承諾した。三成の布陣は大體宜しきを得たが、此の秀元と秀秋を見損つて居たのが、破綻の本である。

大谷吉隆は、秀秋の異心あるを疑ひ、自分の兵を以て松尾山の近所に陣した。此の吉隆には悪疾がある。吉隆は癩病に罹つて居た。それで薄絹を以て顔を蔽ひ、甲冑も着けず、軽い平服のまゝ、轎に乗つて出陣した。さうして左右の者を戒めて言ふに、敗れたなら、直ぐ俺の頭を斬れと。これは癩病の死に恥を掻きたくないからである。

彼は身は癩病であつたが、心は最も悲壯であつた。癩病の身を以て亂軍の中に屹立し、最後まで奮戦した武者振り、石田三成に對する武士道とは後世もこれを認め

て居る。翌日、兩軍は大いに關ヶ原で戦ひ、朝から晝過ぎまでの戦争に東軍は屢々押され氣味で退いた。

此の際、小早川秀秋が變節せず、毛利秀元が逡巡せず、一氣に東軍に襲ひかゝつて居たら、他の日和見の諸將も、之に促され、或は、西軍の勝となつて居たであらう。然るに、秀元、秀秋は傍觀して戦はない。内應は約束して居るが、松尾山、南宮山の兵は動かさない。

そこで東軍の窪島某は馳せて徳川公に言ふに、秀秋はどうも約束に背いて戦はないらしい。請ふ、改めて更に計を立てなさいと。徳川公驚いて曰く、それは實に残念だ。小兒の賣る所、秀秋のやうな小僧に賣られたのだと。兎に角、窪島をして松尾山に向つて砲を打ち、其の出動を促させた。どつちにもつかぬなら、こつちからやつつけるぞといふしるしである。黒田長政も亦、人をやつて秀秋が詰責させた。そこで秀秋は態度を決して兵八千に鐵砲六百を以て松尾山を下り味方の吉隆を撃つた。

吉隆は怒つて、豎子——この小僧つ子、貴様は恩に背き、義を忘れた許し難い奴だ、容赦はしないと、六百人を以てその麾下を衝いた。戸田重政、手塚爲廣は吉隆を援けて大いに秀秋を破り、東軍からの督戰將校たる奥平貞治を斬つて棄てた。而も戦さがかうなつて來ると脇坂、朽木、小川、赤座等は皆秀秋に内應して、東軍の大將藤堂高虎、織田長孝等と三面から大谷吉隆の軍に迫つた。大谷を援けて居つた戸田重政、平塚爲廣は戦死した。

吉隆の部隊長、湯淺五介は退いてこれを吉隆に告げた。吉隆がいふに俺も此處で死なふ。敵に俺の首を渡して死恥を搔かして呉れるなど。遂に自殺をした。五介はその首を刎ねた。さうして、侍臣某をして、その首を泥中に埋めしめ二人で高虎の陣に突入して戦死した。

湯淺五介は藤堂治平といふ者と鬪つた。藤堂はその首を埋めた所を知つて居る。湯淺五介は戦ひながら藤堂にいふた。俺は此處で討たれるけれども、この首の在り

かだけは武士の情だ、どうか人に云つて呉れるなといひ、藤堂が之を諾すると安心してわざと討たれた。そこで藤堂は首實驗で大いに褒められたが、お前によくあれ程の武士に勝つたなと云はれた時に、藤堂治平は曰く、吉隆の首の在りかを云つて呉れるなといふので之を受諾すると彼は安心して、寧ろわざと討たれていつた、と有の儘に告白した。而して、吉隆の首は何處にあるかと訊かれても、その首のありかを白状する位なら私の首を刎ねてもらひたいと云ひ、首に掛けても彼の武士道を守つた。大谷は死んでもよき家來を有ち、又敵を有つたものである。

吉隆の二子吉胤、吉之、姪頼繼等は皆力戦し打敗れて引返して來たが吉隆が乗つて居た空轎を見て互ひに泣いて死なんとした。従者はこれを諫め歸つて敦賀の城を守らうとしたが誰も受容れる者が無い。遂に大坂に走つて秀頼の爲に大坂の陣で最後まで戦つた。頼繼は尋いで病死した。さすがに吉隆の一門である。何れも皆義に強かつた。

幸村、義に赴く

徳川公、兵を分ちて二となし、自ら一軍に將として海道由りし、其の嗣子秀忠をして一軍に將として山道由りせしめ、彈正少弼に命じて之を助けしむ。關西、風に従ひて靡き、先を争ひて款を送る。山道の軍、進みて小室に至り眞田昌幸を招く。初め昌幸、會津に赴き、犬伏に至りて、大坂の檄至る。長子信幸曰く、「吾、關東の殊遇を受く。請ふ東せん。西軍即し敗るれば、吾、父弟の爲めに命を乞はん」と。幸村曰く、「太閤の舊誼、背くべからざるなり。寧ろ西して死すとも、東して生きず」と。昌幸曰く、「東せんと欲する者は東せよ。西せんと欲するものは西せよ。而して吾は西に與する者なり」と。乃ち信幸を遣して江戸に之かきしめ、自ら幸村と兵三千を以て上田に歸る。東軍三萬、小室に陣す。信幸従ひて其の軍に在り。書を以て其の父弟を招く。肯んぜず。居ること四日、東軍來りて上田を攻む。城、川を帶らす。昌幸其の上流を塞ぎ、兵を險阻に伏せ、出で戦ひて伴り走る。東軍争ひ追ひ、伏に陥りて亂る。乃ち其の壑を

決す。水、大に至り、東軍繼ぐ能はず。幸村、突騎を以て之を燈め、遂に大に其の軍を敗りて進むを得ざらしむること三日。其の海道かいだうの軍、之を俟ちて、亦遲廻ちくわいすること數日。其の久しく至らざるを以て、乃ち獨り進みて赤坂に陣す。秀家、三成と計り、亦伏を設けて戰を挑み、其の前軍を敗りて退く。

徳川家康が、上杉征伐の途中で關西の變を聞き、小山から引返したことは曩に述べた通りである。そこで徳川公は兵を二つに分けて、自分は一軍を將ゐて海道を通つて来る、嗣子秀忠をして一軍を率ゐて中仙道から進ましめ、彈正少弼せうひつ(淺野長政)に命じて秀忠を助けしめた。關西、風に從へて靡く——この家康の威容を見て、關西は悉く之に靡き、先きを争つて款を家康に通じて來た。山道の軍——そこで秀忠の軍は進んで信州の小室まで進み、上田の城主、眞田昌幸を招いた。昌幸は初め家康の會津征伐の軍に投じ、上野の犬伏まで行つた時に大坂からの檄文を受取つた。

長子信幸が言ふに、自分は關東方の特別の待遇を受けて居るから、請ふ、東せん東の家康の味方をしよう。西軍が若し敗れたならば、私わたくしがその手柄を以て父兄の命乞こひをさせよう。

弟の幸村が言ふのに、太閤の舊恩を背く譯には行かない。寧ろ西軍の味方をして死んでも、東軍に投じて生を貪むさむることはしたくない。そこで兩人の父たる昌幸は曰く、東に行きたいものは東に行け、西に行きたいものは西に行くが宜い。併し俺は西の方に行くと。即ち信幸を江戸に行かせ、自分は幸村と兵三千を以て上田の城に歸つた。彼等は東軍の歸るものを此地に支へて牽制しようとするのである。

秀忠の率ゐる東軍三萬は小室に陣した。信幸は秀忠に従ひて陣中にあつたが、書を以てその父と弟とを招いた。併し昌幸父子は之を聽入れない。對陣すること四日、東軍はまづ上田を攻めた。上田は今日見ても分るが、其の前に川がある。昌幸はその上流を塞いで、川の水をせき止め、險阻な地帯に兵を伏せ、出て戰つて伴り走つ

た。東軍が争つて追ひ來り、伏兵に陥つて混亂した。その時、川の塞いだ所を切つて落したので、水が大いに流れて東軍は續き進むことが出来なかつた。そこで幸村は突撃兵を以てこれに迫り、大いにその軍を破り、さすが三萬の大軍をして三日間も進ませなかつた。

上田の小さい城であるから、其の籠つた兵も一、二千に過ぎないだらう。その寡兵を以て三萬の大軍を防ぎ止めること三日、誠に立派な防戦ぶりである。其の爲、秀忠の軍は牽制されて家康に合する能はず、友軍を待ち合する爲、遅回すること數日に及んだ。家康軍は待ち切れず、獨り進んで赤坂に陣した。宇喜多秀家、石田三成は伏兵を設けて戦ひを挑み、家康の先陣を破つて豫定の陣地に退却した。

前將軍、遂に令を天下に下して、共に大坂を攻む。秀頼、諸將を會して拒守を議す。是より先七隊長更と駿河に候す。治長等、之を疑ひ、頗る其の兵を收む。隊長皆怨望す。是に於て、出

でて其の議に參せず。速水守久、之を和解す。乃ち出づ。治長、建議して曰く、「宜しく急に事を擧ぐべし。天下、比年、土木に苦しみ、擧つて皆亂を思ふ。西諸侯に至りては概ね皆先君の恩澤に浴す。誰か來り援けざる者ぞ」と。遂に城下及び界浦の漕粟及び火薬を買ひ、檄を四方に移す。關原の敗後所在に潜匿する者、若しくは諸國の罪を獲て亡命せる者、先を争ひて來る聚る。眞田幸村は高野より、長曾我部盛親は京都より、後藤基次は南都より、森勝永は土佐より、其の餘内藤政勝・小倉行春・明石守重・御宿友政・塙直次・仙石宗也・岡部則綱・山川賢信・長岡興秋・北川宣勝等數百人なり。治長、竹範を以て金馬を鑄して、兵を募る。飢寒の士姓名を偽りて募に應じ、旬日に五萬を得たり。而して有土の將士は一人の應ずる者無し。秀頼、手書して諸國主を招く。前田氏以下、皆使者を縛し、其の書を以て徳川氏に献す。治長等、意大に沮む。

日本外史の本文は省略し、これは關ヶ原の戦後徳川の天下となつた後のことである。大坂は次々に家康に難題を吹きかけられ、遂に絶對絶命、兵を擧げざるを得ざ

るに至つた。そこで、前將軍徳川家康は命を天下に下して、共に大坂を攻むる事となつた。秀頼は諸將と會して、防禦作戰を評定した。然るにこれより先に、七隊長——秀吉の遺命によりて設けられた親衛隊の隊長のやうなもの——が大局を彌縫せんが爲、更る更る駿河に伺候し、前將軍を訪問したことがある。これで治長等はこれを疑つてゐる。

七隊長は他意なかつたであらうが、古狸の家康を訪問するなど、不覺を招く基である。智者なら之を避ける。ほんとの氣概があるなら行くを屑しとしない。之が爲に治長等に乘ぜられ、七隊長の兵隊は段々取上げられて少くなつて居る。治長の態度は敵に強く當るよりも味方を疑つて彈壓するに勇敢である。これ亦大坂の柱石たるべき器でない。七隊長は皆治長の處置を怨んで居るのでこの軍議に參列しない。速水守久がこれを和解してやつと出て來た。そこで治長が建議して曰く、宜しく急に事を擧ぐべしである。天下は毎年土木工事を賦課せられて之に苦しみ、天下擧つ

て皆亂を思つて居る。關西も諸侯に至つては概ね先君の恩澤に浴して居るので、誰が來つて援けない者があらうかと。

遂に大坂城下及び堺に回漕されて來る食糧及び火薬を買上げて、四方に檄文を發した。關ヶ原の戦に敗れて後、所在に潜伏する者若しくは諸國で罪を得て亡命して居る者、先を争つて來り集まつた。眞田幸村は高野山から、長曾我部盛親は京師から、後藤基次は南部から、森勝永は土佐から、その他内藤政勝、小倉行春、明石守重、御宿友政、塙直次、仙石宗也、岡部則綱、山川賢信、長岡興秋、北川宣勝等數百人等集つて來た。大野治長は竹の鑄型を以て金馬を鎔かして兵を幕つた。

この金馬は秀吉の遺策により、金を鑄つて數十個の馬を作り非常時に備へたものである——。是に於て天下飢寒の士（貧寒の士）姓名を偽つて應募する者があり、旬日にして五萬人を得た。併し此の時代には關ヶ原の時と異り、國持大名は一人も應ずる者がない。關ヶ原の戦は秀頼の意思に出づして、石田三成の野心に出づと宣

傳された。それでもまだ、故太閤の餘威が残つて居るので、天下の半を糾合するところが出来た。時勢は、日に豊臣氏に背いて去つたのである。今度は、秀頼が兵を擧げて、大名は一人も應ずる者が無い。秀頼は自分で手紙を書いて諸國主を招いたが、前田氏以下皆その使者を捕へ、その手紙を徳川氏に獻じて身のあかしを立てた。それで治長等は意氣大いに沮喪した。

眞田幸村、人の約束を受くるを喜ばず。乃ち別に偃月城を玉造の阜に築き、東西二門を開き、信濃の遺民を募りて百五十人を得たり。秀頼、又附するに伊木遠雄・山川賢信・北川宣勝等五千人を以て之を守らしむ。幸村、因りて策を獻じて曰く、「臣聞く、徳川氏、天下の兵に檄して來りて我を攻む。我坐ながら之を俟つ。他の奇道無し。度るに關東・北國の兵、強半未だ至らず。宜しく此の時を以て、大旗を天王寺に出し、勝永と臣とを以て先鋒と爲して、山崎に赴き盛親・基次をして大和路に出で、宇治橋を扼し、攻めて伏見を抜き、火を京師に縱ちて、大に天下の衢路を關さしめば、則ち兩國の諸侯、必ず來り屬する者有らん。是れ一奇なり」と。基

次曰く、「計善しと雖も、萬全の者に非ず。本城は壯固匹無し。天下の兵を受くと雖も、三五年を支ふべし。此の如くば則ち敵必ず内變有らん。諸侯、先世の恩を被る者、必ず款を我に歸せん。何ぞ必ずしも遠く出でん」と。衆之を然りとす。

眞田幸村の約束——約の字は制約の約、東は束縛の束で、制約されたり、束縛されたりすることで、それを喜ばない。眞田幸村、人の約束喜ばずと言へば、夫れだけ、後の不羈獨立の性格を躍如せしむるものがある。

ヒットラーはナチの前身たる獨逸労働黨に入黨した時、矢張り眞田幸村と同じく人の約束を受くるは喜ばなかつた。彼は一小部分の仕事でも、自分の思ふ存分にやりたかつた。彼は宣傳部を引受けた。さうして渾身の智能を之が爲に傾けた。彼は曰く、自分達の政治運動はブルジョアのそれとは違ふ、ヒラ一枚貼るのにも金が掛るが、それは皆同志の汗の結晶である。一枚のヒラも無駄に使つてはならないと。

彼は自分で圖案を練り、自分で標語を考へ、自分で之を貼りに行く。同じビラ一枚でも貼る所に依つてその効果が違ふ。良い場所であれば、その主人公と話をして、忽ち主人公を同志にしてしまふ。その次からは主人の方から、どうか其のビラを私の家に貼らして下さいと云ふ。大きなビラも使へば、費用を考へて極々小さなビラも用ふる。併し意匠が奇抜であり、標語が印象的であるから、人々は遂終りまで讀んでしまふ。これは熱心の賜である。

ムツソリーニも機關紙ポポロ・デ・イタリヤを發刊して居た時、資金が不如意で大いに紙代や印刷費の制約を受けた。彼は曰く、我等が新聞は量で讀ませるのでなす。一小紙片でも、内容で天下の注意を引く、發行部数は少くとも、伊太利中の時代に志ある者が、取りあひして廻讀するやうな新聞を書かねばならぬと云ふた。彼の文章に力を注ぐことは素ばらしいものである。特異な人間は特異なる力で世に訴へねばならぬ。

眞田幸村は獨立行動を取り、別に玉造阜に出城を築き、東西二門を開いて信濃の遺民百五十人を收容した。彼は信州上田の城主であつた。それで信濃の遺民を集めたのだ。眞田幸村が大坂に入城する時も、彼が高野山から乗込んで來るといふので、大野治長は悦んで出迎へに行つた。眞田幸村は長の浪人で定めし尾羽打枯らして居るだらうと思つて居たが、六連錢の旗を立て、堂々と騎馬隊で乗込んで來た。偉いものだと思つて出迎への挨拶をすると、馬上から名乗を上げて、某は眞田幸村先手の大將何某と稱し、颯爽として乗り抜ける。暫くすると第二陣の大將何の某、第三陣、何の某と盡くる所がない。それから意外にも大砲までうんと持込んで來た。これは人目を驚かしたが幸村新案の張りぬき筒である。併しそれは射てない代物でない。一發だけは射てるさうである。竹筒でも木筒でも一發は射てる。さういふものを持つて來た。斯くて遂に騎馬武者多數を引連れて、堂々と入城した。彼は尾羽打枯しても天下の大軍師たる格式は下げないのだ。

眞田紐といふのは幸村が浪人して居る時に高野山で生活の資を得る爲に、工夫したのだといふ説もある。此の眞田幸村は人の約束を受けることは喜ばない。腕に覚えがある。信濃の士を集めて偃月城を固めた。秀頼も亦伊木遠雄、山川賢信、北川宣勝等の五千人を附して出丸を守らせた。

幸村はそこで策を獻じていふに、臣聞く、徳川は天下の兵に檄して攻めて来るさうである。これを坐しながら待つても一向面白味はない。度るに——關東や東北の兵の大半はまだ來て居ない。だからこの機を逸せず大旆——大きな旗、即ち豊臣の旗印を天王寺に押し出し、森勝永と私とは先鋒となつて山崎に出掛けて行く。長曾我部盛親、後藤基次は大和路に出で、宇治橋を扼し、伏見を攻め落す、さうして火を京都に放つて、天下の要衝を閉ざしてしまふ。さうすれば彼は攻め來ることは出來ぬ。西國の諸侯も風を望んで來り合する者があらう。これが一つの面白いやり方である。

昔から京都を守つた大將で最後の勝利を占めた例がない。木曾義仲が京都に攻込んだ。これは俱利伽羅峠からやつて來た。平家は之を支へ得なかつた。此の義仲を義經が攻めて京都を陥れた。平維盛は源氏邀撃の爲に出動し、富士川で水禽の羽音に驚いて敗走し、平家は一應京都に立て籠つたが、遂に支ふことが出來なかつた。若し眞に京都を守らうとするなら、大坂と連絡を保ち、堺を抑へて居らねばならぬ。京都は、山河襟帯して自然の城をなして居るが、背後の糧道を大阪と堺とに開いて居ないと守りきれない。今、大坂に籠城して東から攻めて寄する敵に對しながら、關西がどつちにつくか分らないといふ情勢であるから、京都に打つて出るのは名案である。京都に籠つて山岳戦で戦へば東軍を惱ますことは容易である。その上、糧道を大坂と堺とに開いて置けば萬全である。

緒戦一撃、機先を制すれば、關西は風を望んで來り投ずるかも知れぬ。其の昔足利尊氏が九州から攻め上つた時、楠正成は叡山に鸞輿(御車)を奉じながら敵を京都

に入れ、自分は河内に據つて大阪と堺とを牽制しようとしたのである。河内から大坂に打つて出れば關西を従へることが出来る。真田の獻策は智謀あり、勇氣ある者のやり口である。

併しさういふ大膽な戦さをするやうな意氣込みは、大坂には乏しかった。其の上後藤基次——これも相當な人物だが、考へが違つてゐたらしい——之に反對した。彼は曰く、其の計略は善いが萬全の策ではない。此の城は豪壯にして堅固なること天下無比である。天下の兵を引き受けても、三、五年は支へるだらう。其の内に敵には屹度内亂が起る。諸侯にして故太閤の恩を被る者は、必ず我に款を通じて來るだらうと。衆議を之を然りとした。

併しあの場合萬全の策などある筈はない。あの時は最早仕様がなかつたのだ。あの場合敵に内變起るを期待するなど、思はざるの甚だしきものである。敵は三河武士の全體主義で、がっちり固まつて居る。人心は衰へ行く豊臣氏を去る一方である。

大坂城内は瘦浪人のかり集めである。味方こそ動搖する虞れありでないか。

大東亞戰以前の日本の情勢も之に酷似して居つた。ロシアがドイツの敵になつたことは、英米の陣營に投じたのである。アメリカは浦鹽に連絡すると騒いで居る。そのアメリカはハワイ、ミッドウエイ、ウエーキ、ヒリツピンを取り、南太平洋を抑へて日本の資源を斷つてゐる。イギリスはシンガポールに構へ、英米相携へて益々對日包圍の鐵環をしめつけて居た。あゝいふ場合に、真田幸村と同じやうな主張が正しかった。

日本とても總て世界の兵を引受けては敵はない。日本が坐視して居れば、英米は獨逸を窘迫し遂に日本に迫るであらう。日本の南方資源を絶ちながら、英米が南洋に割據して日本を脅かせば、日本はどうすることも出来なくなる。十二月八日は絶對絶命、捨身の一撃であつた。あの場合、對米外交にまだ盡す手があつたなど云ふは、未練を超えて非常識である。今斯くの如き言を爲す者ありとせば國民の自信を

動搖させる怪しからぬ言動である。

大野治長のやうなのが日本を支配すれば、日本の運命は大坂城のやうになつたかも知れぬ。外壕を埋めてアメリカと媾和しようなど云ふことは、過去も將來も一切之を戒めねばならぬ。現代日本をして大野治長時代たらしめてはならぬ。

後藤には眞田程の對策がなかつたのである。戦場の一騎討では強い。筑前の後藤又兵衛、槍を取つては天下無双、併し彼の主張する所は師團長格の議論である。眞田の議論は政治を合せて天下の經綸である。成るほど後藤のやうな豪傑が揃つて大坂の城に籠れば三、五年は支へるであらう。然るにその大坂に籠る者は淀君を中心とした豊臣家の重臣達である。優柔不斷と奢侈怠慢では秀吉が築いた大坂の名城も守りされたものでない。幸村の獻策が用ひられなかつたことは今の歴史に引合せても洵に残念だつたと思ふ。

天王寺に大旗を押立て、敵を山崎に邀撃する、伏見を抜いて京師に火を放ち、天

下の要衝を抑へて、關西の諸侯を大坂に迎へ入れる。それなら頽勢を盛り返すこともあらう。旨く行けば天下分け目の戦さになつたであらう。併し庸人は上策を用ふることは出来ぬ。古今の痛嘆事である。

前將軍、書を城内に遣り、和を請はしむ。肯んぜず。幸村の叔父信尹、從ひて東軍に在り。前將軍、之をして入りて幸村を諭して之を降さしむ。幸村答へて曰く、「關原の役、臣が父子西軍に屬し、寡兵を以て大師に抗し、敗るゝに及びて遁逃し、山野に伏匿す。右府、臣の陋劣を以てせず、臣に授くるに數千の兵を以てし、一面に將たらしむ。是れ臣を知るなり。士は己を知る者の爲に死す。臣死するとも負く能はず」と。信尹、復命す。再び遣して之に説かしめて曰く、「苟も降らば、則ち封するに信濃の地を以てし、世々絶つ母らん」と。幸村曰く、「我が爲めに前將軍に謝せよ。臣、一死もて右府に報ぜん。其の他を知らず。東西、兵を弭むるが如きこと有らば、臣當に叔父に寄食すべきのみ。然らずば則ち日本の半を受くと雖も、而も命を奉ずる能はず。願くは叔父、復來る勿れ」と。

前將軍——家康は將軍の位を秀忠に譲り、大御所として存在して居る。故にこれを前將軍と云ふ——此の徳川家康が書を大坂城内に送つて和を請はしめた。城内は之を聞き入れなかつた。元來、徳川家康は媾和する氣なんかありはしない。しかし意氣込んで居る對手に、媾和を申込むと、其の氣が弛む。さうすると其の中に媾和派といふものが出来て来る。さうして主戦論と和平論との内輪争ひが起る。相手の陣營を攪亂して、其の銳氣を挫く爲に、和を申込むことは、屢々用ひられる手である。

日本が勝ち、獨伊が勝ち、樞軸が固く結んで居ると、今度は之を離間せんが爲、英米の和平謀略が始まるかも知れぬ。其の時、持つて生れた病の親米英思想が擡頭すると、うつかり彼等の手練手管にのせられて、國內の議論が分裂する虞れがある。其の結果樞軸の結束にヒビでも入れば、米英は必ず得意の各個撃破に出て来るであらう。日本は同盟の大義に則り、何處までも共同の目的を達成する爲に忠實眞剣で

なければならぬ。眼前の利己的小利害に迷ひ、打算に没頭して大局の順逆を誤るものは奈落の底に陥るであらう。日本は大東亞に立脚して、世界に奉仕するの大信念がなければならぬ。自ら小策を弄する者は他の術策に引つかゝるものである。

大坂籠城の豪傑等は始終善く戦つた。併しながら其の戦果を確立する能はず、内輪の士氣を頽廢せしめたものは、敵の和平謀略であり、味方の關東依存心理であつた。さうして太閤が天下を風靡した千成瓢箪の旗印は、一度も戦場に出動することなくして、大坂の城は遂に陥つたのである。

今日の日本は世界に對する自己の信念に徹底せねばならぬ。今更親米外交の未練を並べる如きにあつては、味方の士氣を崩壊させる所以である。

徳川家康の和平運動には、さすがに大坂方も同意しなかつた。併し人心の動搖を誘發する爲には確かに力があつた。眞田幸村の叔父、眞田信尹は家康に從つて東軍にある。前將軍がそれを使ひにやり、幸村を諭して降参させやうとした。

幸村は之に答へて曰く、關ヶ原の役には、私共親子は西軍に屬し、寡兵を以て大軍に抗し、敗るゝに及び遁走して高野山に匿れて居つたのだ。然るに秀頼公は臣等の陋劣を責めないで、今は私に數千の兵を授け、以て一方の大將としてくれた。これは私を知つてくれたのだ。士は己れを知る者の爲に死すと謂ふが、私は死んでも秀頼に背くことは出来ない。そこで信尹は此の旨を家康に復命した。ところが家康は、もう一遍信尹を遣はし説かして言ふた。若しお前が降参するならば、小さな舊領地上田ではなく、信濃全體をお前にやる。さうして世々お前の世嗣を絶やすことはしないと。

幸村答へて言ふのに、私の爲に前將軍にお断りを云つてくれ、私は一死以て秀頼に報ゆるのだ。其の他のことは一切知らない。若し關東と關西が戦をやめるやうなことがあつたならば、私は叔父さんの家に居候になりませう。若しさうでなければ、信濃はおるか、日本國の半分を頂いても、御命令に従ふことは出来ませぬ。叔父上、

もう再びこんな使に御出で下さるなど。かういつて叔父さんを歸した。

實に幸村の態度は毅然たるものである。こゝに男子の面目があるのである。大阪城は落ちたけれども、大坂の陣を云へば眞田幸村を思ひ出す。利害によりて進退せず、大義によりて去就を決する者、一人も居なかつたら、豊臣氏の衰亡史は寂しかつたであらう。眞田幸村は大義に赴き、大義に殉じたのである。

純 孤 寄 命

八年三月、徳川公、大將軍と爲る。四月、秀頼、内大臣に墜り、從一位に敘せらる。七月、將軍、其の孫女を以て秀頼に妻はす。且元に命じて之を迎へしめ、大坂をして、且元に封萬石を加へしむ。且元、嗣君幼きを以て、辭して受けず。尋ぎて江戸に如く。將軍、封を辭する勿れ面諭す。

十年四月、秀頼、右大臣に遷さる。將軍、職を其の嗣子秀忠に譲る。五月、前將軍、京師に在り。北廳に諷して、秀頼をして來見せしむ。淀君、母子相依り、分離を欲せず。又其の變有らんを恐れ、固辭して遣らず。

十三年二月、秀頼、痘を患ふ。福島正則、安藝より馳せ至り日夜看護す。是より先、正則、結城秀康に謂ひて曰く、「公は太閤の養子、大坂の郎君に於て兄弟たり。將軍百歳の後、公善く郎君を遇せよ。老奴も亦、當に力を竭して周旋すべし」と。秀康、其の異志あるを疑ひて之と絶つ。

初め秀吉、金馬數十を造る。一馬は銀金千枚に當る。之を大坂の城中に藏して、軍須に備ふ。十五年、秀頼、東旨を以て再び方廣寺を興し、以て先志を繼ぐ。且元を以て役を監せしむ。費す所鉅萬、多く金馬を鎔して費に充つ。

論語の中に「可^三以^三託^三六尺之孤^三。可^三以^三寄^三百里之命^三。君子人與。君子人也」といふ文句がある。六尺之孤といふが、支那の寸法は短かいから、三尺の童兒といふや

うな意味である。六尺の孤を託せらるれば、必ずそれを育て上げて負託に背かない。同時に百里の外に使用して行つても君命を辱かしめないで重任を果す。この二つが出来るやうであれば、それは君子人である。百里の命を寄するといふことは、外交談判に特派さるゝやうなことである。強さも、見透しも、才能も、度胸も要るが、併しそれだけでなく、その半面には六尺の孤を託されると立派にその小さい子供を育て上げるだけのやさしさがある。此の兩面の徳を備ふるものこそ、君子人だと云ふのである。

考へて見ると、人の子一人育てるといふことは並大抵のことでない。女なんか糺子を虐めたりする。眞に六尺の孤を託することが出来るやうな人、それで又、百里の外に使用して君命を辱かしめない。こんな人こそ眞の君子人だ。さういふ一章が論語の中にある。それに關聯して加藤清正のことを、本文から遡つて抄録する。

慶長八年三月徳川公が征夷大將軍となつた。四月、秀頼は内大臣に陞され従一位

に殺せられた。七月、將軍はその孫女秀忠の娘を秀頼に妻はせ、片桐且元に命じてこれを迎へさせ、大坂に沙汰して、且元に一萬石の知行を増させた。且元にお姫様を受取りに來させた。さうして江戸の意向で且元に一萬石を加増させる。かう云ふことは大坂の人心を分裂させる一つの謀略である。家康の孫娘を迎へに行つた男が、主君秀頼の意思によらず、家康の意向で知行を加増されると云ふことは、豊臣の諸將をして且元を遠ざける原因を作るやうなものである。そこが家康の狙ひ所であらう。しかし且元は嗣君はまだ若いからといつて受けなかつた。次いで江戸に行くと、將軍は目のあたり且元を諭して、加増を辭しないやうにさせた。

十年四月、秀頼は右大臣に貶された。將軍は職をその嗣子秀忠に譲つた。五月、前將軍は京都に在り、北政所を諷して、秀頼が京都に來て家康に面會をするやうに求めた。

然るに淀君母子は本當の親子だから、二人とも頼り合つて離れることを欲しない。

婦人の情としてさもあるべきである。最愛の秀頼を家康の所へやればどうするか分らない。又如何なる變事が出来るかも知れぬと恐れて固辭して秀頼をやらない。

しかし十三年二月、かう云ふ際に泣き面に蜂で、秀頼が抱瘡に罹つた。福島正則が安藝から馳せつけて日夜看護した。これより先、正則は結城秀康に言ふには、貴殿は太閤の養子であり、大坂の若君とは兄弟に當られる。將軍が亡くなられた百歳の後には、どうか貴殿がよく秀頼公を待遇して頂きたい。老奴（拙者）も亦力を盡してあなたと秀頼との間を周旋しませうと。秀康は家康の妾腹の子である。秀吉は家康を懐柔する爲に、秀康を養子にしたのだ、正則が斯く言ふたのは、聞きやうによつては變に取れぬでもない。秀康がこれを聞いて、何か家康に對し異心を抱くものと考へ絶交した。初め秀吉の世に在る時、金の馬を數十ほど造つた。それは一馬が大判金千枚に相當する。秀吉はこれを城中にしまつて置いて、一朝有事の際の軍資金に備へた。

十五年、秀頼は關東の旨を受けて方廣寺を再興し、秀吉の志を繼いだ。且元が監督に任せられた。それが爲に巨萬の金を費したので、折角軍備金にしまつて置いた金馬を鎔かしてその費用に充てた。

方廣寺は前述の如く秀吉が建立しかゝつて居たのであるが、慶長元年の大地震に其の大佛までも毀れた。衆生を濟度する爲の大佛が、自身がころがるなど附甲斐ない奴だと云ひ、秀吉は通りかゝりに弓を射がけさせて過ぎたものである。關東では秀頼に之を再興させて、父の志を繼がせると云ふが、それはエライ皮肉である。折角の金馬を鎔かすに至つては秀吉の志を破らしむるものでないか。

是の時、關東の工役數と起る。福島・加藤・淺野・池田の諸家、毎に其の役を助く。清正、江戸に赴くに、多く士卒を率ゐ、又必ず過りて秀頼を省す。因りて邸を大坂に置くこと故の如し。凡そ邦俗、男子は必ず其の鬚髯を剃る。而して清正は長髯自ら喜ぶ。前將軍、一親將をして、

其の私を以て之に謂はしめて曰く、「予を以て公を觀るに、去るべき者三有り。長髯は一なり。大坂の邸は二なり。東行に兵を従ふるは三なり」と。清正曰く、「吾戎服して銅面を著く。髯有りて之が藉と爲せば、則ち肅然として搖憾の患有無し。大坂の邸を撤するは、是れ太閤の舊誼を棄つるなり。兵を以て自ら従へざれば、緩急事に及ばず。皆去る可からざるなり」と。十六年三月、前將軍京師に在り。織田長益をして來諭して秀頼を召見せしむ。淀君肯んせず。北廳、清正及び淺野左京大夫をして之を促さしむ。二將、因りて啓して曰く、「臣が輩、死を以て郎君を守らん。必ず慮無けん」と。且元も亦、京師より馳せ還り、之を苦諫す。淀君乃ち秀頼を遣す。

此の時、關東方では數々工役を起したが、福島、加藤、淺野、池田等の諸家は皆その工事を負擔した。これは秀頼の舊臣であるから、自分等が斯くすることが家康の氣に入ること、引いて秀頼の爲に悪くなからうといふ老臣達の心盡しである。清正の江戸參觀には必ず多くの士卒を率ゐて來る。その歸りには必ず大坂に立ち

寄つて秀頼の御機嫌を伺ふ。因つて世は徳川の時代と變つても、昔のまゝに屋敷を大坂に置いた。これは故太閤の恩誼を忘れざる老臣の心ゆきである。抑々、日本の風俗は、平和の際には男子は必ず頬髯を剃り落すのが普通である。然るに清正は、長い髯を生やして自ら得意になつて居る。

前將軍家康が、近親の大將をして内々に清正に云はしめて言ふに、家康の目から足下の態度を見るに、やめて貰ひたいものが三つある。第一はその長髯だ。世は既に平らかなるに、頬髯なんか生やして居るは、物騒らしく殺伐である。それから第二に取拂つて貰ひたいのは、大坂の邸宅である。少しは江戸に氣兼ねしたら好からうじやないか。第三にやめて貰ひ度いのは、江戸參觀に率ゐて来る、その兵隊である。この三つは目障りであると云ふ。

清正曰く、自分が鎧姿で銅の面當を着ける時に、頬髯があればそれが下敷となり、きりつと締つてぐらつかない。拙者はどうでもよいが、髯を落すことは、鎧兜がウ

ント承知しないだらう。此の意味は關東では平和と云ふが、當になつたものでない。何時、戎服銅面して、戰場に立たねばならぬか解らないと嘯いたのである。次に、大坂の邸を撤しろなんとケチなことを云ひなさるな、老臣がせめて幼君に對する心盡し、その邸宅を除くことは、故太閤の舊誼を棄てることだ。それは御免蒙らねばならぬ。それから、江戸行きに兵隊を率ゐないと、いざといふ時に間に合はない。憚りながら清正は江戸界限でむざと討たる者ではムらぬ。右三箇條は遺憾ながら御希望に副ふことは出来かねますと。誠に清正らしい應對である。

十六年三月、前將軍家康は京都にあり、織田長益を使に出し、大坂に行きて秀頼を諭して召寄せやうとした。秀頼の生母淀君が之を承諾しない。そこで京都にゐる北の政所が加藤清正、淺野幸長をして、家康の意向に應ずるやう促させた。そこで二將が申して言ふに、臣等死を以て若君を守ります。屹度間違ひは起させませぬと。片桐且元も亦心配して、京都から馳せ還り、苦衷を訴へて諫言した。淀君の心もや

つと釋け、秀頼を遣すことになつた。

測り知る可らざる家康の難題に對し、婦人が猜疑し、老臣が憂慮する有様、誠に氣の毒なものがある。淀君が母としての心配も亦同情すべきものがある、彼を妖婦の如く悪しざまに罵るのは、徳川がたの宣傳に誤られたるものである。

二十八日、淀を溯りて京師に入る。二將、弓銃を以て岸を夾みて北す。福島正則、疾と稱して大坂を守る。前將軍、其の二子義直・頼宣をして之を東寺に迎へしむ。二將以下二十一人、徒歩して輿を護し、二條城に入る。前將軍、出でて之を門に迎へ、正殿に相見る。前將軍、南郷して坐し、關東の將士及び諸侯伯、左右を擁衛す。秀頼、北郷して坐し、二將、其の後に在り。秀頼、前將軍に贈るに、名刀二口、駿馬一匹、黄金三百枚及び錦緞若干を以てす。其の公族・將領に皆遺る所有り。前將軍、答ふるに二刀、三鷹、十馬を以てす。饗畢る。清正曰く、「淀君歸を遅つ。請ふ、辭せん」と。前將軍、其の女婿池田輝政をして、酒を二將に賜らしむ。既にして罷む。秀頼を扶けて出で、北廳に謁し、豐國廟を拜し、方廣寺の役を視、伏見よ

り舟に上る。清正、酒を献じて賀す。其の邸に歸り、短刀を懷より出し、泣きて曰く、「吾今日、聊か太閤の恩に報す」と。

四月、義直・頼宣大坂に来る。秀頼の北上に報ゆるなり。秀頼、迎へて之を饗す。

六月、清正病みて卒す。清正、嘗て人に謂ひて曰く、「前田利家、晩く儒學に志し、吾及び浮田秀家・淺野幸長を招く。語次、論語の託孤寄命の章を擧ぐ。吾爾時、其の何の謂なるを知らず。乃者讀みて之を思ひ、略々曉る所有り。今の世に當り、此の語を念はざる者は、恐らく不義に陥らん」と。

二十八日、淀川を溯つて京都に行くのである。加藤、淺野の二將が弓と鐵砲とを携へ、岸を夾み、舟に伴つて北上して行つた。此の二將は朝鮮征伐では蔚山の籠城を共にした戦友である。それが幼主秀頼の身の上を氣遣ひ、舟に隨ひて川の兩岸を徒歩で警護して行くのは、實に涙ぐましき光景である。福島正則は、秀頼の病氣介抱の爲め大坂に来て居たが、病氣と稱して秀頼の爲に大坂城を守つた。家康は其の

二子義直と頼宣をして之を東寺に出迎へしめ、清正、幸長以下二十一人の者が、徒歩で秀頼の乗輿を警固して二條城に乗り込んだ。二十一人は實に幼兒を抱きて虎狼の窟に入るの感があつたであらう。名に負ふ清正と幸長等が、前後左右に氣を配りながら、肅々として歩を進むる所は、實に悲痛なる壯觀ではなからうか。

前將軍家康は門まで立ち出でて之を迎へ入れ、表座敷で會見した。家康は南向きに坐り、關東の將士及び諸侯が其の左右を擁護する。秀頼は北向きに坐り、清正、幸長の二將が後に控へた。南面して君と稱すと言ふから、家康の方が上坐で、北面した秀頼が下坐である。秀頼は秀忠の女を娶つて居るから、家康の爲には義理の孫にもあたるのである。かう云ふ點から下坐に附いたやうなもの、既に豊臣、徳川が主客其の位置を顛倒して居るのは争ひ難き光景である。

秀頼は家康に、名刀一振、駿馬一匹、黄金三百枚及び錦綉緞子若干を贈物として差上げた。其の他一門及び武將等に夫々土産物があつた。家康からは之に答へる爲

に、刀二本、鷹三羽、馬十匹を贈つた。饗宴が終ると清正が言ふには、淀君が歸りを遅しと待つて居らるゝ、御いとまを願つて歸らうと。家康は其の女婿の池田輝政に命じて酒を二將に與へさせた。それも暫らくにして濟んだ。そこで清正等は秀頼を扶けて立ち出で、北の政所の御機嫌を伺ひ、太閤を祀る豊國廟に參拜し、建築中の方廣寺の工事を視察し、伏見から舟に乗つた。

關東の將帥綺羅星の如く居並ぶ伏見城の中で、徳川家康と豊臣秀頼の對面。清正幸長等の苦心は並大抵でない。疎忽があつてはならぬ。不覺を取つてはならぬ。いざ間違へば何時でも飛びかゝるぞ、と云ふ清正の面相、眼に見ゆるやうである、其の昔、項門の會に於て、楯を擁して、高祖を睨みつけた樊噲の姿を想ひ起させるのである。

伏見城の會見を終へ、歸りを急いで淀川の舟に乗つた時に、氣も張りつめて居た清正が、始めて安心したのであらう。舟中酒を秀頼に獻じて無事を祝した。其の邸

に歸ると、忍ばせて居た短刀を懐から取り出し、泣いて言ふた。我れ、今日聊か太閤の恩に報ずることが出来たと。

四月、家康の二子、義直、頼宣が大阪に来て、秀頼が京都に来たのに答禮をした。秀頼は此の二人を迎へて饗應した。

六月、清正は病んで亡くなつた。慶長十六年三月二十八日に秀頼を奉じて伏見城を訪ふた清正が、同年六月二十四日に五十三歳で亡くなつて居る。俗に伏見城内で家康に毒饅頭を食はされたのだと傳へられて居る。清正が嘗て人に言ふた。前田利家が晩年儒學に志し、自分及び浮田秀家、淺野幸長を招いて話して居る際、論語の「託孤寄命」の一章を示したことがある。自分は其の時、何の意味だか解らなかつたが、此の項を讀んで之を思ひ、略ぼ理解し得る節がある。今日の世に當り、此の一章の語を念としない者は、恐らく不義に陥るだらうと。

論語は文字で讀むのでなく、講釋で教へらるゝのでなく、全く體驗で理解出来る

ものである。無限の艱難を嘗め、人生の憂樂を味ふにつれ、論語を讀んでも段々眞意が解るのである。「以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべし。」清正は實に主家の六尺の孤を託せられ、これを奉じて百里の命を全ふせねばならなかつた。

彼が此の論語の一章を讀み、身慄ひして感激したと云ふのは尤もな話である。蔚山の籠城、京畿の大地震、骨を刻み、血を絞るが如き體驗が、清正をして論語の眞意義を味覺せしめたのである。乃木將軍が中朝事實を讀んで山鹿素行の國體論に徹底し、二人の愛兒を旅順の攻撃戦に失ひて、始めて「山川草木轉荒涼」の實感を懐くに至り、更に「凱旋今日幾人還」を吟じて、戦死者遺家族の心中を察するに至つたのである。

机の上で讀み、紙の上に書く哲學は役に立たぬ。體驗で讀み、大地に刻みつける行動の文字こそ、眞の人生哲學である。清正と論語、其の心事を偲び、其の眞意を味はふべきである。

關ヶ原の役後、豊臣氏を滅ぼすのは徳川家康の動かすべからざる既定方針である。彼は愚直なる故太閤の老臣等を丸め込み、利害に迷ふ諸侯を巧みに籠絡し、太閤の遺孤秀頼を全く大坂城に孤立せしめてしまつたのである。彼は理由あるも、理由なきも遮二無二、豊臣氏を滅ぼさんとするのである。ライオンが小羊を食はんと欲し、云ひかゝりをつけて、詰責して見たが、小羊が次々に理路整然と、陳辯してしまふと、ライオンは威丈高になり、その陳辯をも合せて小羊を食つてしまつたとは有名なインツブ物語の一章であるが、徳川家康の大坂城に對する態度は、正にこれに似たるものがある。

彼は秀頼をして故太閤時代に、その建立を中止せし方廣寺を再建せしめ、それで

折角秀吉が残した金馬の數々を鎔して大坂方の軍事費を消耗させたのみか、その寺の鐘の銘に事よせて、難題をもちかけ、遂に大坂の小羊を徳川の虎顎の間に投ぜしむるに至つたのである。

古今ともに謀略は戦争につきものである。其の謀略を一般的形勢の上に施すのは寧ろ兵家の常とも云ふべきであるが、それを人情の上に施し、婦人を欺き、小人を惑はし、忠臣を傷け、幼主を陥るゝに至つて、餘りにも手口が穢ないと云はねばならぬ。事ここに至れば、寧ろ徳川家康の器局の小なるを示すものである。楠正成も諸葛孔明も謀略は行つた。併し其の謀略は人倫に悖り、人情を傷くるものではない。西郷南洲は我れ策略を用ひたることなし、故に我が跡清しと云つて居るが、南洲翁の明治維新より戌辰の役に至る大活動は、天下の大勢を達觀し、謀を進むるに人情の眞善美を窺めしの觀を呈して居る。

徳川家康は「鐘銘」によりて豊臣氏を滅ぼすの口實を設け、大坂方の大忠臣片桐

且元を淀君周邊の政治上層から離間し、大坂をして天下に聞ゆる大忠臣片桐且元を放逐することによりて、天下の同情を失墜せしめ、これによりて大坂城中の忠臣義士をして失望落膽せしめ、巧みに寡婦孤兒を欺くことによりて、熟柿の落つるが如く、故太閤の遺業を凋落せしめたのは、巧妙とも老獺とも批評に苦しまざるを得ざる次第である。併も此の謀略に練られて、見す見す滅亡の淵に顛落し行きし大坂方の爲體は、百歳、千歳の下、亡國の士大夫を戒むるに足るものがある。

四月、方廣寺成る。乃ち洪鐘を鑄る。東福寺の僧清韓に命じて之に銘せしむ。五月、片桐且元を遣して駿河に赴き、成を告げて慶を請はしむ。前將軍曰く、「右府、願主たり。宜しく親ら往きて之を慶すべし」と。因りて其の親臣本多正純に命じ、女を以て且元の婦と爲し、慰勞して遣歸す。且元、大に喜びて復命す。八月三日を卜して、公卿以下皆會す。四方の民を縦して儀を觀しむ。將に行を發せんとす。會と前將軍、鐘銘の稿を覽て大に怒る。曰く、「銘に國家安康の句有り。是れ我が名を載るなり。序に、大小の釋迦、迭に主伴となるの語有り。是れ我に代

らんと欲するなり。秀頼、何の意ぞ。乃ち敢て我を誣ふ」と。徳川氏の京尹板倉勝重、使を馳せて之を且元に告げ、其の慶會を停む。且元、大に驚きて曰く「是れ右府の知る所に非ざるなり。之を清韓に託し、偶然此に及ぶのみ。臣不學、成りて即ち工に附す。罪逃るゝ所無し。今大儀成るに垂んとし、萬衆已に聚る。而して遽かに之を停めば、恐らくは民の耳目を驚かさん。伏して願はくは、且く禮を畢へ、尋ぎて銘文を毀滅し、然る後、臣、甘心して誅に伏するも、悔母きなり」と。勝重肯んぜずして曰く、「是れ誣を成すなり」と。遂に儀を停む。物情騒然たり。

慶長十九年四月、方廣寺の建築が落成した。そこで大吊鐘を鑄ることになり、東福寺の僧清韓に命じて、之が銘文を作らせた。五月、大坂方では駿府に隠居して居た前將軍徳川家康の許に、片桐且元を遣はし、寺の落成を報告し、家康に之が供養をせられんことを乞ふた。前將軍が云ふには、右大臣秀頼公が願主である。御自分で出かけて供養されるが宜しいと。そこで、自分の親しい家來の本多正純に命じ、

その娘を片桐且元の息子に嫁がせることとし、且元を慰勞して送り歸した。こゝら
 が家康の謀略がそろそろ動き出したところである。大坂の宿將片桐且元の息子に、
 家康方宿將の娘を娶合はすといふことは、且元をして、大坂方の疑ひを招かしむる
 所以ではないか。

片桐且元も賤ヶ岳の七本槍で、天下に武邊の名を謳はれた人物であるが、思慮が
 深いやうであつて、至らざるところがあり、こんな謀略にひつかつたのである。
 非常時の政治家は一通りの濃厚篤實なる分別者では駄目である。義氣天地を貫き、
 聰明、鬼神に通ずるやうな人物でなければ運命を決定する一番大切な一瞬間に不覺
 をとるやうな結果を招來するものである。且元の晩節は甚だ憐むべくして、しかも
 些か世の疑ひを容るゝ點あるは、遺憾千萬である。

且元の駿府訪問は、まづこんな上首尾であつたので、非常に喜び、大坂に歸つて
 前將軍の言葉を報告した。八月三日を選んで供養の式を擧げ、公卿以下皆集まり、

また四方遠近の民に自由に儀式を拜觀してもよいことにした。然るに秀頼の行列が、
 正に大坂を出發して京都の方廣寺に向はんとするに及び、偶々前將軍は、吊鐘の銘
 文の草稿を見て大に怒つた。さうして、因縁をつけて云ふには、銘の中に國家安康
 といふ文句がある。これは自分の名を截ち切つたのである。また銘の序文に大小の
 釋迦互に主伴となるといふ語句がある。これは秀頼が、自分に代つて天下を支配し
 ようといふ下心である。秀頼は如何なる考へで、かくも敢て自分を詛ふのであるか
 と。

これは甚だこぢつけの難題である。國家安康は、善意に解釋すれば、貴重なる鐘
 の銘に家康の名を取り入れたとも云へるし、また大小の釋迦云々は、佛弟子達が互
 に交る交る主人役となるといふことである。家康がこぢつけたやうに秀頼が家康に
 代つて天下を治めることも出来るが、逆に豊臣の天下が徳川に代るとも解釋されぬ
 ことはない。しかし、家康にとりてそんな解釋はどうでも宜しい。遮二無二、豊臣

氏を苦しめんとするのである。かゝる場合、大坂方に眞の大人物あらば、この家康の腹の底を見届け、及ばずながらも、斷乎たる態度に出づべきである。淀君や君側の奸たる大野治長等が、右願左盼するは素より數ふるに足らずとするも、片桐且元も賤ヶ岳當時の槍先程にはその見識が光を發せず、老臣の微衷を盡しながら、つぎからつぎに追ひ詰められて、身を滅ぼし、大坂を滅ぼし、然も秀吉が残したる千瓢の旗印の下に、討死することが出来なかつたのは、まことに同情に堪へない次第である。

徳川家康が、難題を設けて怒り出したので、徳川氏の京都の所司代たる板倉勝重が使を飛ばせて、その旨を且元にしらせ、その供養を中止させることにした。正直な且元は非常に驚いて云ふには、これは右府秀頼公の御存知にならないことである。自分は建築を擔當し、吊鐘の銘文を清韓に頼んで作らせ、偶然こんなことゝなつたのである。私は學問がないので、銘文が出来上ると、直ぐこれを鑄造させた次第で

ある。その罪は全く私の免るゝ能はざるところである。今、大儀式は正に行はれんとし、大勢の群衆がもはや集つてゐる。いま突然儀式を止めたならば、民の耳目を驚かし、世の物議を招くことになりませう。伏して願ひするが、一先づどうか儀式を終へさせて貰ひたい。その後で銘文を毀して取除き、然る後私は甘んじて誅を受けても、毛頭、遺憾はありませんと。板倉勝重はこれを受入れないで云ふには、儀式を了へてしまへば、それは詛を成し遂げてしまふのであると。遂に儀式をやめてしまつた。そこで天下の物情は騒然として喧しくなつた。

且元、召して清韓に問ふ。清韓、服せず。乃ち清韓をして、駿河に赴きて陳謝せしむ。而して自ら其の弟元重・大野治長と、繼ぎて之に赴く。前將軍、清韓を執へ、板倉重昌に命じて京師に如かしめ、五山の僧をして銘文を注疏せしむ。僧多く其の詛を證す。且元、鞍子驛に至り、留りて敢て入らず。九月、命有り。治長を遣歸して、獨り且元を召して之を詰責す。且元、陳謝甚だ力む。淀君、且元等の見るを得ざるを聞き、其の乳母大藏と、尼正永とを遣して赴き謝

せしむ。二女、専ら銘辭を辨ぜんと欲し、急に其の句讀を習ひ、且つ誦し且つ行く。至れば則ち召し入れ、溫言慰藉、復銘辭に及ばず。江戸に往きて、夫人淺井氏を省せしむ。二女、大に喜びて意外に出づ。既に駿河に還り、且元と皆歸りを告ぐ。之を許す。獨り且元を止む。本多正純・僧天海をして之に言はしめて曰く、「將軍の意、終に解く可からず。右府、何を以て信を爲して、其の他無きを表すぞ」と。且元曰く、「願はくは教を受けん」と。二人答へず。且元曰く、「謂ふ、江戸に赴きて將軍の旨を取らん」と。二人入りて白す。曰く、「將軍の意も亦、我と同じきのみ。汝、宜しく歸りて之を熟籌すべし」と。

且元は、清韓を呼び寄せて、鐘の銘のことを問ひ訊した。清韓は、家康の云ひ分に服しなかつた。そこで清韓を駿河に出かけて陳謝せしめ、且元自らは、その弟元重および大野治長とつゞいて駿河に出かけて行つた。

前將軍は、清韓をひとつらへ、板倉重昌に命じて京都に行き、五山の僧徒をして銘文を註釋させた。僧達は多く、家康の意を迎へて、その銘が詛ひの意味を寓する

ことを證據だてた。且元は、駿府に向つて出かけたが鞠子驛に至り、家康に遠慮して、そこに留まり、家康のところには行かなかつた。九月、命令が出て、大野治長だけ送り歸し、且元一人を呼びつけて詰問した。且元は陳辯謝罪甚だつとめて家康の怒りを解かんとした。

淀君は、且元等が家康に面會することが出来ないと思ひ、その乳母たる大藏と尼の正永とを別に遣はして、家康のところに行き謝罪させることにした。憐れなる二人の女は、そんな重大な役割をつとめる柄でない。彼等は専ら鐘の銘文のことを云ひわけすればよいと思ひ、急にその読み方を稽古し、道々暗誦しながら旅をした。駿河に至つてみれば、案に相違し、手輕に召し入れて面會を許し、溫言を以て慰めいたはつた。さうして意外にも、鐘の銘文のことなど口にも出さない。駿府まで来たのだから江戸に行き、將軍秀忠の御臺所たる淀君の妹、淺井氏を見舞つて來いといふのが上氣嫌なる家康の言葉である。淺薄なる二人の女は全く意外のことで、非

常に喜んだ。やがて江戸から駿河に歸り、且元等と一緒に前將軍に暇乞ひをするこ
とにした。前將軍は、これを許した。二人の女は、大坂に對する前將軍の返事の手
紙を頂きたいと願ふたが、前將軍は最早直接面會して話してしまつたからと、事も
なげに云ふて、手紙を與へなかつた。そこで、一同のものは暇乞ひして歸途につい
た。

しかるに、別に命令があり、獨り且元だけを留まらしめ、本多正純と僧の天海を
して、云はせるには、將軍（秀忠）の御氣持が、どうしても釋然たらざるものがあ
る。右府（秀頼）はどうして證をたて、他意なきことを現さるゝのかと。且元が云
ふには、その點どうすればよいかお示しを願ひたいと。これに對し、二人は答へな
い。且元が云ふには、それではどうか江戸に赴いて、將軍の御趣旨を伺ふやうにお
願ひしたいと。二人は、引こんで、前將軍に申上げた。前將軍が云ふには、將軍の
意趣もまた自分と同じである。よろしく歸つて、よくよく考慮するがよいと。

且元遂に辭し去り、馳せて二女に土山驛に及ぶ。二女乃ち悉く之に語るに、前將軍懇諭の状を
以てす。曰く、「國事復慮るに足るもの莫し」と。且元曰く、「吾の聞く所は則ち大に諸に異な
り、前將軍、我に逼るに右府の信を以てす。吾其の意を揣るに、蓋し三策あり。淀君東して、
妹氏同居するは上策なり。右府往き婦翁に依るは中策なり。大坂を避けて他に徙るは下策な
り、三策のうち一を行はば、庶幾はくは事無からん」と。二女言はずして、退きて相言ひて曰
く、「前將軍豈に此に至らんや。是れ市正、我が君が賣らんと欲するなり」と。密かに書を馳せ
て大坂に告ぐ。曰く、「且元の形跡疑ふ可し」と。且元、之を知らざるなり。二女をして、先づ
還らしめ、自ら京師に入り、板倉勝重と事を議す。淀君、二女の報を聞き、憤恚して曰く、「吾、
太閤の妾なりと雖も、右府に於ては生母なり。何ぞ關東に屈辱せんや。寧ろ右府と城を枕にし
て死せん」と。乃ち且元を誅し、遂に兵を擧げんと欲す。治長・長益、力めて之を贊す。已に
して且元至り、秀頼に謁して三策を陳ぶ。秀頼、之を淀君に稟す。淀君、人をして且元に諭さ
しめて曰く、「後日を俟ちて面議せん」と。期に至り、且元、朝服して將に出でんとす。其の臣
小島某、外より來り告ぐるに會ふ。曰く、「淀君、讒言を信じ、公の關東に貳あるを猜ひ、兵を

伏せて之を要し、遂に大事を擧げんと欲す」と。

且元は話が纏らるので遂に暇乞ひして出發し、さきに歸つた二人の女性に土山驛で追ひついた。二女はそこで且元に對し、前將軍家康公が懇ろに諭して呉れた有様を語り、喜んで云ふには、國事はまた少しも心配することはないと。且元が云ふには、私の聽くところは大に貴女達の考へと違つて居る。前將軍は私に迫つて右府即ち秀頼公の他意なきことを證據だてよと云はるのである。私はその意嚮を測るに斯くの如き場合三つの策がある。上策としては、淀君が東して江戸に行き、秀忠公の妻となつて居る淀君の妹と同居することである。中策としては、秀頼公が駿府に行きて妻君の祖父たる家康公にたよることである。下策としては江戸から睨まれてゐる大坂の地を避けて他に移ることである。この三策の中、どれか一つを行つたならどうにか、事無く始末はつくでせうと。

この且元の所謂三策なるものは太閤秀吉の正統を繼ぐ大坂方の誇りとして受入れらるべきものではない。太閤のつれ合であつた淀君が江戸に行くなどと云ふことは、家康の妾となるやうな話である。秀頼がおめおめ妻君の祖父とはいへ、敵の大將に保護を求むるは豊臣家をして、徳川家に隸屬せしめることである。また大坂を立退いて他の場所に移るといふことは一時敵の怒りを柔げるかもしれないが、事ここへ及びて故太閤が築きたる天下の名城大坂を去ることは、既に弱體化せる豊臣氏をして全く無力ならしむることである。己を弱くして、敵の憐愍の情に訴へることは、弱體心理の持主たる人々が好んで行ふことであるが、それは却つて敵の侮を長じて滅亡を早めることである。あの際、大坂をして自衛の策を講ぜしむるのには君民一致強硬方針を決定して太閤以來の恩顧の士に懇へ、死中に活路を求むるより外なかつたのである。片桐且元は武邊の古強者で温厚の君子であつたが、非常時、超非常時の立役者として難局を擔つて立つには少しく温厚が過ぎて軟弱に惰する嫌ひがある。

孔子も君子は温良恭謙讓といふて居るが、また他の場合には發強剛毅を以つて男子事に處するの必要條件と稱してゐる。發強の發の字が面白いでないか。強くとも機に臨んで氣遅れせず發せなければ、強い男の立ち腐れとなるのである。難局に臨みては短慮操急は事を誤るが、優柔不斷は一層屢々困難の泥濘に溺るゝ結果となるのである。よつ程しつかりして居ないと、無意識的に一身の利害打算が判断構成の重要要素となり、遂に温厚は流れて、軟弱となり、卑屈となり、利益と名節と二つながら失ふ結果となるのである。大概の場合、心の怯懦に鞭打ちて強味を發揮しないと所謂妥協は墮落の第一歩となるのである。片桐且元は、墮落まではしないが、故太閤の恩顧の武將としては、餘りにも輝かしからざる哀れさを發揮したものである。

支那で宋の名臣司馬光は、所謂司馬温公と稱せらるゝ重厚なる大人物であるが、彼が伯夷叔齊を論ずる言葉は甚だ面白い。伯夷叔齊が周の粟を食はずと稱し、首陽

山の蕨を食つて餓死したことに對し、あれ程偏狹に潔癖でなくともよささうなものであるといふのが、一部の穩健なる學者連の定説である。然るに司馬光は名木は焚かるゝから香氣を放つ、膏は焼かるゝから明の役をなすのである。これを人に喩へれば死して其の美質を發揮するやうなものである。名木が焚かれず、膏が焼かれずして終を完うすれば香氣も發せず、光明も示さないことゝなるのである。徒にその特色を隠して天然の壽を保つならば、虎豹の鞞は何ぞ犬羊の鞞に異ならんやと謂つて居る。鞞といふ字は作り革と訓してある。虎や豹の毛皮もその斑紋ある特色を削り落して作り、革にしてしまへば犬や羊の作り革と選ぶところはなないといふのである。曾我兄弟も大石も敵を討たねば唯の人と云ふの類である。

温厚にして世と共に押し移るなど云ふ言葉は、節義を失ひて生を偷む徒輩に悪用せられて、却つて氣節の士を冷笑する俗論となるものであるが、天下滔滔として皆斯くの如くならば、國家の衰亡を坐視して身を完うする輩のみが跋扈することゝな

るのである。伯夷叔齊も孔子なかりせば、西山の餓夫に過ぎずといふ太史公の言葉を引用して司馬光が天下を警しめたのは痛快な考へ方である。大東亞戦争が若し難局に陥りたる際、片桐且元流のものゝ考へ方はして貰ひたくないものである。

片桐且元が提出した三策は二人の女性もこれに同意することが出来なかつた。二人は互に語り合つて曰く、前將軍がどうしてそんな事を要求するものか。これは市正（且元）がわが君秀頼を賣らんとするものであると。淺薄なる婦人をして、この疑ひを抱かしためたのは且元の不覺である。且元をして、この窮地に陥らしめたのは家康の老獪なる所以である。二人の女性は、密かに早飛脚で手紙を出し大坂方に告げて云ふには、片桐且元の様子は甚だ疑ふべきものがあると。且元はこの仕末を知らないので二女をして先づ大坂に歸らしめ、自分は京都に立ち寄り、關東方の所司代板倉勝重とその事につきて評議した。大坂城の淀君は二人の女性の報告を聞き、大に憤怒して言ふには、自分は太閤の妾ではあるが、右大臣秀頼公の爲には生みの

母である。どうして關東の屈辱を受けるものか。そんな恥辱を受ける位なら右大臣と共に城を枕にして討死しよう。そこで且元を誅し遂に兵を擧げやうとした。大野治長、織田長益は熱心にこれに賛成した。

そんな情勢になつてゐる所に、やがて且元が大坂に歸り、秀頼に謁見して前日の三策を述べた。秀頼はこれを淀君に稟議して問ひたゞした。淀君は、人をして且元に諭さしめ、暫く後日を待ちて相談しようと言ふた。そこで且元は約束の日に禮服をつけて出掛やうとする。丁度その場合、且元の臣小島某が外から歸り來り告げて云ふには、淀君が讒言を信じて、あなたが關東に二心を抱くと疑ひ、今日登城さるゝと兵を伏せて置いて、あなたを待受け殺してしまつて後に、遂に大事を擧げやうとするのでありますと。

且元大息して曰く、「噫、年少輩、我が君を誣誤し自ら亡滅を速くのみ」と。治長、内旨を傳へ

之を召すこと甚だ急なり。且元遂に疾と稱して出でず。治長、謀泄るゝを知り、惛懼して曰く、「彼素より管鑰を掌り、城内の有無を諳んず。即し兵を起して城を奪はば、悔ゆ可からざるなり。先づ發して之を誅するに若かず」と。乃ち七隊長をして赴きて之を攻めしむ。七隊長、皆肯んぜずして曰く、「市正は忠勇比無し。之を誅するは是れ嗣君の手足を絶つなり」と。是に於て、一城大に擾る。兵士、片桐氏に聚る者三百餘人。治長、之を患へ、其の兄弟を離間せんと欲し、元重を諭して且元を攻めしむ。元重答へて曰く、「家兄、誠に携貳を懐かば、吾將に大義、親を滅せんとす。必ずしも公等を煩はさず。公等、忠臣を忌害し、又人をして、刃を同氣に推さしむ。未だ令を奉ずる能はざるなり」と。秀頼の近臣今木某、潜かに來りて且元に説きて曰く、「内城八門、公、其の六を管せり。今夜、兵を潜めて城を奪ひ、治長兄弟を逐ひて、命を關東に請ひ、關東猶ほ釋さずば、則ち我が君を翼けて兵を擧げんのみ。願はくは公、速かに之を斷ぜよ」と。且元、燈檠して曰く、「吾特に讒人の來り攻むるを待ちて自殺せんと欲するなり。苟も公の言ふ所の如きは、則ち長く反命を被らん」と。因りて部下に令して曰く、「即し戰に及ぶも、矢をして内城に嚮はしむる勿れ」と。明日、七隊長、且元に諭し、質を納れ兵を弭め、

退きて其の邑に就かしむ。且元之に従ふ。十月朔、治長と質を交へ、盡く城内の管鑰を獻じ、事を致して去る。七隊長、送りて大和川の上に至り、質を還して訣飲す。且元曰く、「吾、心を苦しめて籌を運し豊臣氏を利せんと欲す。吾が上策にして聽かるれば、吾則ち地を請ひて第を江戸の郊に築き、故に其の規模を宏にし以て數年を延べん。我が君は未だ壯ならず。而して前將軍は大に衰す。吾が策亦善からずや。區々の心、未だ盡く明すに違有らず。乃ち卒に此に至る」と。因りて相郷ひて泣哭し、願望して別る。且元、遂に其の邑茨木城に歸る。遠近、騷擾す。

且元大息して云ふには、あゝ年少の輩が我君秀頼公を誤り、自ら滅亡を急ぐのみである。そこに大野治長が、淀君の内旨を傳へ早く登城しろと頻りに催促した。且元は遂に病と稱して出かけない。治長は謀が泄れたことを知り、大に懼れて云ふには、且元はかねて鍵を預つてゐて、城内の勝手をよく知つて居る。もし彼が兵を起して城を奪つたならば後悔しても及ばない。まづ此方から手を出して之を誅伐す

る方がよいと。そこで所謂大坂城七手組の隊長等をして且元を攻めさせた。七隊長は、皆且元を攻めることを承知しないで云ふには、市正は忠勇無比の士である。之を殺すのは嗣君秀頼公の手足を絶つのも同様であると。そこで城中總て大騒ぎとなつた。片桐且元の處に駆けつけた兵士が三百餘人もある。

大野治長はこの情勢を心配し、片桐の兄弟を離間しようと企て、且元の弟元重をして兄を攻めさせようとした。元重は答へて云ふには、家兄まことに貳心を抱くならば、私は將に大義親を滅して自ら成敗します、何も貴方々を煩はす必要はありません。貴方々は忠臣を忌み嫌ひしてこれを殺害せんと欲し、人をして兄弟に刃を加へしめんとして居らるゝ、そんな御命令は奉ずる譯には行きませぬと。

秀頼の近臣今木某が潜に來つて且元に説いて云ふには、内城の八つある門のうちで貴方はその六つを預つて居る。今夜兵を潜めて城を奪ひ取り、大野治長兄弟を放逐して關東の命令を仰ぎなさい。それでも關東が許さないならば、我君秀頼を助け

て兵を擧げるまでの事である、どうか貴方、速に決断なさいと。且元は眉をひそめて曰く、自分はわざと讒言の奴原が攻めて來るのを待つて自殺しませう。もし貴方の云はれる様にしたならば、死んだ後までも長く謀叛の汚名を蒙らさるゝことになりますと。斯く決心した且元は部下に號令して、もし戦が始まつても君の在ます處の内城に矢を向けてはならないと云ふた。

その明けの日に且元に同情ある七手組の隊長が且元に入質を納れ戦を止め、退出して領地に歸るやうに諭した。且元はこの意見に従はうことになつた。そこで十月一日、大野治長と人質を取りかはし、總て城門の鍵を獻上し、事務を引繼いで立ち去ることになつた。七手組の隊長等は且元を送つて大和川の邊まで行き、人質を交換して訣別の宴を開いた。

且元曰く、自分は心を苦しめ、はかりごとを運らして豊臣氏の爲になるやうにと考へた。もし自分の上策が取り上げられたならば、自分は土地を請ひ受け、江戸の

郊外に邸宅を築き、わざとその規模を大きくして工事を數年間引き延ばすつもりであつた。さうすれば、我君秀頼公は未だ二十二の壯年である。前將軍家康は七十を越して甚だ老いて居る。(盡すとは八十に達するといふ意味である)この點を考へて貰へば、自分の策もまた良いではないか。彼れこれ思ひ惱んだ自分の心も悉く明かにするひまがなく、遂にこんな仕末となつたと。送るもの、送らるゝもの、よつて相向ひて泣哭し、互に見返りながら立ち別れた。坪内逍遙博士が桐一葉の劇中に仕組んだ片桐且元と木村重成との別れはこの邊の光景を敍したものである。且元は遂にその領地の茨木に歸つた。天下に知られた大坂方の忠臣片桐且元がこの仕末となつたので遠近傳へ聞いて天下騒がしくなつて來た。

片桐且元の苦衷は憐れむべきも到底老猶なる家康に及ばず、忠義の限りを盡さんとして難局をどうすることも出來ず、一篇の悲劇を演出した。且元にも罪ありとせば、英雄ならざる罪である。この時ひそかに舌を吐きて冷笑したのは關東の古狸であらう。

木村重成誓に蒞む

木村重成が年少二十二歳の凛々しき若武者として大坂城の運命を擔つて立ち、故豊太閤の恩誼に酬んがため縦横奮撃、天晴れ名譽の戦死を遂げたのは日本武士道の華である。はじめ、徳川家康は所謂大坂城の冬の陣に臨み、天下大兵を率ゐて城を屠らんと企てたが、眞田幸村、木村重成、豊臣七手の諸隊將天下の浪人豪傑ども善謀善戦して常に攻圍軍を惱まし、力攻めではこの城、何時陥落すべしとも見えなかつた。そこで徳川家康は挑戦するに謀略を用ひしが如く、和平にもまた謀略を用ひ、大坂方の寡婦孤兒に働きかけ、壕を埋め、壘をこはしてその力を削ぎ、一息入れて後、次の機會に豊臣氏を滅ばさんとするに至つたのである。その和平外交は専ら淀君の

嬖臣大野治長等の預るところであつて、前線の勇將たる木村重成等の力及ばざるところであつた。和平條約の案文は既に決定せられた。残すところは條約確認の調印を交換する丈である。その條約の案文すら、稍々もすれば蹂躪して、反古にせんとするものが家康方の態度である。大坂城中切つての年少勇士たる木村重成は選ばれて、その調印を見届ける使者となつたのである。木村重成が馬をうたせて茶臼山の敵陣に使い、その使命を完うして引揚ぐるところは繪に書いたやうな雄々しき青年將校の姿である。これは古來演劇にも仕組まれて日本青年武士の士氣を鼓舞したものであるが、日本外史における山陽の筆はこの青年武將の姿を目のあたりに躍動せしむる趣きがある。(三二一頁参照)

是の時に當り、天下の諸侯皆東軍に従ふ。未だ至らざるは獨り島津氏のみ。京極高次の子忠高従ひて城を攻む。其の母常光、京師に在り。前將軍、其の淀君の妹たるを以て、人をして之を

迎へしめて、和議を講ぜしむ。又陰かに城兵を誘降す。淀君、遂に治長・長益をして秀頼に勸せしむ。秀頼、七隊長及び新附の諸將を召して議す。或ひと曰く、「關東の謀は測る可からず。宜しく城を嬰る二三年、以て敵の變有るを俟つべし」と。或ひと曰く、「諸侯に援くる者無くして、城兵に貳ある者有り。貳有るの兵を以て、援無きの城を守る。而して城内の糧仗は、以て三年を支ふるに足らず。講和して以て後圖を爲すに若かず」と。治長・長益、和せんと欲し、秀頼に説くこと甚だ力む。秀頼曰く、「片桐且元、我が爲めに忠を盡して無事を計る。汝が輩乃ち之を沮し、我を勸めて事を擧げしむ。今何ぞ前言と相反するや」と。會と常光氏至り、淀君を懲愆し、數と往復して東旨を傳ふ。終に約す。「客兵を逐ひ、周池を填め、長益は子尙長を出し、治長は治德を出して質を爲さん」と。十九日、和成る。

是の時に當つて、日本六十餘州天下の諸侯は皆東軍に従ひ、攻圍軍に馳せ參じて徳川家康の指揮下に立たざるものは、唯一人薩摩の島津氏あるのみである。京極高次の子忠高も東軍に従つて城を攻めて居つた。その母常光(佛門に入つた名である)

は京都に在つたが、これは淀君の妹である。前將軍徳川家康は謀略の手先としての女性の見通さなない。人を遣はしてこれを迎へ、和議を講ぜしむるやら、城兵を誘惑して降参せしむるやら、いろいろ手を盡した。勝氣であつても女性の浅間しさ、淀君が遂にその手に引つかつた。

ニコポンでは天下第一の徳川家康が後に居り、血を頰けた妹が使者となつて安易にして幸福さうに見ゆる和平の斡旋を爲すのである。淀君がそれに迷されるのも止むを得ない勢である。淀君は遂に動き、和平のことを大野治長、織田長益をして秀頼にすゝめさせた。

秀頼は恩顧ある七手の諸隊長及び新たに馳せ加はつた將士達を召して和平を議題に供した。或ものは強硬論を吐いて云ふには關東方の謀は奥底が知れたものでない。宜しく城に據りて、二三年戦を繼續し、以て敵方に變事の起るのを待たうでないかと。また或人は軟弱論を持ち出し、諸侯の中で誰も助くるものは無く、城内の兵士

は二心を抱いて居る。こんな二心ある兵を以て孤立無援の城を守つても、糧食・軍需は三年間も支へることは出来ぬ。これは一先づ媾和して後日の謀事をなすがましである云ふた。大野治長、織田長益はもとより和平を切望する者であつて極力之を秀頼に説いた。

秀頼が云ふに、先に片桐且元は余のために忠義を盡し、無事を圖らうとした。然るにお前達がこれを遮り、余に勧めて事を擧げさせたのでないか。然るに今となつてお前達はどうして前言と相反するのかと。丁度その際、淀君の妹たる常光氏が大坂城中にやつて来て淀君に説きすゝめ、屢々城内と攻圍軍との間を往復して關東方の意思を傳へるのである。遂に關東方の要求通り、呼び集めた客兵たる浪人ものを放逐し、城のまはりの壕を埋めることを約束するに至つた。そこで話を堅めるために、織田長益はその子の尙長を出し、大野治長はその子の治徳を出し、關東方に人質としてその月の十九日に和議が出来あがつた。

翌夜、茶臼山の下、火を失し、二十餘營を延焼す。幸村曰く、「敵、新に和して備を懈る。宜しく之を掩撃すべし」と。治長等許さず。二十日、前將軍は板倉重昌を遣し、將軍は阿部正次を遣し、入りて誓に蒞ましむ。秀頼は木村重成を遣し、出でて誓に蒞ましむ。而して郡良列を以て之が副と爲す。重成、年少にして風儀有り。盛服して馬に騎り、茶臼山の營に抵り、轅門より馬を下る。關東の諸將、驢を幕中に設け、重成を引く。重成、揖せずして入る。永井直勝・土井利勝、之を擯し、下座に坐せしむ。重成、顧みずして進み、秀頼の旨を敍し、然る後に退き伏す。前將軍曰く、「是れ常陸介の子なるか。何ぞ酷だ父に肖たるや」と。因りて其の齡を問ふ。曰く、「二十二なり」と。曰く、「然らば則ち右府と同年なり。往日、鶴野・今福の戰、壯勇無雙なり」と。重成、慨然として對へて曰く、「臣、遺憾有り」と。已にして誓書出づ。押血模糊たり。重成曰く、「淀君は婦人、恐らくは疑ふ有らん。敢て請ふ。更に面のあたり鮮血を刺せ」と。前將軍、指に鍼して曰く、「年老い血枯る」と。重成聞かざるもの爲す。遂に血誓を取り、拜謝して退ぎ、諸將に禮して乃ち還る。

十九日（慶長十八年十二月）に和議が成立し、その翌夜、家康の本陣たる茶臼山の下で出火して火事が起り、二十餘の陣營に延焼した。そこで大坂方の軍師たる眞田幸村が云ふには、これは敵方が新たに和議成立して警備を怠る證據である。宜しくこの機に臨みおつとり圍んで撃滅するがよいと。和平に熱中してゐる大野治長等は固より承知しない。翌二十日、前將軍家康は板倉重昌を使者とし、將軍秀忠は阿部正次を使者とし、城内に入つて宣誓式に蒞ましめた。そこで秀頼はこれが答禮として木村重成を遣し、城外に出でて宣誓式に蒞ませた。重成は正使であり、郡良列は副使である。重成は年少にして風采もよく儀禮も正しく禮服をつけて馬に乗り、茶臼山なる家康の本營に騎りつけた。盛服馬に騎すとあるは大禮服といふ様な意味で、恐らく素襖垂衣を着用し、悠々として馬に乗つたのであらう。そこで軍門から馬を下つて式場に臨んだ。こゝに轅門とあるは、戰車の轅を押し立て、臨時の軍門とするので、轅門とは軍門を指すのである。そこで居並ぶ關東方の諸將は、軍幕の中に

席次を作つた座席を設け重成を案内した。重成は颯爽として禮もしないで尻目にかけて進み入つた。關東方の荒武者永井直勝、土井利勝は重成をとらへて席次のなかの下座に坐らせやうとする。重成は拂ひのけ、一瞥をも與えずして家康の前に進み行き、秀頼の使者たる口上を述べ、然る後、飛びさがつて平伏した。

これは使節として趣旨を述べ了るまでは大坂方と關東方と對等である。強要せられても下座に着かぬところが、使君秀頼を代表する若武者重成の見識である。家康はこの姿を見て云ふに、これが木村常陸介の子であるか、どうして斯くもよく父に似て居ることかと、そろそろ懐柔にとりかゝるのである。然るに重成はツンとして一向感じない姿である。そこで重ねてその年齢をたづねると答へて曰く二十二と、簡單明瞭とりつく島もない。家康は曰く、それでは右府秀頼公と同年だな、然るに先日鶴野今福に於ける戰鬪振りは勇壯無双天晴れ見事であつたぞと、覇權を握る天下の家康公にこゝまで云はれると大抵の者ならば參つてしまふのである。

況んや和議は成立した。形式的に云へば今日から敵味方ではない。權力富貴の源泉たる家康公の覺え目出度しと見れば大抵のものならばこちらの方で有難くなつてしまふのである。そこで當世風に就職のことはどうぞ宜しくペコリと頭でも下げてしまへば、重成の重成たる面目はない。然るに流石は城内切つて器量人たる若き木村重成である。彼は一念主君を想ふもののみである。今、家康が指摘した鶴野今福の合戦には敵將の數營を突破し、直に家康の本陣を突かんとしたのである。鶴野今福の合戦壯勇無双なりと云はれて見ると、無念の憤りがこみ上げて來るのである。そこですかさず「臣有遺憾焉」と突槓の間に響きの聲に應ずるが如く答へたのである。あゝ云はれたらこう答へやうなどと云ふ計畫では、こんな名返答は出ないのである。天地を貫く誠忠の心、全身に充滿する男子の意氣地、觸るれば直に答へとなつて現はるのである。

頼山陽が「臣有遺憾焉」と書いたたつた五字、木村重成の風采、面目、感慨を寫

し得て餘すところがない。鶴野今福の合戦天晴れであつたぞと褒めてかゝつたところを、その合戦に古狸のやうな貴様の白髪首、叩き斬ることが出来なかつたのは終生の遺憾、その結果として屈辱極まる今日の和平、重ねて遺憾千萬であると決然として云ひ放ちたる所富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず、正氣凛として關東の陣中を壓倒するの勢ひがある。重成としては役目を果せばそれで良いのである。この際餘計な雑談は一切無用である。老臣片桐且元が幼君秀頼に對して、忠義ではあらうが、關東の顔色を窺ひて戦々兢兢たりし姿に較べると、若さと強さと健氣さが溢るゝやうではないか。

そこで家康の方では起誓文を取り出して示したが、その血判の血が薄くぼやけて居る。重成は一見して云ふに淀君は婦人でありませぬ。こんなぼやけた血判では疑ひを抱くかもしれませぬ。敢てお願いいたしますが、私の面前でもう一度指を刺して鮮かな血を示して戴きたいと。前將軍家康は止むを得ず指に鍼を立て、血をしぼり

ながら、どうも歳とつて血が枯れて困る、と聞えるやうに云ふのである。重成は左様の言葉は一切聞えないかの如く平氣で控へてゐる。さうして遂に血判の誓文を受取り鄭重して拜謝して退き、今まで尻目にかけてゐた諸將に會釋をして引きとつた。家康が獨言のやうに年老ひて血枯るといふところに安直に應對して、はい、それならもう結構でございますなど云つて重成の値打はないのである。重成聞かざる者の眞似すとあるところ、その氣合が見ゆるでないか。「重成年少にして風儀有り」より以下數行、馬をうたせて茶臼山の陣に向ひ綺羅星と連る關東諸將士の前を傍若無人に濶歩しながら、しかも禮儀正しく一寸の隙もなく、僅か數言の應對にも大坂城を擔つて立つの見識と責任とを示すあたり、山陽の筆は描寫の妙を極めて既に忠義のために死を決せる若武者の姿を躍如たらしめて居る。

日本武人の教育は劍戟闘争を通じて敵陣にのぞむ時ばかりでなく坐作進退、一言の應答に至るまでこれに全生命を打ち込むのである。一言口上を誤れば取りかへし

の付かぬ恥辱を受けるのである。さうすれば一言の誤りは即ち武士の不覺として腹を切らねばならないのである。今日の大日本を代表して外國と折衝するもの、彼の若武者重成に劣らざるもの幾許ぞと云ひたいのである。

且日、東軍、卒十萬人を發して外城を圍ち、空濠を填め、吏七名を以て監す。是の日、島津氏、始めて兵庫に至る。居ること二日、治長、長益と俱に往きて兩營に調す。前將軍、治長を見て、面のあたり之を稱揚して曰く、「卿、年少くして、能く秀頼の爲めに事を擧ぐ。何ぞ其の壯なるや。吾、上野介をして、將軍に事ふること猶ほ卿のごときを欲するなり」と。上野介は、本多正純なり。因りて正純に命じて、其の上衣を請はしむ。遠近傳へて榮と爲す。治長、意氣益々驕る。其の夜、前將軍、遽かに京師に入る。吏、濠を夷ぐるの淺深を請ふ。前將軍、晒ひて對へて曰く、「三歳の小兒をして上下するを得可からしめんのみ」と。初め城中の諸將、周池を填むるを約し、以爲へらく「西南の外濠に止る」と。居ること數日、外濠既に埋み、遂に内濠に及ぶ。城中大に驚きて、皆治長を咎む。治長人をして出でて監吏を詰らしむ。吏對へて曰く、

「吾が輩、命を受けて周池を填む。以爲へらく、周とは内外を周るの謂なり」と。是の時、將軍、猶ほ岡山に在り。治長、自ら馳せて岡山に赴く。岡山の將吏、皆曰く、「是れ大御所の命のみ」と。治長乃ち使を京師に馳せ、板倉勝重に因りて之を請ふ。勝重曰く、「本多正純此の事を主る。我が與らざる所なり」と。還りて正純に詣る。正純、疾と稱して出でて面せず。往復數回、而して東軍、益々卒を興し、晨夜督責して、明春に至り塹壘皆夷ぐ。獨り牙城を存するのみ。

和議が一度成立すれば關東方は遠慮會釋もしない。忽ち十萬人の人夫を繰り出し、外城をぶち毀し、空濠を填め、役人七名を以てその工事を監督させた。これまで大坂攻撃には顔を出さなかつた島津氏が和議となつたので始めて兵庫に來り、そこに二日滞在して大野治長、織田長益と共に前將軍と將軍の兩人に謁見した。

前將軍徳川家康は大野治長を見て面前で褒めそやして云ふには、君は年若なのに、能くまあ秀頼のためにあれ丈の大事を爲したものだ。實に壯快である。自分はここに居る上野介等が將軍秀忠に仕へて君が秀頼に仕へたやうな忠義にあやからせたい

ものであると。こゝに家康が上野介といふのは徳川の謀臣本多正純のことである。そこで家康は正純に命じて治長にあやかると爲にその陣羽織を貰へ受けさせた。實に齒の浮くやうなお世辭である。然るに輕薄な世間では遠近にこれを傳へて本多正純の光榮であるとした。それはそれでよいとして、おだてられた大野治長が意氣益々驕るとあつては沙汰の限りである。風霜を挾むが如き木村重成の態度と比較して天地雲泥の相違あるではないか。

家康は話が片づいたのでぐつぐつしてゐない。その夜のうちに京都に行つてしまつた。お濠埋立の役人がどの深さに濠を埋めたらよいかと訊ねると、家康は嘲笑つて三歳の小兒でも上り下り出来る深さにするがよいと答へた。抑々最初には城中の大坂方の諸將は周りの池を填むるといふ約束だから、西南の外濠を填めればそれでよいかと思つて居た。然るに數日間模様を見て居ると、外濠は既に埋め盡して内濠にまで及んで來るのである。城中では大に驚いて條件が違ふといふので、和平條約

締結の當事者たる大野治長を咎めた。治長は人を遣して埋立監督の役人を詰問させると、役人の方では私共は命令を受けて周りの池を填めるのである。周りとは讀んで字の如く内外を周る意味だと心得て居りますと答へるのである。まるで手もつけられない。この時將軍秀忠はまだ大坂城外の岡山に居るので、治長は自身で馳けつけて岡山に行つた。岡山の諸將や役人達は皆これは將軍の知らぬことで、大御所家康公の命令だと云ふのである。

そこで治長は不見識にも慌たゞしく使を京都に馳せて板倉勝重を介して大御所家康に話させた。さうすると勝重が云ふには、本多正純がこの事の主任者であつて、自分は關係して居ないと、そこで今度は本多正純の所に行くと、正純は陣羽織まで頂いて大野治長の光榮にあやかりたいと云ふた男であるが、こうなつては輕蔑して病氣にかこつけ玄關拂ひである。先に家康におだてられて意氣揚々たりし大野治長は符箋でもつけて廻されるやうに彼方此方を數回も往復して廻つたが、東軍はそん

なことに頼着なく、益々人夫を狩り出し朝早くから夜遅くまで工事を督勵して明春になると塹壕も堡壘も皆平かになり、すべてを毀し盡してひとり残るのは本城のみとなつた。

誠忠日月を貫く木村重成の態度と輕佻不薄なる大野治長の態度を比較對照して後進の人の參考となるではないか。

盛親矢尾堤に上り、藤堂氏の旗を望み、乃ち退きて堤下に伏す。敵の先鋒の二將以爲へらく、「走る」と。田を徑りて堤に上れば、則ち盛親大に呼びて起ち、撃ちて之を走らす。重成の游兵も亦來り援け、遂に其の二將を斬る。重成、井伊直孝と若江堤に相拒ぎ、撃ちて其の前隊を破り、重成槍を揮ひて挺進す。向ふ所皆靡く。敵將山口重信等三十餘人を斬る。而して其の兵、死傷略と盡く。乃ち隴に據りて息ふ。敵、生兵を以て之に乗ず。飯島某、重成を捉めて曰く、「蓋ぞ城に還らざる」と。重成、頭を掉ひて進み、遂に死す。直孝の部兵、其の頭を取りて、之を前將軍に獻す。前將軍之を検す。冑纒餘無くして、頭髮に香有り。前將軍歎惜して曰く、

「是れ預め死を決するなり」と。

斯くの如くして大城方の猛將勇士にとりては遺憾千萬なる媾和となつて兵は四散し、濠は填められてしまつた。かくて大坂が衰弱すると、家康は再び難題を吹きかけて所謂大坂城の夏の陣となり、豊臣氏の滅亡となるのであるが、木村重成は最後まで奮闘して壯烈無双なる戦死を遂げた。外史の内からその一節を抽出してこゝにつけ加へる。

長曾部盛親は大坂方の猛將である。矢尾の堤にのぼり藤堂勢の旗をのぞみ退いて堤の下に伏せた。敵の藤堂勢の先鋒たる二將は盛親が敗走したのと思ひ、田を渡つて堤にのぼると、伏せて待ち受けたる長曾部盛親は大呼して立上り、忽ち撃ちて藤堂勢を敗走させた。この時、木村重成の率ゐる游軍もまた來りて盛親を助け、遂に藤堂方の二將を斬つた。木村重成はかくて音に名高き關東方の猛將井伊直孝と若江

堤において互に拒ぎ戦ひ、重成は遂に討つて井伊勢の前隊を破つた。重成自ら槍を揮つて挺進し、彼の立ち向ふところ敵みな靡き崩れた。重成は敵將山口重信等三十餘人を斬つたが、自分の兵も死傷のため殆ど盡きてしまつた。そこで丘にのぼつて一息いれて休んだ。

敵はこれを見て新手の兵を以つて攻めかゝつて來た。飯島某が重成を止めて、どうして城にお歸りにならないかと云ひ、引上げんことをすゝめたが、重成は頭をふりたて、前進し、遂に討死した。井伊直孝部下の兵がその首をとつて徳川家康に獻じたが、家康がその首を實檢すると、胃の紐はぶつつりと結び切つて餘すところがない。その胃をとりのけると頭髮から名香の薫りがする。家康は且つ歎じ、且つ惜んで、胃の紐は残すところなく結び切つて居る。これは豫め死を決して居つたものであると云ふた。

家康は敵ながら重成の心事を知るものである。胃纓餘り無くして頭髮香り有り、

前將軍歎惜して曰く、是れ預め死を決するなりと。そのまゝ讀み下せば餘韻嫋々たるものがあるではないか。

木村重成が茶臼山に使したのは大坂の運命既に極まりたる際、止むにやまれぬ武士の意氣地を示すものである。逆境に處して泰然自若たる實に男子の本懐である。しかも日本武士はどこまでも禮節に正しい。重成の態度は飽くまで町重であり、沈着であり、上品であつて、少しも悪るびれた所がない。敵から云はせても一點非難の打ち所がないばかりか、惚れ惚れしたやうな見事な態度である。しかも僅か數言の應對のなかに忠節も、意氣地も、武士道も溢るゝ程に盛られて居つて男らしき簡潔な言葉遣ひの典型を示してゐる。青年武士の修養もかくまで至れるものかと、眞に歎惜せざるを得ない。

立場は逆境にあるが、應答の一々の區切り毎に、天下の大將軍徳川家康を捻ぢ上げて居るでないか。男子は逆境にある時、斯くの如く強からねばならぬ。これが武

士の意氣地である。

しかし日本武士は順境に立つ時、必ず敵に對して思ひやり深く寛大である。西郷隆盛が錦旗を奉じて東征しながら、江戸城の使者山岡鐵舟と應對した時には西郷と山岡は武士道の鏝ぜりで精神的に問題を解決したので、西郷の方に錦旗を背負つた勝利者としての傲慢振りもなければ、山岡の方に戦ひ敗れ、城陥らんとする敗北者のひげ目を示すところは少しもない。更に勝海舟が愈々西郷と談判するに及びては寧ろ勝海舟が示した機鋒の方が鋭いやうである。然るに、相手方の立場を諒解して言葉の上に勝敗を争はず、大腹中に一切を纏めて行くところ、大西郷の大西郷たる所以がある。西郷は江戸城を受取りて、東北征討の途にのぼつたが、庄内藩士が拳大の地に據りて官軍に抗し、音に名高き薩摩の門閥隊を討ち破り、その主將を斬つた時、總參謀たる西郷は却つて敵方の武勇を嘆賞し、大義を明かにし、武士道を立て、庄内藩の歸順を促した。かくて庄内が錦旗の前にひれ伏すに及んでは却つて庄

内藩士の心中を思ひやりて、その歸順の式を終ゆる時など、西郷の方が却つて同情の涙にむせんだ程であつた。さうしてこの城は、書面の上だけで受取り申す。後は戦上手の貴方々に籠つて貰はねばならぬ。武器彈藥軍用金そのまゝで宜しう御座る。こうなればおはん方の殿様はわしの殿様も同様である。よく大事にしてなあ、さうして海に向ふのオロシヤの方にはしつかり備へを頼みますぞと言ひ捨て、疑もせねば警戒もせず、わしは忙しいからといつて、一切を昨日迄の敵に委せてサツサと引上げた。庄内藩士は實際、感激嗚咽して云ふ所を知らず、この人のためになら命も惜しくないと思つたさうである。

果せる哉、明治十年の西南戦争には當年の庄内武士の子弟が多數薩軍に投じて壯烈なる戦死を遂げた。勝海舟なども越後路にさし向けられた官軍の陣中に西郷のやうな男が居たら、所謂小藩の大人物河井繼之助をして可惜、官軍に抗して身命を擲つこともなかつたらうにと云つてゐる。西郷の斯くの如き態度は、豊臣秀吉が嘗つ

て島津を征伐し、島津氏の出で降るに及びて武士道によりてその面目をたて數百年の御舊家である。宜しく御頼みすると言ひ捨て少しも疑ふ所なかつた流風を傳ふるものと云はれて居る。

西郷隆盛が征韓論の際に、彼が希望せし如く、單身朝鮮に使せしめられて居たならば、あの巨大なる軀を京城の朝廷のなかに投げ出して、赤心を披瀝することによりて、戦はずして問題を解決し得たかもしれない。

幸村戦死

眞田幸村が武略第一の名將たることは當時天下に隠れもなく聞ゆるところであつた。關ヶ原の合戦に際し、東北より馬を廻らして、西に向はんとする徳川の御曹司秀忠の大軍を、信州上田の孤城に邀撃して東山道を下る能はざらしめ、秀忠をして

天下分け目の關ヶ原に間に合せなかつたより以來、彼は浪人して野に隠れても天下知名の名將である。軍師といへば直に眞田のことを指すものと解せらるゝ程であつた。

彼は太閤の舊誼を思ひて孤城落日の大坂に馳せ參じたが、最初の冬の陣以來、彼の戦略は積極方針であつた。彼は援けなき大坂の孤城を死守し、坐して滅亡の日を待つよりは、乾坤一擲の英斷を以つて、大和路より進出して宇治橋を扼し、伏見を抜き、京都を占據して、聖明の御裁斷を仰ぎ奉り、天下の要衝を把握して東軍を惱まし、關西諸侯の向背を制せんことを主張した。しかし、その戦略は大坂城上層の採用するところとならなかつた。彼はそれより、以來上層の拘束を受けて戦をなすことの困難なることを知り、自ら玉造の岡に出城を築き、遊軍の將として奔放自在なる單獨行動により大局の勢を制せんとしたのである。

丁度ヒットラーがドイツ労働黨の第七人目の黨員として入黨し、他の拘束を受け

ずして宣傳部を擔任し、宣傳部の機略縱横なる活動によりて労働黨全部の大飛躍を促進せんと企てたやうなものである。天下の名將眞田幸村は嘗つて十數歳にして信州上田に七百の小勢を以つて父を助けて數萬の大軍に一泡吹かせたものであるが、それは少數勢と雖も彼が養ひたる恩顧の郎黨だからである。所謂日本的全體主義精神が大将より一步卒に至るまで横溢してゐたからである。

楠正成も笠置山の行宮に參内し、赤松その他の諸軍勢を率ゐて關東と決戦せんことを命ぜられたる時、彼は自己の訓練せざるバラバラの聯合軍を率ゐて、團結ある北條の軍と不得意なる野戦を爲すの自信なきを慮るが故に、河内に歸り山國の精兵を提げて金剛山に籠り、かねて練達せる山岳戦によりて天下の勢を制せんとしたのである。もし、眞田幸村が彼の智謀を以て大坂城の全軍を指揮する權力を與へられてゐたならば金剛山における正成の如く天下を驚かす戦争振りを發揮し得たかもしれない。

彼は最初の冬の陣においてよく戦ひ、天下の大軍を合する徳川勢をして啞然として爲すところを知らしめなかつた。そこで老獪なる徳川家康が和平謀略によりて、大坂城の寡婦孤兒を中心とする政治上層に働きかけた時、彼は絶対に非和平方針であつた。況んや堡壘を毀ち、城池を填むるがときは自ら手足を絶つものとして極力にその不可なるを主張したものである。されどその説は、例によつて行はれなかつた。

かくて慶長十八年十二月十九日の構和となりて所謂夏の陣は終熄した。果せるかな、徳川家康が希望の如く壘を毀ち、濠を埋めての後は暫くの猶豫もならず、翌元和元年一月からは遠慮も會釋もなく、次つぎに難題を吹きかけて所謂夏の陣を激發するに至つた。これは徳川方において豊臣打倒の既定方針である。

窮鼠遂に猫を嚙まざるを得ず。元和元年三月大坂方が再び兵を擧げたる時には、天下の浪人十二萬を集め得たが、今度の戦は壕なく、柵なく、その勢、到底前役に